
人生ゲーム～おきのどくですが ぼうけんのしょは きえてしまいました～

Geronimo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生ゲーム〜おきのどくですが ぼうけんのしょは きえてしまいました〜

【Nコード】

N8842Q

【作者名】

Geronomo

【あらすじ】

「《時間逆行》。それが貴方に与えられた、道具です————」

高校生の時田司は、ある日、金髪碧眼の美しい『天使』と出会う。

彼女に渡された【ぼうけんのしょ】は、一見なんの変哲も無いただのファイルだが、その正体は時間を自在に操り、セーブ、ロードを行えるという、人智を遙かに超越した神の道具だった！

そんな素敵アイテムを手に入れた司は、自分の人生を薔薇色に変えていこうとするが、ある凶悪な殺人事件に巻き込まれて……？

—————108の異なる性質を持つ、世界の法則を歪める神秘の【道具】。それらを操る所有者達による、命を賭けたサバイバル・ゲームが幕を開ける！！

エピソード

時間は、暴力をふるう。

これこそが、ただひとつの暴力である。

「他の人があなたに帯を結びつけ、行きたくないところへ連れて行くであろう。」

時間は、人が行きたくないところへ連れて行く。

私に死刑の宣告がくだされたでしょう。

待っている間に、時間がとまるのならば、私は処刑されないだろう。

どんなにおそろしいことが起こるかは知れたものではないのだが、時間が止まり、星の歩みがとまるようにと望むなどということが可能だろうか。

時間の暴力は、たましいを引き裂く。

その裂け目をとって、永遠がはいつてくる。

——シモーヌ・ヴェイユ 『重力と恩寵』——

プロローグ『さよなら常識空間』

雨が降る。雨が降っている。細かい水滴が全身を叩く。

目を前へと向ける。一人の男が横たわっていた。夜の帳につつまれ、数少ない照明にライトアップされたその様は、前衛芸術のようにも見えたし、ただの生ゴミのようにも見えた。

男は死んでいた。当たり前だ。殺したのだから。それで、この後は、どうするつもりだったっけ。

内臓がぶちまけられ、ビルとビルの間の袋小路を装飾する。意図的に行った解体作業だが、今は手を休めて、ただ、それを見ていた。別に初めての殺人で気が動転しているわけではない。

初めて酒を飲んだとき、大して驚きは無かった。「なるほど、こんなものなのか」といった具合に、身体はアルコールを受け付けた。初めて煙草を吸ったとき、大して驚きは無かった。「なるほど、こんなものなのか」といった具合に、肺は紫煙を受け付けた。それに似た衝動だった。

こうなることを望み。期待して行ったのに、大した感動も、驚きも無かった。「なるほど、こんなものなのか」といった具合に、心は殺人を受け付けたのだ。

正直、拍子抜けだった。もうすこし心に響くものがあったかもしれないか。そう、思った。

こうなるともう、ただの作業だった。事前に決めておいた手順通りに『装飾』を続ける。

だが、心の何処かでこうなることを予測していた自分がいた気がする。

酒も、煙草もそうだったから。前もって期待しておいたほどの感動は無かったから。

しかし、中毒性だけはあるのか、酒と煙草は今も止めていない。感動は無いが、情性で続けている。

だから、多分、

これもそうなるんだろうな、と、なんとなく、そんな気が、した。

一章『君と僕』

二者択一。確率は2分の1。それで俺は今回、勝利を奪うことが出来る。

テーブルを挟んで反対側では日比野響が挑発的な笑みを浮かべながら、二枚のカードをこちらに差し出していた。カードの内訳はスペードの2と、ジョーカー。こちら側には裏面が向けられており、透視能力者でもない限り、どちらがどちらなのかは判らない。しかし俺は単純に運否天賦でカードを選ぶような事はしない。これまでの八回のゲームで積み重ねてきた経験があるのだ。勝つ確率を少しでも高める何かがあるのなら、それを模索するべきだ。

ウェイトレスのお姉さんが、バケツのような容器に大量のアイスやフルーツを盛った、規格外の大きさを誇るパフェを持って、俺たちの座るテーブルへとやってきた。

「『店長一押しデビルズマウンテンパフェ』をお待ちのお客様」

日比野が軽く手を挙げると、お姉さんが彼女の目の前にパフェを置いた。そして見事なまでの営業スマイルをその顔に貼り付けて「ごゆっくりどうぞ」というと店の奥にひっこんでいった。若干笑顔が引きつっている気がしたのは、ファミレスの片隅でババ抜きに興じている俺たちが原因なのか、あるいは胸焼けがしそうなネタなのか思えないデザートが原因なのか。俺としては後者だと思いたい。

「小休止だな」

日比野はそう言ってカードをテーブルに伏せると、《悪魔の山》の二つ名を持つそのパフェにスプーンを通し始めた。どうやらパフェを食べるまで、勝負は中断されるらしい。チョコレートソースがふんだんにかけられたそれを、幸せそうな顔をして日比野は頬張る。まるで世界で一番幸福ですといわんばかりのその顔は、なんと、いうか、とても――

「それにしても大きいな」

思わず俺はそんな感想を漏らした。同時に意識を日比野からパフェへと移す。無理矢理、というか苦し紛れにも近いつもりで言った言葉だが、決してそれが不自然にならないぐらいにパフェは大きかった。ゲームを始める前に注文したのに、大詰めになるまで登場しなかった理由も頷ける。甘いものが苦手な人間なら裸足で逃げ出したくなる。こんなものを一押しする店長の下では、正直言って働きたくは、ない。

「まずかったか」

その日比野の言葉が、値段の事をさしているのだと気づくのに、少々時間がかかった。確かにその値段は大きさに比べても遜色の無いほど高く、一高校生の財布にはキツイものだったが、

「リスクはお互い様だろ」

そう、支払いの可能性はトントンなのだ。ファミレスの会計を賭けたババ抜き勝負。高い商品を頼んだ日比野だが、俺に負けた場合は自分で支払わなくてはならない。事実、五本先取のルールで始まったこのゲームで、日比野は早々に四連敗し、俵に足がかかった状態になった。もっともそこから四連勝し、お互い後が無い状況にまでこぎつけたのだが。

「リスクはお互い様、ね。それは違うな」

日比野は俺の言葉を否定する。

「どう違うんだよ」

「そういった俺の至極まっとうな反論に、日比野は口許を斜めにしながら

「始まる前にも言ったが、このゲームは、私が必ず勝つ勝負だ」

そう、言い切った。

俺の幼馴染である日比野響は超人的に賭け事に強かった。というよりも対人ゲームに関して、と言ったほうがいいかもしれない。トランプやUNOなどのカードゲームはもとより、ボーリングやビリヤード、はたまた麻雀や丁半博打などで無類の強さを誇っている。俺は何度も日比野が戦っている姿を見ているが、負けたことは見たことが無い。超人的な読みが強さの秘訣なのか、あるいは絶対的な集中力が要因なのか、それともそんな事とは全然関係の無い他の何か絡んでいるのか。素人目の俺には良くわからないが――兎に角、日比野は無茶苦茶に強かった。

が、それを無条件で肯定するほど俺も素直じゃない。

「自信たっぷりだが、お互い後が無い状況で、しかも次は俺が引く番だろう。どう考えても日比野の方が不利だろ」

「わかっていないな。最初の四連敗は次の五連勝の為の布石だ。あの四連勝で君は自分の思考回路という情報を晒してしまったんだ。

次に君は間違いなくババを引くよ。絶対に。そしてその次の番で私が君のクラブの2を引く。それで終わりだ」

悠然とそう言葉を重ねた日比野は俺から再び目を切り、パフェに集中しはじめた。金色に染めたショートヘアがさらさらと揺れる。

「それにしてもこのパフェは美味しい」

擬音をつけるなら《ハムハム》とか《ムクムク》とかいったものになるのではないか。そんな様子でパフェを食べ続けている日比野が不意にそう言った。

「そうなのか。大きいからして、てっきり大味かと思ったのに」

「いや、なんというかバナナとアイスと生クリームの配分が絶妙というか、砕いたナッツの香りがそれらのハーモニーを引き立てると言うか——ええい、一口食べてみる」

料理漫画のような解説をしようとして志半ばで諦めた日比野はスプーンにアイス、バナナ生クリームにチョコソースを乗せると、此方に差し出してきた。正直なところ、殆ど作り方の決まっているパフェに美味い不味いがあるのかなど、懐疑的だった俺だが、その動作に動揺する。

ええっと、それは、所謂「あーん」という奴では無いだろうか。内心の動揺を必死で押し隠しつつ、俺は対応に慌てる。スプーンはテーブルの中央あたり、やや俺寄りで止まっている。それは日比野が意図的に止めている訳ではなく、女性の中でも小柄な彼女が自然に腕を伸ばした結果、必然的にそこで停止するが故だった。

俺が少々身体を傾ければ直接口に入れることができる。だがしかし、若干とはいえ距離がある以上、俺も手を出してスプーンを受け取るほうが自然ではないだろうか。「あーん」とかバカップルぐら

いしかしいですし、そんな事をしたら「何勘違いしてんだコイツ」
とか思われて引かれはしないだろうか。いや、しかし同一のスプー
ンを使っていることで間接キスは確定しているわけだし、そもそも
そういった観念に日比野は無頓着な気がするし。

などと混乱気味な俺はつい臆病な部分が出て、左手でスプーンを
受け取ってしまった。

「あ」

ほんの少しの後悔の念が鎌首をもたげたが、それをおくびにも出
さないようにして俺はパフェを口に運んだ。

「どうだ」

日比野が期待に満ちた目で此方を見上げる。いや、だから、上目
遣いは反則の気がする。正直俺は甘いものが得意ではないタイプの
人間だし、普通のチョコレートパフェとの明確な相違点も挙げるこ
とはできないが、そんな顔をされたら、

「確かに、美味しい、気がする」

そう、嘘をつくしかないだろう。

俺からスプーンを受け取った日比野は、そうだろう、そうだろう、
と言いながら再び笑顔でパフェを食べ始めた。

うむ、人間関係を円滑にする為の嘘は必要経費なのですよ。

「あれ」

日比野は手を止める。

「どうした」

「そういえば、君は甘いものが苦手じゃなかったか」

「知っててやったんじゃないのか」

「お前は私をどんな人間だと——いや、それよりも嘘をついたな」

十秒弱でばれた。途中で挿んだ俺の冗句も効かず、日比野は俺を睨みつける。

「もう駄目だ。絶対に、手を抜いてやらない」
日比野はゆっくりとそう、宣言した。

——もとから手を抜くつもりなんてあったのですか——

そんな事を言えるはずも無く、再開されたゲームで俺は日比野にババを引かされ、次のターン、俺は必死のブラフを試みるも全く相手にされず、彼女がそう予言した通りの展開で、ゲームは終了した。

まったく、慣れない嘘はつくものじゃない。そう、思った。

二章『真っ赤な空を見ただろうか』

財布を覗くと千円札が一枚と小銭が雑多に入っていた。

先月のバイト代がまだ結構残っていると思っていたが、どうやらそれは俺の思い違いだったらしい。今月もまだ十日近く残っているのに、果たして乗り切れるだろうかという不安が頭をよぎる。そして次に訪れるのは後悔。どうしてさっき右のカードを引いてしまったのだらうという類の。

「君が右を引くのだということは分かっていた。いや、寧ろ右を引くように誘導したのだよ」

俺の前を歩いている日比野は俺の心を読んでいるのかの如く、そう言い放つ。

「お前は人の心が読めるのか」

「そうじゃない、君の――司の考えが読みやす過ぎるのだ。財布を覗きながら溜息をついていたら、誰だってさっきの勝負を悔いているのだらうと推察できる」

「それもそうだがババ抜きの話もだよ」

「ああ、まあ、あれだけゲームを重ねれば、相手の手を読むなんて私にとっては朝メシ前、プーヤンの一面くらい簡単だ」

そんな伝説のギャンブラーみたいな科白を吐きながら、日比野はくるりと回る。

とんだ大言壮語だ、とはとても言い切れない勝負強さを彼女は持っている。

二人でボーリングに行けばそこでのプレイ料金を賭けて勝負。ビリヤード場に行けばそこでもまた代金を賭けての勝負。

数々の勝負をこなしてきた俺だからわかる、彼女の強さ。

無敵、といってもいいほどの勝率で、彼女は俺を下してきた。

さらに性質の悪い、とでも言えればいいのか、彼女はあまり圧倒的には勝たない。先ほどのババ抜きでもそうだったように、俺に追い詰められるような事もしばしばある。が、決して負けない。追い詰められたように見せているだけで、さらに奥の手を持っているのだ。（先日のビリヤード勝負は酷かった。偶然の玉の配置も俺に味方して、絶対に此方が買ったと思ったのに、最後の最後で彼女は玉をジャンプさせるといった高等なショットをやったのけたのだ。それまでは一度も使わず、使えるような素振りすらみせなかったのに、だ）

そんなこんなで日比野があまりにも強すぎるものだから、俺のバイト代の殆どは、彼女との交友費に消えていく。それを俺が残念に思うかと聞かれれば、そんな事は無かったりする。

日比野響。彼女は唐突に振り返ると、俺が見ていたことに気づいたのか、破願した。

金色のショートカットヘアが、夕日にを反射し絹糸のように煌く。細められた目は、どこか優しさを湛えていて。丸く、小さめの鼻の下にあるさくらんぼのような色を持つ唇が、魅力的な曲線を描いた。

「どうした。あんまりじっと見つめられると、照れる」

冗談めかしてそう言う彼女を見ながら、俺は自分の心を再認識する。それは今まで何度も意識してきた感情。日比野がそばに居るだけで、いつもほんの少しだけ息苦しくなるような感覚の、その原因。

多分、分かっている。それが何なのか。

だけど伝えない。伝えられない。それは俺が臆病者で、日比野に拒絶される事が耐えられないのだという事もあるが、それよりも、多分、卑怯だからだ。今、彼女に自分の気持ちを伝えることが。

きっと今、告白すれば、彼女は受け入れてくれると思う。それは希望的観測ではなく、恐らく事実として。でもそれは彼女が俺に好意を抱いているという理由では決して、無い。それはただ彼女が優しいから、自分に同情してくれるだけだからだ。

それは、駄目。

それだけは、駄目。

彼女が自分に与えてくれる優しさに、つけこむような真似だけはできない。

だから、

「いや、頭に桜の花びらがついてるぞ」

「何、どこでついたのだ」

「多分、さっきのファミレスの横にあった桜だと」

「むう、君、見えていたよな、何故取ってくれない」

「桜餅みたいで、可愛いなー、って思ったから」

「桜餅を可愛いと思う君の美的センスを疑いたいところだが、そもそものを褒め言葉として受け取っていいのだろうか」

そんな言葉で、誤魔化した。

ひとしきり談笑していると、ふと、日比野が俺の頭を指差して、言い出した。

「そういえば、君、随分と髪が伸びたな」

「そうなのか」

「うん、下手したら私よりも長い気がする。前髪が目にかかってい

て、見づらくないのか」

「別に不便を感じたことは無い、な」

「そうか。しかし、見ているこっちが鬱陶しい。切るんだ」

「断る。これは別に無造作に伸ばしている訳じゃない。俺なりの試行錯誤があつてこの髪形に至ったんだ」

「ほう、私は君が『わかめ頭』などと不本意なあだ名をつけられないために親切心からしてやっている忠告を聞けないというのか」

「なんだその安直なネーミングは。今日び小学生だってもうちょっとマシな渾名をつけるだろうが」

「安心しろ、ちゃんと私が浸透させてやるから」

「あれ、親切心は何処へいった」

そして日比野は何かを考えるかのように視線を彷徨わせると、突然右手を握りこぶしにして、左手の掌に打ちつけた。もはや漫画でも絶滅危惧種認定をされかねない、典型的な『何かを閃いたポーズ』だ。可能ならば彼女の頭上に豆電球が発光するエフェクトが追加されたに違いない。

「よし、勝負をしよう」

その言葉は俺の想定外の範囲外、つまり予想通りだった。

「内容を聞くだけ聞いてやるよ。」

俺がそういうと、日比野は左手を腰にあて、右手の人差し指を空中でくるくると回しながら、俺に内容を説明した。

「つまりだな、明後日は日曜日だ。そこで君の頭髪を賭けて勝負する訳だ。私が勝ったら君には散髪に行ってもらおう」

言い終わると俺に指を突きつける。より正確に言えば、俺の髪に指を突きつけている。オーバーアクションな奴だ。

「俺が勝ったときのメリットが何も無いんだが」

多分、俺はその提案に乗ることになるんだろうな。内心ではそう思いながらも、表面上は渋ってみる。

「そうだな、ふむ。よし、君が勝ったら、何でも一つ言うことを聞いてやろう」

日比野はそういうと、にんまりと笑う。その提案は俺には願ったり叶ったりだったが、一応確認してみる。

「いいのか、エロい事させるぞ」

随分とストレートだが、俺は冗談めかしてそう尋ねる。それに対する日比野の反応も、ほぼ、予想通りだった。

「問題ない。毎回言ってると思うが、どうせ私が勝つ勝負だ。それに――」

そこで日比野は言葉を切った。

俺はその言葉の続きを待ったが、何時まで経っても彼女から言葉が紡がれる気配が無い。目線で続きを問いかけるも、日比野はゆっくりと首を左右に振り、

「いや、なんでもない」

そう、言った。

「勝負内容はどうする」

「君が決めてかまわない。今月はピンチみたいだからな。精々金が掛からない、それでいて面白いゲームを用意しておいてくれ」

どんな種目でも負けるわけが無い。そういった彼女の自信が透けて見える発言だった。

きっとこれが、日比野なりの、気の使い方なのだろう。そういった彼女の心遣いは、正直に言えば嬉しかった。まあ、髪形に関して

はさつきも言ったとおり俺なりのこだわりがあるので、それを切る、
というのは少々憂鬱だったが。

「それで、どうするつもりだ」

日比野が俺に訊く。何をだ、と返すと、

「お願いの事だよ。君が、勝った場合の」

そう続けた。俺はその質問に表面上は考える素振りをする。恐らく日比野が言うとおりの、日曜日の勝負は彼女が勝つことになるだろう。だからあまり身が入らないまま、俺は答える。

「よし、それを止めて貰おうか」

「それ、とはなんだ」

「とぼけるなよ。俺の指の先を見ろ」

「爪が伸びているな。キチンと切らないと、生爪を剥がすぞ」

「そうじゃねえよ」

「私の目の錯覚でないのならば、君は私の下半身を指差しているように見えるが」

「そういうと何か生々しい感じがするな、おい」

「つまり女を辞めろというのか」

「そんな事は頼んでません。埴輪だよ、埴輪」

そう、日比野はスカートの下にジャージの長ズボンを履くという、所謂『埴輪スタイル』を好んでいるのだ。

「埴輪スタイルなんてもう殆ど見ないぞ。学校ではお前だけじゃないのか」

「ぐ、だが、しかし、だな、これは、その、色々と」

俺が指摘すると、急に日比野は狼狽し始めた。顔を少し赤くしてうつむきながら、声にならない声で何事かをつぶやく。俺はそれほど大して日比野に埴輪を止めさせたい訳ではなかったのだが、そんな姿を見せられたら、嗜虐心を刺激されてしまう。

「なんだ、俺は日比野が『埴輪マン』——いや、『埴輪ウーマン』なんて不本意なあだ名をつけられないように親切心からお願ひしているというのに、それが聞けないのか」

「——っ、な、なんなのだその、安直なネーミングは。今日び、小生だつてもっとマシな渾名をつけるだろうッ」

もっと赤くなり、先ほどとは立場が逆転した会話を俺と繰り広げる日比野。もっとも彼女の場合は俺に勝てばそんな願ひは聞かなくていいという前提条件があるのだから、そこまで必死にならなくても良いはず、だが。

「大体、本当にそれは親切心からのお願いなのかッ」

「いや、ただ単に日比野の生足が見たいだけだけど」

彼女が、凍る。

あれ、俺は冗談だと言うことを暗に伝えたかったただけなのだが、ひょっとして、言葉を、間違えた、かな。

「————ツ——」

固まった日比野が小刻みに震えだす。その様はまるで固体である水内の水分子の細かい振動みたいだな、などと水分子も裸眼で見たこと無い俺がそんな感想を抱いていると、彼女はあっという間に融解し、沸騰した。

「巫山戯るなっ」

耳鳴りのような怒号が俺の耳を襲う。脳が数瞬遅れて、その音源の発生地が日比野だという事を理解する。

「巫山戯るなっ、巫山戯るなっ、巫山戯るなっ」

日比野はそう呶然と叫びながら、俺との距離を詰める。そうして俺の胸倉を掴み上げた。

「ちょ、日比野」

「五月蠅い、黙れ。セクハラ裁判だ」

なんですかその聞いた事の無い不吉な裁判は。そうは思っても、もう声を出せなかった。《蛇に睨まれた蛙》という慣用句をここまです実感する日が来るとは思わなかった。

俺たちの横を買い物帰りだと思われるおばちゃんが自転車で通り過ぎる。通り過ぎる際に何か微笑ましい物を見る目で此方を一瞥していった。チンピラのような金髪を日比野はしているが、彼女は小柄で、何より女の子だ。そして胸倉を掴まれている俺は、痩せぎすで頼りなさそうとはいえ身長は、ある。多分カツアゲの現場というより、痴話喧嘩だと思われたのだろう。その推察は概ね正しい。しかし俺はその痴話喧嘩に生命の危機を感じざるを得なかった。

「い、異議ありっ」

俺は駄目もとで叫ぶ。このままではどんな判決が下されるか、想像に難くないからだ。

「異議を却下する。遺言があるなら、30字以内にしろ」

判決が下されるのではなく、既に下っていたようだ。処刑という名の判決が。なんという魔女裁判。しかし、遺言は許された。それならばきちんと誤解を解けばいいのだ、その30字で。いくら日比野とはいえ鬼じゃない。冷静に論理立てて説明すれば、きっと自分の思い違いだったとわかってくれるはずだ。

俺は思考する。落ち着け、クールになれ時田司——どうすれば彼女の誤解を30字以内で解けば良いかを考えるんだ。

「10」

日比野の唇が、動く。

「9」

————カウントダウン。どうやら彼女は「8」被告人である俺の「7」言葉を悠長に待つ「6」心算など更々ないらしい。

「5」

焦燥。俺の心を焦りが覆う。

「4」

どうしたらいい。どうしたら。

「3」

クソ、何も思いつかない。

「2」

そして、頭が、真っ白になって、

「1」

「な、生足がいやなら、タイツを履けばいいのにつ」

なんか、とんでもない事を、口走ってしまった。

マリー・アントワネット【Marie-Antoinette】
フランス王ルイ16世の妃。マリア・テレジアと神聖ローマ皇帝
フランツ1世との末娘。フランス革命の際、ギロチンで処刑。（1
755～1793）

貧困で今日食べるパンも無いと嘆く国民を見て、「パンが無ければ
ケーキを食べればいいのに」と言ったとか言わないとか。

———無いな、今は、無い。最低だ。と、いうか意味が分
からない。我ながら、人生で最大の失言をしてしまった気がする。

と、日比野の手が俺から、離れる。

意外な展開に俺は思考が停止する。どうしたのだろうか。

「坊主な」

先ほどのまでの真っ赤で恥ずかしそうな顔からは、一転。今日日比
野はにこやかに微笑んでいた。目は、笑っていないけど。

「坊主って、なにが」

「いや、ほら『髪を切る』ってさ、結構曖昧じゃないか。毛先をそ
ろえる事だって広義でいえば、『髪を切る』事だろう」

「あ、ああ」

「でもそれじゃ意味が無い。だからある程度明確な基準を設けよう
と思って、な。この際だから坊主にしよう」

もの凄く朗らかな、でも少しも好意的な印象を与えない笑顔で彼
女は続ける。

「ちよと待」「そうだな、春になって日が落ちるのが遅くなったが、
もう結構な時間だ。明日も半ドンとはいえ学校がある事だし、私は
もう帰るとするよ」

「だから坊主っていくr」「ああ、見送りは結構だ。ここからは一人で帰る。じゃあまた明日、学校で」

そう言うやいなや日比野は俺に背を向け、歩き去っていく。その後ろ姿だけでも、俺は脚が竦んでしまっただけを追いかけることはおろか、声を出すことすら出来なかった。

「我ながら変態街道まっしぐらな発言をしてしまった割には、あの反応は、まだいい方、なのか、な」

俺はオレンジ色をした太陽に向かって歩いていった日比野の姿が見えなくなってから、そんな独り言を漏らした。下手したら養豚場の豚を見るような目をされた後、絶交されてもおかしくはなかったと思う。それでも俺と幼馴染——友人のままでいてくれる事は、

「同情、してくれてるのか」

それとも純粹な彼女の『優しさ』なのだろうか。

今の俺には判別は出来なかったし、次の瞬間には友人の行動をそんな風にしか捉えられない自分に、唾を吐きかけたくなった。

「俺も、帰るか」

一々そう口に出してから、俺は帰路へと一歩踏み出したが、

そのとき

後ろから

何か

悲鳴のようなものが

聞こえた。

三章『夢・出会い・魔性』

それは悲鳴、と呼ぶには些か御幣があったかもしれない。一般的に抱かれる悲鳴のイメージよりは幾分落ち着いて聞こえたのだ。パニックから捻り出された大声、と言うよりも、ただ現状を認知し、そうする必要があると頭の中で整理してから出された大声といえは良いのだろうか。まあ俺が吃驚して振り返るには充分すぎる役割を果たしたし、そもそもその声に対して生ずる違和感など、今の俺にとっては些末な事だった。

振り返った俺の目に映り込んできたのは、橋の袂で尻餅をついている女性と、スクーターに乗ったフルフェイスヘルメットの男の映像だった。女性が持っていたハンドバックが男の手によって強引に奪われる。

——引ったくり。

そう俺が認識したのと、身体が動いたのは殆ど同時だった。このような非常事態に足が竦んだり、パニックになったりして動けなくならなかったのは恐らく幸運だったのだろう。

女性からバックを奪うために減速したスクーターが、目的を果たしたことにより、徐々に加速を始める。そしてそれがトップスピードになる前に、俺は体当たりを決めていた。

衝撃。

プラスチックがアスファルトを削るくぐもった音。
痛む右腕。

横倒しになったスクーターが、橋に設置されている柵に激突する。

道路に投げ出された男は直ぐに立ち上がる。

俺は放り出されたバックを手に取ると、男に向き直る。

フルフェイスヘルメットで顔は確認できないが、俺と男の目線が恐らく交錯した。

そのまま、数秒。

否、十数秒が経過した。

俺の心に違和感が到来する。

男の犯行はいわば失敗に終わったのだ。そしたら、自分の正体の判明を恐れて、逃げ出すのが普通の行動ではないだろうか。

俺はそう考え、——いや、勿論あの一瞬で明確にそう思考した訳では無いが、兎に角、俺ならそうする——無理矢理体当たりで男を妨害したのだ。しかし男は動こうと、しない。

いや、動いてはいた。右手を使い緩慢な動作で自分の腰の辺りを弄ると、『ソレ』を取り出した。

俺はそれを見た。

けれどそれが何なのか、理解するのに少し、時間が掛かった。

それはナイフだった。といっても果物ナイフだとか、折りたたみナイフだとか、そんな可愛らしいものでは、決して、なく。ただ無骨に、殺傷能力のみを純粹に追求したがゆえに到ったのだろう。独特の形状を、していた。ナイフに詳しい人間が見れば、その持つ

形状から固有名詞をピタリと当てる事ができるのかもしれないが、俺にそんな知識はないし、そんな事を考えている時間も無い。

男がゆっくりと俺に歩み寄る。それは、操り人形を彷彿とさせるようにぎこちない歩き方だったが、俺は逃げる事が、というより、動くことも、声を出すことも出来なかった。

それは先ほど日比野に対しても感じた恐怖、だったが、まるで別の物だった。

当たり前だ。日比野だって多少腹がたつたとはいえ、あれは日常の一場面。当然俺を殺す気なんて一切、無い。言ってみれば『怒った振り』を彼女はしていた訳で、俺だって『怯えた振り』をしていた訳だ。自覚は無かったが。

しかし、違う。目の前の男は圧倒的に、違う。絶対的に、違う。俺は理解してしまったのだ。目の前の男は本気で、当然のように、『俺の身体の何処にそのナイフを突き立てれば効率よく俺を殺せるか』を思考し、結論を出し、行動に移そうとしている。

怖かった。男の思考が怖かった。逃げ出したかった。でもできなかった。それは『男の思考が理解できてしまった』から。

今は男はゆっくりと近づいてきている。しかし、それは俺が動きを止めているからだ。どうしても対応できるように、敢えてゆっくりと近づいてきているのだ。

俺が右に逃げれば右に。

左に飛べば左に。

後退すれば一直線に。

何通りもの俺の殺し方をシミュレートしている。しながら接近してくる。

そして俺が目線を切ったり、何らかの動きを見せればそのうちの一つを『選択』し、実行するだろう。

だから動けなかった。

いわば俺が動かないことでひとつの『均衡状態』が成立しているこの状況を、俺から壊したくなかったのだ。

しかしそれは偽りの均衡だ。このまま男が近づき、その射程距離内に俺を捕らえたら、やはり殺すだろう。

それもパターンの一つ『このまま俺が動かない』というパターンとして処理される。

動いても死。

動かなくても、死。

俺は今、チェスや将棋で言う『詰み』の状態にいるのを理解した。せざるを得なかった。

だから、

「ま、待て」

そんな言葉を、零す。

動けないし、動かない訳にもいかない。だから言葉による時間稼ぎを計る。

しかし、男には通用しない。

それも当然だ。今俺がしている事は詰んだ盤面に対して『待った』を宣告しているようなものだ。勝利を確定させたこの男が俺の言葉に耳を傾けるメリットなんて、何一つ、無い。

それにしても、「待て」は無いだろう。映画などで見かける命乞いの代名詞だが、そんな言葉で待つ場面は観たことが、無い。だれど自分がその立場に置かれて初めて解かった。「待て」しか言えないのだ。死が迫り来る状況で、冷静な取引や説得をする為に頭などは回らない。ただ、慈悲を求めて同じ言葉を繰り返すだけだ。

「待って、待ってくれ」

紡がれる、第三者から観たら滑稽に思われるだろう俺の言葉。

無視して近づく男。

それに同調して近づく射程距離。

俺の死への距離。

それが零になった時、男が体重を移動させ、ナイフを振り上げ――

「おい、何をやっているっ」

男の動きが止まった。

俺は声の出所に目を向けた。

橋の反対側で、どうやら誰かが俺たちに声をかけて来たらしい。

ナイフ男がそちらに目を向ける。

そして、停止。まだ逃げ出さない。

俺はぞっとした。

――この男は、この状況で、まだ、闘争か、逃走かを選択している――

しかし、やがて二人のうち、どちらか一人を逃がさずに、殺戮を

完了することは不可能だという結論に至ったらしく、倒れたスクーターを立てて、それに跨ると、あっという間に暮れなずむ町並みへと姿を消していった。

「おい、坊主、大丈夫かい」

振り返ると、声をかけて俺を助けてくれた人が、近くまで来ていた。

「ええ、まあ」

「そうか、なら良かった」

俺の返答にくしゃりと相好を崩す。人のよさそうな親父さんだった。

「ありがとうございます」

「いや、いいんだよ。無事なら——てお前さん、時田さんとの倅かい」

「ご存知だったんですか」

「ああ、由希子さんが、ね。よくウチで惣菜を買っていつてくれて、ね」

成る程。頻繁に夕飯に登っていたメンチカツはこの人の店のものだった訳だ。

「メンチカツ、美味しかったですよ」

社交辞令、とも取れるが、割と本音を言ったつもりだ。これを機会に俺も常連となるのも、いいかもしれない。

「ありがとう」

彼は、また笑顔を見せる。

「っと、いけねえ。お使いの途中だったんだ。あんまり遅いと上さんが五月蠅えからな」

と、いうと「じゃあ、またな」といって駆けていった。

そこで、俺は自分の手に掛かる重みを思い出す。そうだ。すっかり忘れていたけど、あいつはひったくりだったのだ。

周囲を見渡し確認すると、先ほどの女性はまだ同じ場所で座ったままだった。もしかしたら、怪我をしたのかもしれない。俺は駆け寄って声をかける。

「大丈夫ですか」

うつむいていた女性が顔を上げる。とても整った顔立ちをしていた。雪のように白い肌と、すっと通った鼻筋。長い金髪と碧の瞳から、おそらく外国の方だと思われる。

「ええ。はい。大丈夫です」

ところが彼女の返答には外国人特有の訛り、のようなものが一切感じられなかった。日本に来て長いのだろうか。

「そうですか。それは良かった」

俺はそう言うのと彼女のバックを差し出した。しかし彼女はそれを受け取らず、まっすぐ俺を見ている。

「貴方が、助けてくれたのですね」

そしてそう問いかける。

「ええ、まあ、そういえないことも、ない、のかな」

後半しどろもどろになるのは、当然のことながら、ナイフを取り出したあいつに、手も足も出なかった事を憂慮したからだ。

その返答を聞いても、彼女は特に表情を変えることなく、再び俺をじっと見つめる。

スーツを着ていることから、恐らくは社会人なのだろうが、とても若く見える。俺と同じ年、と言われても納得できてしまいそうな顔立ちをしている。そんな彼女にじっと見つめられると、その、照れる。

「お名前を、お聞きしても、宜しいでしょうか」

再び彼女からの質問。街角で出会っただけの初対面の人間に名前を尋ねるといふ行為に、若干の違和感を覚えたものの、大して疑問に思うことなく俺は答える。そういう国で育った方なのかもしれないし。

「時田、司です」

「字は、どう書かれるのですか」

「時間の時に、田んぼの田。それから、えっと、相撲の行司の司、一文字で《つかさ》、と」

彼女はそこまで聞くと再び目を伏せる。不意の動作に驚き、俺が慌てて覗き込んでも、大した反応を見せない。

「時間、を、司る、ね。少々出来すぎな名前な気もありますが、まあ、いいでしょう。良すぎる、ということはありませんし。これもまた、運命かもしれません」

こちらは見ずにあくまで独り言を呟く彼女。何を言っているのかはわからないが、あまり関わり合いになるのを避けたほうが賢明かもしれない。

「あの、このバック」

この場を立ち去ろうと、俺は再び彼女にハンドバックを差し出す。怪我しているのが心配だったが、本人が大丈夫だと言っているのだから、大丈夫なのだろう。

しかし彼女はそれを受け取る事もなく、何事も無かったかのようにすっと立ち上がると、女神のような微笑を湛え、言った。

「差し上げます」

「えっ」

「助けてくださったお礼、です。差し上げますので、どうか有効にご活用下さい」

いや、待て。いくらなんでもそれはおかしい。このバックに何が入っているのかなど皆目見当もつかないが、兎に角、それは、受け取れない。

「いや、幾らなんでも、流石に受け取れません」

「おや、謙虚は美德、という事ですか。しかし、問題ありません。私が差し上げる、と言っているのです」

《謙虚は美德》の言葉の使い方を間違えている気がしないでもなかったが、問題はそこではないのだ。というか、俺だって何が入っているか判らない鞆など、気味が悪くって仕方が無い。

「あの、そうではなくてですね」

しかしそんな俺の言葉を見無視するように彼女は振り返ると、商店街の方へと歩き出す。

「ちよっと、待って下さいよ」

声をかけるも、彼女は一切の反応を見せない。

「受け取れませんって」

尚も追いつがる俺。やはり彼女は振り向かない。この時間帯の商店街は賑わっており、なかなか追跡に苦労する。彼女はとうとうまるで周囲に人など居ないかのように最短距離で俺から離れていく。くそ。なんて人込みが得意な人なんだ。

《人込みが得意》なんてなんだか初めて使った言葉だな、などと思いつつも必死で喰らいつく俺だったが、徐々に距離を離され、結局は彼女を見失ってしまった。

「どうすんだよ、これ」

俺は右手で持っているハンドバックを目の前に掲げ、そう独り言ちる。

そういえばひったくり犯が出たのだから、警察に通報したほうが良いのかもしれないな、と思ったが、犯人はおろか被害者である彼女も何処かに行ってしまった今、それをする意味はさほどないと考

え直す。

そもそもこんな赤の他人にひよいひよいと渡してしまうものなのだから、そんなに大切なものでもなかったのかもしれない。

そうすると身体を張って、右肘を痛めて、しかもあんな危ない人間に殺されそうになって下手をしたら顔を覚えられたかもしれない行動にも、あまり意味はなかったのかもしれない。

俺は釈然としない気持ちになりながらも、ハンドバックを持ったまま、帰路に着いた。

四章『結ンデ開イテ羅刹ト骸』

くたびれた身体を引きずるようにして、家に帰ると、もうそろそろ完全に日が落ちようというのに、家の電気が点いていなかった。

「あれ——峰子さんはもう行っちゃったのかな」

門を潜る。庭付き一戸建ての、我が家でも特に自慢だった庭は、長かった冬を終えて、新しい季節に向ける、生命の息吹のようなモノを俺に感じさせた。園芸が趣味だった両親が、少し都心部から離れようとも決して譲ろうとしなかった、庭。まるで森のように広葉樹が植えられている様は、確かにこだわりを感じられた。

「冬の間はほっというて大丈夫だったけど、また、いろいろ手入れしなきゃ、か」

自分で言うのもおかしい話だが、最近独り言が増えた気がする。もう折り合いがついたと思ったのに、やはり俺の中にも、まだ、残るものがあるのだろうか。

いや、あるのだ、確実に。ただ見ない振りをしているだけで。

俺は首を振って考えを中断する。なんら生産性の無い思考だったからだ。今はやるべき事が他に、ある。峰子さんが行ってしまったなら、今、家には恵理香一人だし、夕飯だって作らねばならない。今は、少なくとも今は、感傷には浸るべきではない。

「ただいまー」

間延びした声で帰宅を知らせる。

次の瞬間耳に入る廊下を走る音。

黒い影のようなものが俺に体当たりを食らわせる。本日二度目の転倒。倒れた拍子に後頭部を扉にぶつけてしまい、鈍い音と共に、目の前で星が、散る。

暗い視界の中で襲撃者を確認する。ぼさぼさに伸びきった長い黒髪。一時期に比べればまだ増しになったものの、依然痩せぎすな身体。小さめのサイズのはずなのに、まだ丈のあまる黒いワンピース。真っ当に人生を歩めれば、きっと美人になれるはずだったのに、頬が痩け、目の下に深い隈が出来——それでもまだ、どこか危なげな可憐さを湛える顔。瞳を涙で潤ませ、俺を見据える表情。

予想通り、その正体は俺の妹——時田恵理香だった。

「
恵理香が声にならない声で、何かを俺に訴える。それと同時に大きく頭を振る。両手で俺の服を固く握り締める。」

その拳が血で汚れていたこと、また暗闇に目が慣れ、家の中の『惨状』が視界に入るつれ、俺は気づく。いや、本当は気づいて、いた。認めたくないだけで。

フラッシュバック——また、起こってしまった。最近は安定してきたから大丈夫、だなんて思っていたはいけなかった。一人にするべきではなかったのだ。普段より早く仕事に行ってしまった峰子さんを思わず心の中で呪ってしまいそうだったが、見当違いの八つ当たりだという考えに至り、中断する。彼女はもう、大人だ。本来より早く仕事の呼び出しがあれば、出向かなければならない。

そもそも俺が普段通りに帰っていれば、良かったのだ。日比野との甘い時間に現をぬかして、帰るのが遅れたのは、何処のどいつだ。

「
恵理香が叫ぶ。声は出ない、出せない。でも俺には聞こえる、理

解できる。彼女が何を言っているのか。何を訴えているのか。

「大丈夫だ、大丈夫。謝らなくていい」

彼女を抱きしめ、安心させるように、言い聞かせる。

「

」

謝罪の言葉を繰り返す。泣きながら。無音で。しかし激しく。繰り返しながら、涙を流す。

「大丈夫。俺は恵理香を見捨てたり、しない。居なくなって欲しいなんて、言わない」

胸に襲来する罪悪感。安心させようと俺が紡ぐ言葉の、薄っぺらさ、白々しさ。

俺は何を言っているのだろうか。形だけを取り繕って、自分の事を棚に上げている。恵理香を赦すような発言をするという事は、彼女を安心させると同時に、この惨状の全ての責任が彼女にある事を認めてしまっている。

過ちを犯したのは自分なのに、彼女の所為になっている。

「大丈夫、お前は悪くない、恵理香は少しも、悪く、ない」

その言葉は真実。彼女には一片の責任も無い。悪いのは油断をしてしまった、俺。

「

」

責任は俺にあるのに、彼女は俺に赦しを請うのを止めない。

俺はそれを受け止める。きつく抱きしめる事で安心させる。彼女を軽薄な科白で彼女を安心させ、その科白は同時に自分の無実を声高に叫ぶ。俺なのに。責められるべきは俺なのに。

「

」

「大丈夫、分ってる、傍に居る。嫌いになったりなんて、しないよ」

反吐が出る。全くもって反吐が出る話だった。

そして、俺達は抱きしめあったまま、時間だけが過ぎていった。

暴れ疲れたのか、泣きつかれたのか、俺の腕の中で眠ってしまった恵理香を抱きながら、居間へと足を運ぶ。

本当は恵理香の部屋に運びたかったが、後始末で掃除をする事になるだろうから、恵理香が起きた場合に備えて、自分の近くで寝かせたほうがいいだろうと思ったのだ。

居間の方も燦々たる状態だった。ガラスは砕け、カーテンは破れ、戸棚は倒され、椅子は投げられ、原型を保っている物が殆ど存在しなかった。

と、その居間の中央、辛うじてその形をとどめているテーブルに、突っ伏して、

富士、峰子さん、が、

死んで、いた。

「ああ、お帰りなさい」

生きていた。顔を此方に向け、挨拶をする峰子さん。

しかし、生ける屍、と言ってもいい位に、彼女の顔つきには生気が無かった。

三十五歳という年齢ながら、二十歳といわれても押し通せそうな美貌は陰りをひそめ、年相応の哀愁に包まれていた。また、恵理香に引っかけたのだろう生傷があちこちに見える。商売柄か派手目にコーディネートされた服も、所々破れている。ブロンド色でいつ

もは軽くウェーブされた髪も、乱れていた。
そして何より瞳に、光が、無かった。

「ただいま」

取り敢えず挨拶をする。恵理香をソファーに横たえようと、彼女の正面の椅子に座る。

台風が直接部屋を通ったかのように乱雑な部屋だったが、その中でも、峰子さんが、一番、危うそうに、見えたのだ。

彼女は俺が座ったのに気づいたのか、一回、深い溜息をついたあと、一言だけ、言った。

「わかってた、つもり、だったんだけどなあ」

再び、テーブルに突っ伏す峰子さん。その言葉で、俺は、大体の事を理解した。

ここ半年以上、恵理香の『発作』は起きなかった。峰子さんは彼女の容態が次第に良くなっている、と思ったのだろうし、俺だってそう感じていた。

しかし、今日、何が原因かは分らないが、発作が、起きてしまった。

暴れだす恵理香。峰子さんは必死に止めようとしたのだろう。しかし、幾ら止めようとしても、止まらない。止まるものでは、無い。恵理香の発作は彼女が信頼してる人間——今は俺だけだが——が止めようとすると、多少、収まる傾向がある。（とはいえ、とても骨が折れるが）

ところが彼女の場合は、どんなに必死になっても、大人しくならなかったのだろう。つまり、それは、「恵理香が峰子さんを、信じていなかった事」を、意味する。

心を開いたかの様に思っていたが、それは峰子さんの思い込みだった。

その事実が、多分殴られた事よりも、蹴飛ばされた事よりも、峰子さんにダメージを与えたのだろう。

だから、押さえつけるのを止めた。結果、恵理香は破壊の限りを尽くした。

赤い目をしていたから、峰子さんは、泣いていたのかもしれない。

「なんだったんだろうね」

顔を下に向けた状態で、峰子さんが呻く。主語も、目的語も無い疑問文。だけど俺は答える。その質問の意味を、意図を、推測して。

「俺は」

彼女に受けた恩を、忘れるわけにはいかないから。

「俺は、感謝しています。峰子さんに」

彼女が顔を此方に向ける。俺は、目をまっすぐ見て、言葉が続ける。

「俺達が路頭に迷っていないのは、貴女の御蔭ですし、それに、一緒に暮らしてくれて、とても、嬉しい、です」

彼女は動かない。それでも俺は言葉が続ける。それしか、出来ないから。

「恵理香も、貴女のごことは、良く、思ってます。兄妹だから、分るんです」

字面だけなら薄い、何の根拠も無い科白だけど、俺は、紡ぐ。伝わって欲しいから。この、気持ち。本当に、彼女の存在を、有り難く思っているから。

彼女はそんな俺から目を外すと、ふふふっと鈴の音のような声で

笑い、

「ありがと」

そう、言った。

「ごめんね、気を使わせちゃって」

先ほどの暗い表情から一転、少女のような無垢な笑顔で俺に語りかけてくる峰子さん。

「十五も年下の男の子に気を使わせるなんて、オトナの女性失格だね」

「あれ、十八じゃありませんでしたっけ」

「うるせー」

冗談を飛ばせる程度には回復してくれたらしい。

彼女は両手を打ち合わせ、軽い音を響かせると、

「よし、じゃあ今日中に片付けちゃおっか」

立ち上がってそう言った。

「峰子さん、仕事は如何するんですか」

当然の疑問を告げる。

「こんな格好で客前に立てっかーっ。それにもう遅刻だよ、遅刻。」

店長に休みの電話は入れといたから、そこは心配しなくてもオツケーだよん」

流石峰子さん。しっかりしていらっしゃる。

立ち上がって片づけを開始しようとした彼女のお腹から、空腹を知らせる音が鳴った。それも、かなり大きい。

「あのねー、っーちゃーん。お腹すいたー」

「何ですかその新種の渾名。今までそんな風に呼んでなかったでしょう」

俺は台所の方に目を向ける。無事だろうか。

「台所、使えますか」

「あ、無理無理。五徳とか、宙を舞ってたもん」
シュールな画だな、それ。

「じゃあピザでも取りま」オニオンガーリックピザねっ、もちろん生ハム添えでっ」

俺の提案に被せるように、大声で峰子さんが注文を叫ぶ。

了承して電話へと向かう俺に、彼女がふと、問いかけてきた。

「ねえ、つーちゃん」

「気に入りましたね、その渾名」

「――私って、卑怯な女、なの、かな」

その質問は本来ならもう少し、ロマンチックな場でされるべきであろうが、もちろん今、この場に限っては、そんな意味などではないと理解できた。

「そうですね、峰子さんが卑怯かどうかは、正直良く分りませんけど」

そこで一旦言葉を切り、彼女と向かい合う。

「少なくとも、その質問は、とても卑怯ですね。そんな風に訊かれたら、『違う』って言うしか、ないじゃありませんか」

俺のその答えに対し、彼女は満足げに、微笑んでいた。

五章『始まりの未来は終わり』

世の中には二種類の人間が、居る。『片づけが得意な人間』と『片づけが得意ではない人間』だ――――

そして峰子さんは間違いなく前者だろう。あらかたの後始末を終え、俺が自分の部屋に戻る頃には、もう午前二時を回っていたが、それでも陽が昇る前に終える事が出来たのは、間違いなく彼女の功績による部分が大きい。きびきびと動き、少しの無駄の無い動きで掃除を行うその姿は、俺に「きつと峰子さんは家政婦とか、メイドとかにも就職できるのではないだろうか」と思わせるのに充分だった。このご時世、そんな需要があれば、の話だが。

「とはいえ、今日はグレートにヘビィな一日だったな」

また癖になった独り言を吐き出しながら、ベットに倒れこむ。

異物感。

不思議に思った俺は部屋の明かりをつける。部屋の主である俺より先にベットを占領していたのは、今日、変なお姉さんに押し付けられた、ハンドバックだった。一階を片付ける際に、荷物になって邪魔だからだと、ベットに置いておいたのを思い出す。

「まさか、爆弾って事はないだろうけど」

そう呟き、俺は中身を確認する事にした。勿論、次に何かの機会があったら返すつもりだし、人の荷物を弄る事に、罪悪感を覚えるだけの良心は持ち合わせているが、如何せん、正体不明の物を、自

分の部屋に置いておくのは、些か、気味が、悪い。

「これ、結構な値段の鞆じゃないか」

中身に注意を向ける前に、ハンドバックそのものも、高級なものだと気付く。そういったものに興味が無い男子高校生である俺が判る位、有名なブランドだった。気が、重くなる。

兎に角、俺は鞆を開けた。

中には化粧品とか、財布とか、そんな類の物が入っているのだろう、そう、思っ

その俺の予想は、外れた。

「【ぼうけんのしょ】——なんだ、これは」

鞆の中にはクリアファイルが一冊だけ、入っていた。良く文房具店で見かける、ルーズリーフを束ねて、本のように保管する、それ。

透明なオレンジ色のプラスチックで出来た表紙が、部屋の明かりを反射する。

サイズは普段俺が使っているものより、少しだけ、小さい。

そして、一ページ目、表紙の直ぐ下の一枚は硬質な紙で出来ていて——本来なら『数学』とか『英語』とか書くべきであろうスペース——そこに、習字のお手本のような綺麗な字で、【ぼうけんのしょ】と、書かれて、いた。

「日記帳、かな。こんなものを他人に渡して、何がしたかったんだろう」

しかし、俺の予想はまたしても、外れる。

クリアファイルには、『何も書かれていなかった』。

【ぼうけんのしょ】と書かれた紙の右下の部分に筆記体で『Level 1』と記されてはいたが、それ以降のページには何一つ書

かれていない。

奇妙な点は、ファイリングされているルーズリーフが、普段使う物とは違っていたところだ。

その紙には罫線が一切引かれておらず、中央に四角い枠で何かを記入する欄が印刷されて、いた。紙の上部には1〜3までの数字が記されており、また、下部に何かサインか、テストの点数でも書くような線が一本、入っているだけだった。

いよいよ訳が分からない。

最初から最後まで、全てがその奇妙な紙で構成されていた。何かのスポーツのスコアでもつける用紙だろうか。しかしそれにしては随分シンプル過ぎる構成の気がする。

しかし、こちらが危惧するような危ない品でなかったのだ。次に会ったら返すのだし、まあ、それほど気にするものでもないだろう。俺はファイルを元通り鞆の中に戻すと、着替えもせずに、身体をベットに沈めた。制服が皺だらけになってしまいうだろうが、まあ、いい。今日は、もう、疲れた。

夢を、見た。

酷く、蒸し暑い、夏の日、だった。

視界がぼやける。黒と、白の、帯。

中学生の学ランを着た俺が、立って居る。

喪服に身を包み、嘆き悲しむ人達。

———気の毒に、ねえ。

どこからか聞こえてくる、声。

——まだ、中学生、だってよ。独りになっちゃったらしいじゃない。

覚えている。葬式の日のお出来事だ。

——それにしても、妹さん、恵理香ちゃん、でしたっけ。

恵理香は俺の傍に、居ない。この時は、まだ、入院していた。

——こういうこというのも、アレですけど、ねえ。これで『三回目』らしいじゃない。

俺はまだ、何も知らない。その言葉が意味するところが、解からない。

——私も、迷信とかは信じないクチだけど、こうも不幸が続くと、ねえ。

解からない。何も、知らない。

——司くん、だって、言わば『一緒に居なかったから』助かったわけでしょう。

知らない。

——知ってるのかしら、血は繋がって、無いって。

聞こえナイ。

———それどころか、誰が本当の親なのか、もう、判らないって。
思イ出サナイ。

目覚ましが起床予定時刻を知らせるよりも、少し早く、自発的に目を覚ます。

寝汗がじっとり俺を不快にさせる。目覚めは、最悪の部類に入った。体中を鈍痛が襲う。間違いない。筋肉痛だ。

痛む身体に鞭を打ち、寝返りをした俺は、夢の内容に思いを馳せる。

ここ最近は見ることが無かった、葬式の時の、夢。実体験と寸分違わず再生されるその夢は、間違いなく悪夢だった。どうせなら夢らしく、故人が生き返ったりとか、新手のスタンド使いが襲ってくるだとか、文字通り『夢のある』展開になってくれれば良かったのに。

「それはそれで虚しい気持ちになる気もするけどな」

それにしても、一体どうしてオバちゃんと言われる部類の人間は、当事者の耳に入るか入らないかギリギリのところで噂話をするのが好きなのだろうか。運悪く、入ってしまったとしても、その後のフォローは一切、しない癖に。

「それなりに、ショックだったんだからなー、ちくしょー」

冗談めかして天井に文句を言ってみる。天井は返してくれなかった。

口数が増えたな、と日比野は言う。その通りだ。だけど、内容は薄くなった。どうしようなくしょうもない冗句や、気持ちの入っていない言葉が増えた。

「それなりに、ショックだったんだろうなー、ちくしょー」

再び寝返りを打ち、今度はベットに向けて訴えかける、先ほどとは微妙に異なる嘆き。ベットは沈黙を貫いた。

そこで俺は、昨日制服のまま床についてしまった事を思い出す。ああ、クソ、昨日の俺の馬鹿野郎。ワイシャツはともかくスラックスはちゃんとハンガーに掛けとけよ。

悪夢に、自分の怠惰。筋肉痛の三コンボにやられて、陰鬱な気分になる俺とは対照的に、外はこれでもかという程に、良い天気だった。

雲ひとつ無い空は、どこまでも吸い込まれそうな蒼さを宿し、燦然と輝く太陽の光は、薄いカーテンの隙間から俺を焼く。

まったく、今日は、良い日になると、いいな。

六章『今にも落ちて来そうな空の下で』

『絵になる光景』と、いう言葉がある。

まさにその表現が、ぴったりだと思った。

土曜日の朝、学校に登校し、教室の扉を開けると同時に、そんな光景が俺の目に飛び込んできた。

窓際の一番後ろの席に座って、本を読んでいる女子生徒に、隣の机に尻を乗せ、足を組みながら何事かを話しかけている氷室幸一がいたのだ。容姿端麗、眉目秀麗、才色兼備の三拍子（意味が被っている気がするが）を揃えた氷室が、同じく見目麗しい女子生徒に話しかけている姿は、それだけで美男美女パワーにより、学園ドラマか、少女漫画のワンシーンのように映える。

『イケメン』の言葉を体言したかのような、少年。ややオーバーアクション気味に手振りを沿えて話す格好も様になる。そんな彼の言葉にまるで耳を貸さず、手元の文庫本のページを捲る、美少女。背景となる窓の外の、綺麗な青空も相俟って、とても絵になる。

俺も思わず見とれてしまったかもしれない。

男子生徒——氷室が尻を敷いている机が、俺の物じゃなかった、ならば。

氷室の言葉を見無視して、一心に本を読んでいた美少女——小鳥遊来夢の双眸が、俺を捉える。

「氷室君、彼が、退いて欲しそうです」

凜とした声色で、そんな言葉が彼女の唇から紡がれる。

恐らく、彼女から返された、最初の言葉なのだろう。氷室が目を丸くし、振り返って俺を見据える。

「ああ、そうだね、悪かったな、司」

遠回しに拒絶の言葉を口にされたにも関わらず、氷室は少しも残念そうな素振りを見せず、爽やかな笑みをその顔に湛えて、俺に席

を譲る。

鞆を席に置いた俺に、氷室が話しかける。

「そうだ。司、少し、いいかな」

特に断る理由も無かったので、氷室に続いて俺は教室を後にした。

朝の廊下を氷室に連れられ、歩く。まだ始業時間に余裕があるからだろう。人通りは少なかった。

と、前を歩く氷室が不意に振り返り、俺に詰め寄ってきた。

「お、ま、え、なああああつ」

端正な顔を歪ませ、悲痛な心境を伝えたいのだろう。頬に手を当て、身体を小刻みにうねらせながら、叫ぶ。

「なんで、今日に限って、早く来るんだよおおおつ」

そこで、ようやく、俺は氷室がムンクの『叫び』を示しているのだということに気づいた。成る程。上手い。

「折角、あと少しで来夢ちゃんを落とせるところだったのによおおおおつ」

しかし、いくら上手だからといっても、白目を向いてなよなよと身体をくねらせていては、どんなイケメンでも残念な感じに仕上がるといふもの。彼に恋をしている女の子達の誰かがこの光景を目撃したら、百年の恋も冷めるといふものだ。

「悪い。朝からナンパの最中だとは思わなくて、ね。それに、俺が見る限り、あまり好印象には思えないが」

「甘いな司。あれが今話題の『クーデレ』というヤツだ。表面上は冷静に取り繕っているが、内心は俺にメロキュンだ」

なんという死語。しかし、恋愛経験が俺の何乗も豊富な氷室の事だ。正しいのかもしれない。

「おい、幸一。ヒカリちゃんはどうしたんだ」

「ああ、昨日振られた。『私と爪楊枝とどっちが大事なのよっ』だって」

「なんだろう。その科白だけで大体お前に非がある事が想像に難く無いな」

氷室は恋人を、それこそ次々とつかえひつかえ換えていく悪癖がある。まあ、二股を掛けたりしている訳ではないから、刺される事は無いと思うが、うん。全く、羨ましい話だ。

「そんな事はもう過去の話だ。今は新しい恋に目を向けるべきだと思うのですよ、ええ」

「切り替えの早さに感動すら覚えるよ。それで新しい標的が、小鳥遊さん、か。またどうして」

「馬っ鹿、お前、あの美貌にあの巨乳と二拍子揃ってるんだぞ。寧ろ今まで声を掛けなかった事を疑問に思えよ」

二拍子って、氷室。一つ足りてないぞ。

「そんなに大きかったっけ」

「ああ、間違い無く学年一位だ。俺が保証する。服の上からだから、カップが判らないのが口惜しいぜ」

本気で悔しそうにする氷室。お前、イケメンで良かったな。

（予断だが、学年二位は日比野だそう。以前、そんな会話をした覚えがある。その時「お前、そんな事ランク付けしてるのかよ」と人として至極真つ当な突っ込みをしたら、逆に奴は「お前、してないのかよ」と真顔で返してきた。興味が沸いたので「ちなみに一位は誰なんだ」と訊いたら、奴は物分りの悪い受験生に教える家庭教師みたいな顔をして、溜息をついた。）

氷室は彼の中の何かに火が点いたのか、熱を帯びたようにして、続ける。

「確かに彼女の髪や、顔付きは、和服が似合いそうだろうな。いや、

正確には、『和服を着せても似合う』だが、まあ、おいておこう。
兎に角、和服には大きい胸は似合わないという意見もある。成る程それは真理だ、認めよう。だが、来夢ちゃんの大きさを持つてすれば――例えば、和服の下には何もつけないという究極ともいえるメリットがあったとしても――それを凌駕する、利点に成り得るだろう。違うか」

訂正。氷室。お前、イケメンじゃなかったら、終わっていたよ。

「お前、相当、アレだな」

「良いんだよ。どうせ、男なんて顔と胸しか見てないんだから」

「それは、女性が男性を蔑む時に使う科白であって、エロさを正当化するための理論じゃないからな。念の為、言っておくけど」

もう、救いようが無かった。

そこまで話すと、氷室は「そうだ」、と何かを思い出したかのよう
うに手を打つ。

「よし、今日カラオケ行こうぜ」

その誘いは純粹に、嬉しい。金銭問題を除けば、の話だが。

「悪い、今月は財布がピンチなんだ」

「そうなのか、だが、それは別に構わない」

「どういう意味だ、それは」

誘っておいて、不参加を容認するとは、どういった見なのだろう。

「つまりだな、来夢ちゃんを誘いたまえ。彼女が参加すれば、司は不参加でも構わないという事だ」

「ちょっと待て、意味がまるで解からない」

「理解出来ないか。つまりだな、司はおまけつきお菓子の、お菓子的なポジションだということだよ」

「すまない。言葉の選択を間違えた。なんで俺がそんな事しなくてはいけないのか、その理由がまるで解からない」

しかもそれ、地味に傷つく比喻だぞ。

「俺の口説きテクを邪魔した罰だよ。それに、クラスの中じゃ、お

前が一番親しいじゃねーか」

席が隣だけです。最近彼女と交わした会話は「あ、すみません、数学の教科書見せてくれますか」「どうぞ」だぞ。物凄く他人行儀じゃねーか。どっちが忘れたかは、言わなくても判るので割愛するが。

「あれ」

俺がなんとか断る理由を探していると、そこで氷室が何かに気づく。

「どうした」

「司、なんで今日眼鏡なんだよ」

——今まで、気づいて、無かったんですか。

おーけー。理解した。氷室。お前の中では、

『来夢ちゃんの胸談義』<<<（超えられない壁）<<<『俺の眼鏡』

の図式が成り立ってるんだな。

「コンタクト、落としたんだよ」

今日は朝からついていない日だった。悪夢、筋肉痛、皺だらけのズボンに加え、コンタクトを落とし、星座占いでもワースト一位だったのだ。もっとも、星座占いに関しては『よくよく考えてみれば、星座占いでゲビだった事が、その日の内で最も悪い事だった』なんて事もあるだろうが。

「うわ、それは災難だな。高いんだろ、あれ」

その通りだ。今月は金が無いので、少なくとも、新調するのは来月以降になりそうだ。

「ご愁傷様。ま、裸眼の俺には関係の無い話、か」

「あと一歩で嫌味だぞ、それ」

「イーノック、だっけか。受ける気無いか」

「誰だよ、それ。レーシックの事を言っているのなら、金額の問題もあるし、怖いからヤダ」

「うおっ、ヘタレ」

「うるせー」

そんな雑談をしながら、氷室と一緒に来た道に戻り、教室へと急ぐ。

と、間延びしたチャイムが、学校中に響いた。

「げ、早く行かないと、谷嶋原に注意されるな」

「それだけは勘弁、な」

俺が急かすと、氷室は露骨に嫌そうな顔を、する。

谷嶋原 丈一郎。俺たちのクラス2－Bの担任教師だ。武士を彷彿とさせる古風な名前をしておきながら、いや、その名の通りというか、渋いルックスで女子生徒に人気がある。ああいうのを^{ぎん}燻^{くふ}し銀な魅力、というのだろうか。

氷室は普段から、良く谷嶋原を敵視している感が、ある。やはり、自分と同じくらい人気がある奴を、目の敵にしているのだろうか。

「なあ、前から訊こうと思っていたんだが、なんで谷嶋原が嫌いなんだ」

俺がそう尋ねると、氷室は肩を竦めて答える。

「ああ、なんつつーのかな。同属嫌悪、に近いのかな。まあ、俺と似てるから、というより、同じ匂いを感じる、って言ったらいいか」

「どういう事だよ」

彼の返答は的を得ない。

「簡単に言くと、アイツ、エロイよ、絶対。女子高生が好きだから教師になったタイプだよ」

したり顔で頷く氷室。教師の悪口、というのは学校生活において生徒同士の仲を深める為の、一種の儀式のような役割を果たす。が、数分前まで、クラスメイトの女の子の胸について、あれほどまでに

熱く語っていた彼が何を言おうと、説得力が、まるで無かった。

七章『ローリングール』

「ねー、響ちゃんはさー、どうして今日、学校をお休みしたのー」
土曜日という事で、今日は授業は三限目までしかない。昼前に終わったので、そそくさと帰り支度をしていると、クラスメイトの猫恋心音が、そう、尋ねて来た。

「ああ、何かバリカンを買っていくとか、だとき。谷嶋がそう言ってたぞ」

そうなのだ。昨日の事を謝罪しようと画策していた俺だったのだが、今日、日比野は学校を欠席した。朝のうちに谷嶋原先生に訊いてみたら、「『バリカンを買に行かなくてはいけないから欠席させて頂きます』って連絡が入って来てたぞ」と教えてくれた。先生は新手の冗談だと思っていたらしく、笑っていたが、俺は自分の顔が引きつるのを、止める事が出来なかった。

「そっかー、バリカンかー。それじゃーしかたないねー」

第三者が聞いたら全く理解不能であろう欠席理由であるにも関わらず、猫恋は納得したように頷く。何故か彼女の周囲には、花のようなものが空中を、漂っている気がしてならない。

猫恋心音。

日比野ともう一人のクラスメイト飛田飛鳥と一緒に、いつも三人でつるんでいる、友人だ。顔や体つきなど、全体的に造形が小さく、所謂『中学生料金、下手をしたら小学生料金でも通用するんじゃないか微妙な女子高生』だ。「お人形さんみたい」という感想は、日比野のもの。「ああいう子だって守備範囲だぜ。保護欲をくすぐるんだよ」とは氷室の談である。因みに俺は彼女が歩くときに、いつ

でも脳内で《テコテコ》とか《トテトテ》といった効果音を勝手に追加しているし、立ち止まっているときは《ポワポワ》と付け足させてもらっている。と、いうかそんなイメージを俺に毎回抱かせるという事は、もしかしたら本当に、そんな音が出ているのかもしれない。

「待て待て、心音。なんでアンタはそれで納得しているんだ」

と、後ろからまた別の声が聞こえる。確認するまでも無く、飛田飛鳥のものだろう。しかし、万が一という事があるので、振り返る。飛田だった。良かった。

「万が一って、何だよ。誰かが声帯模写してたともいうのかよ」

俺の心を読んだように言葉を掛ける飛田。健康的に日に焼けた肌が眩しい、陸上少女だ。『胸が無い』という理由で氷室のストライクゾーンからは外れてはいるらしいが、目鼻立ちがではっきりとした顔つきは、男女共に人気がある。

タイプが全く違う三人の仲が良いのは、少し不思議だが、人付き合いは、案外、そういった方が上手いくのかもしれない。

「飛騨は読心術者か何かなのか。俺の心を読むなよ」

「アンタが、判り易過ぎるんだ」

日比野にも似たようなことを言われた気がする。えっ、自覚してなかったけど、本当に判り易いのか、俺の心。日比野が異能の観察眼で、見抜いたとか、そういう事だと思っていたのに。

「なあ、俺って判り易いのか」

猫恋に問いかける。彼女は俺の質問にしばらく考えた後、答えた。「えっとー、そんなことないよー。別に、普通だと思うけどー」

その答えに安心する、俺。しかし猫恋はこう見えて、異様に鋭い所があるからな。『普通』というのは『普通に判り易い』という意

味かもしれない。

「おい、話が逸れてるぞ。バリカンってなんだよ。それに何で心音はそんな理由で納得できるんだ」

飛田が話題の軌道修正を図る。

その質問にも猫恋は、同じように少し考える素振りを見せた後、口を開いた。

「えっとねー、飛鳥ちゃん。私たち、今、ヤジ先生に、『響ちゃんは今日、どうしたんですかー』って訊きに行こーとしてたじゃない」
「そうだな。アイツの事だから遅刻かもしれないと思ったけど、結局最後まで来なかったからね」

「でもねー。そんな私たちよりも、司くんは早い段階で、ヤジ先生に訊いていたって事になるよねー」

「うん、えっとそういう事になるね」

「だから私は、司くんには『響ちゃんが休むという疑惑』か『響ちゃんに何らかの用事』があったと思ったのねー」

「成る程」

「そしたら響ちゃんは『バリカンを買いに行く』っていう良くわからない理由でお休みしてたらしい。でもね、私は響ちゃんが本当に『良くわからない理由』でお休みするとは思えないの。いや、そんな『理解出来無い理由』を学校に伝えるとは思えないっていうのが正確かな。第三者に理解出来ない理由なら、適当に嘘をつくなり、あるいは黙ってサボっちゃえばいいわけだし。つまりね、響ちゃん是他の人たちには解からないけど『誰か、この意味を知っている人間』が聞いたのなら理解できる、『メッセージ』のようなものとして、そんな理由を学校に伝えたのかなって。そして当然このメッセージは『ヤジ先生に響ちゃんの欠席理由を訊く人間』に向けて宛てられた物だよね。そしてその人は普通、私と飛鳥ちゃんを除けば、司くんしかいない。————そして最初に言った通り、司くんには『響ちゃんに何らかの用事』があったらしい」

将棋やチェスで、一手ずつ詰まされる、感覚。

刑事コロンボ、エルキュール・ポワロ、金田一耕助。彼らに追い詰められていく、犯人の気持ちが痛いほど理解出来る。まさか俺のあんな一言で、ここまで正確に、真実に迫れる、なんて。『異様に鋭い所がある』など、とても彼女を舐めていた表現だろう。『異常に鋭利』なのだ。何時の間にか普段伸ばしている語尾も、短くなっていた。

「だから、私には『バリカンを買うに行く』なんて理由は皆目見当もつかないけど、何となく『司くん絡みの理由』なんだなって、そう、思ったの」

そう言っただけの仮説を話し終える猫恋。彼女の鋭い推察に呆然とする、飛田。

不味い。飛田が今の話を完全に理解したら、『その理由』を俺が訊かれる事は間違いない。昨日セクハラ紛いの発言を日比野にした事を知られたら、どんな目にあうか、想像に難くない。

だからといって二人の――――特に猫恋の追求を、俺が躲し切れるなんて、到底思えない。下手したら、彼女はこうなる事を見越して谷嶋原先生よりも先に、俺に理由を訊いてきた可能性だってあるのだ。

よって、俺は、

「そういえば、猫恋。最近発見したんだが、卵掛けご飯に天カスを乗せて、麺つゆを掛けるとな、とても美味い」

「えー、なにそれー。知らなかったー。バターに醤油が最強だと思ってたよー」

「うむ。何せ俺も最近までバター醤油派だったんだがな。この前何かの雑誌に載ってたので試してみたのだ。しかし、これがまた美味い。天カスのサクサクとした食感と、卵ご飯の滑らかさ。麺つゆの一風違う風味が絶妙なハーモニーを奏でるんだ」

「それはとっても美味しそうなんだよ。是非とも今度試してみるよー」

「ってオイっ、時田っ。何あからさまに話題を逸らしてんだよっ。それに心音も乗るなよっ。そんなミエミエの誘導にっ」

飛田が復活して、割って入る。

「そーだねー。卵掛けご飯は大抵朝食食べるけど、朝から天カスを用意するのは、ちょっと大変そうだねー」

「そうじゃないだろっ。響が休んだ理由だよっ」

飛田は律儀に猫恋に突っ込むと、此方をじろりと睨む。

「つつーか、今度のはアホの私でも、解かるぞ。後ろめたい『理由』なんだろ」

む。流石に話題転換が露骨過ぎたようだ。しかし飛田は自分で言うほど、馬鹿じゃないだろ。

しかし、どうしよう。

このままではセクハラ発言まで辿りつかれるのは、時間の問題だろう。そう焦っている俺に、この状況を打破し得る、救世主の声が届く。

「おーい。つつーかさー」

氷室幸一だった。

助かった。お前がナイスタイミングで声かけてくれて、本当に助かった。

「おおっと氷室が来たから俺は名残惜しいけどもう行くことにするねいやあそれじゃあまた月曜日にね」

句読点の一切無い滑らかな誤魔化しをして、俺は二人の前から逃げるように、去る。というか、逃げ出す。二人とも何か言いたそうな顔をしていたが、気にしない、気にしない。

教室の前方の扉に、凭れ掛かっている氷室。そういったちよつと

した動作もいちいち絵になっている。

俺が近くまで行くと、片手を挙げて、問いかけてきた。

「来夢ちゃん、もうカラオケに誘ったかい」

俺はてっきり冗談だと思っていたが、彼にとって朝の会話はどうかやら本気だったらしく、一難去ってまた一難といった状況になっていた。

氷室には俺を助けてくれた恩もあるので、まあ、形だけでも誘わねばなるまい。

小鳥遊さんは、いつも通り、窓際の席、一番後ろで、本を読んでいた。

土曜は昼食の時間が無いからだろう。本を読みながら、パンを頬張っている。まだ帰っていなかったのは、俺にとって幸運なのか、あるいは不運なのか。

それにしても綺麗だった。腰の辺りまで伸びた、黒く長い髪と、それと対照的な雪のような白い肌。細められた目は手元の本から動かされる事は無いが、長い睫毛が特徴的だ。ずっと通った鼻に、薄くグロスを塗ったのだろう唇が、何処と無く官能的な雰囲気醸している。けばけばしい化粧をしている訳ではなく、ナチュラルメイク、というのだろうか——も彼女の魅力を引き立てる要因の気がした。

朝の会話もあってか、俺の視線は自然に下へと向けられる。成る程、大きい。氷室が夢中になるのも、解かる。

「小鳥遊さん」

突っ立っている訳にもいかなないので、俺は観察をそこで中断して、声を掛ける事にした。メーブルメロンパンを啜えながら、彼女は此方を見てくる。

「パンはあげませんよ」

無視されるかと思ったが、返答を返してくれた。しかも、俺には全く記憶の無い意地汚さに釘を刺されて（変な日本語だ）。大体、もう最後のひとつで、今彼女が食べているパンしか残っていない。なんて失礼なんだ。彼女が食べかけのパンなんて俺が欲しいと思うのだろうか。――欲しくないと胸を張って言えないのが、男の哀しい性なんだろうなあ。

「欲しくないです」

「物を食べながら本を読むことは行儀悪いとは知っていますが、止める気はありません」

否定すると、また彼女が会話を先回りして、返答する。返答したら、文庫本に目を落とした。なんとなく、そこから、彼女が早く会話を終わらせたがっているのを、感じる。よって俺はさっさと用件を切り出すことにした。

「カラオケに、行かないかい」

再び彼女は顔を上げる。

そして、きっぱりと、言った。

「お断りします」

でしようね。

振られた事ですし、帰るとしますか。

じゃあ、と言って振り返る、俺の背中に、彼女は問いかける。

「ところで、誰の差し金ですか」

差し金、とは古めかしい言葉だな、と感じた。小鳥遊さんがそこに考えが至ったのは鋭いが、氷室の名誉のためにも有耶無耶にしておこう。

「いや、俺の独断だけど。小鳥遊さんとの仲を深めたいなー、と思った純粹なデートのお誘いだよ」

「私の考えだと、あの氷室、とかいう方ではないかと思うのですが、違いますか」

どうして俺の周囲には、鋭い方が多いのでしょうか。相対的に考えると、俺が判りやすいという事になる。何て事だ。

「黙っている所を見ると、そのようですね」

「――そうです。その通りです」

ごめん、氷室、俺じゃあお前を、守れなかったよ。

俺が彼の名誉を守れなかったことを、深く反省していると（反語的表現）、小鳥遊さんは、「そうですか、彼が――」と、何事かを呟き、俺に顔を向け、再び質問をしてきた。

「つかぬ事を伺いますが、私がその誘いに乗った場合、貴方はどうするおつもりでしたか」

「いや、今月は財布がピンチだし、君の承諾の如何に関わらず、参加しない予定だったけど」

古風な言い回しをする彼女につられ、若干言葉遣いが古くなりながらも、俺は返答する。

すると彼女は、

「そうですか。では、彼には『時田君が不参加だと知った瞬間に、私は誘いを断った』とお伝えください」

そう、言った。

成る程。それは、それは。

「ねえ、小鳥遊さん。一つ訊いていいかな」

もはやそれ自体が一つの質問なのだが、彼女に問いかける。

小鳥遊さんはどうぞ、とそれに対して返答する。許可をもらったので、俺は一見かなり失礼な質問を試してみた。

「君、もしかして、性格悪かったり、するのかな」

小鳥遊さんは、その質問に対しても、大して気を悪くする風でもなく、口の中のメーブルメロンパンを咀嚼し、たっぷりと間を置いてから、結局彼女は最初から最後まで無表情のまま——答えた。「良いと言われた事は、ありませんね」

八章『時間跳躍のパラノイア』

人生を長期的なスパンで見ると、そのときは不幸に感じたとしても、後々幸福のための礎となった。みたいな出来事があるらしい。だから我慢も大切だ。

というような事を父さんは言いたかったのだろうか。

しかし世の中には即物的な不幸というか、確実に不幸しかもたらさないだろうという出来事が、ざらにある。

例えば、身体中を蝕む筋肉痛だとか。

例えば、皺だらけになったズボンだとか。

例えば、コンタクトレンズを落としてしまった事は。

これらは間違いない、と言っていい位、俺に不幸しか与えないだろう。

あるいは、両親が事故で死んだことだとか。

あるいは、義妹がそのショックで声を失った事だとか。

あるいは、義妹が、両親の死の映像に、いまだ怯え続ける事は。これらだって間違いない。

俺の人生の中で、きっと最大級に不幸な出来事だと断言できる。

だけど、

ある日突然見知らぬ人がやってきて、自分の家の居間でほうじ茶を啜っているこの出来事は、

幸福な出来事なのだろうか。

即物的な不幸なのだろうか。

あるいは、幸福の礎の為の、不幸なのかだろうか――――

「あら、司くん、帰ってきていたのね。お帰りなさい」

「」

「お邪魔しています」

昼飯前に学校が終了し、お腹を空かせて帰ってきた俺を待っていたのは、峰子さんと、恵理香と、あと知らない女の人だった。

ゴスロリファッション、というのだろうか。黒を基調としたドレスのような服を着ている。一種のコスプレのようにも取れるその服を着ていても、あまり違和感がないのは、彼女が外国人だからだろう。パイナップルのように逆立てられた髪の毛は、金色だったし、白い肌と、緑色の瞳がどう考えても日本人のそれ、では無かった。

年齢は俺たちと同世代ぐらいに見えるが、傍らにいる峰子さんが『年齢詐称』という概念を擬人化したような人間だから、油断は出来ない。

「すみません。峰子さん、こちらの方は、どなたですか」

峰子さんにそう尋ねると、彼女は一度目を見開いてから、その方を俺に紹介してくれた。

「やあねえ司くん。昨日、引ったくりから彼女を助けたんでしょ」
くつくつと笑いながら、そう言う峰子さん。その言葉に触発されて、俺はもう一度彼女を眺める。なるほど。言われてみれば確かに、そう、見える。確かに昨日のあの人だ。しかし、この格好で気付けという方が無理な話ではないか。

「彼女、名前はノナさんっていうらしいわよ。昨日のお礼と、『お話』があるそうで」

「司さん、名乗るのが遅れてしまって申し訳ありません。ノナ、と申します」

——いろいろと言いたい事もあるが、兎に角、彼女が家に来てくれたのは、好都合だった。鞆も返さねばならないし、ね。

と、そこで峰子さんが立ち上がり、両手を一度打ち合わせる。

「ま、とりあえずご飯にしましょ。ノナさんも食べていくでしょう」

提案と質問。

「いえ、流石にそこまでは」

一度、拒否するノナさん。だが、まあ、俺は勿論食べるつもりだし、きつと形上断っただけだろう。

「いいのよ。三人分作るも、四人分作るも似たようなものだし」

そう言っつて峰子さんは、台所へと向かう。居間には俺たち三人が残された。

場を支配する沈黙。そこに響く茶をすする、音。

「えっと、よく、家が判りましたね」

「司さん、昨日、名乗られましたからね」

「ええ、まあ」

「そういう事です」

どういう事ですか。普通、名乗っただけの相手の家は、判りません。電話帳にも載せてない筈だし。

「」

何かを訴える恵理香。

彼女は立ち上がると、椅子を運び、俺の隣に腰を下ろした。四つあるテーブルの辺。その一つを俺たち兄妹二人が同時に占拠している形になる。

「仲が、宜しいですね」

皮肉気に微笑むノナさん。相対的に見れば（絶対的に見ても。つまり、どう見ても）、彼女から距離を取った事になるのだから、何か思うところがあるのかもしれない。だがしかし、初対面の人間に懐け、という方がそもそも無理な話だ。俺も小さい頃は人見知りする性格だったらしく、親戚の集まりでもあまり他人に懐かなかっただらしい。

「ああ、あれ、取って来ましょうか」

そこで俺は思い出す。荷物を早めに返しておいたほうがいいかもしれない。彼女だって今日は恐らく、それを取りに来たんだろうし。

「あれ、とは何ですか」

「ハンドバックですよ。それと、勝手に中を見させて頂きましたけど、クリアファイルも、です」

「いえ、要りません。言っただけでしょう、差し上げる、と」

「そうは言ってもですね、それに、バックだって高いものでしょうし」

「あれは中身に比べれば、価値なんてまるで無いに等しいのですけどね————まあ、如何してもというなら、バックは受け取りましょう。しかし【ぼうけんのしょ】は貴方に受け取ってもらいます」
「なんでそんなに意固地になるんですか。それに【ぼうけんのしょ】ってあのファイルの事ですよ。あれ、何に使うかもさっぱり解かりませんでしたよ」

「でしようね」

そこまで言うと、ノナさんは一度言葉を切り、こう、宣言した。

「今日はその【ぼうけんのしょ】の使い方について、貴方に教える来たんですよ」

ここまでの会話で俺が感じたのは、「もしかしたら、ノナさんって、——ゴニョゴニョ——な感じの人なのかなあ」って事だった。

昼食（焼き蕎麦だった。美味しかった）を食べた俺とノナさん（恵理香も付いて来たがっていたが、一階で待っていてもらった）は、二人で俺の部屋へと向かった。

部屋へ入ると、俺は片隅においてあったハンドバックを「はい」とノナさんに渡す。彼女は中身を取り出し、俺に「はい」と返してきました。どうやら、梃子でも譲る気は、無いらしい。

「では、使い方を説明しますね」

ノナさんはベツトに腰掛け、そう、切り出した。

「ところで、割り箸はありますか。あと、ライター。説明に使いたいのですが」

おーけー。解かった。どうしても説明をして、俺にその【ぼうけんのしょ】とやらを押し付けたい、らしい。こうなったら、もう、とことん付き合うしかないだろう。彼女の目的も、行動理由も何もかも不明なままだが、半ばやけくそ気味に、俺は彼女に付き合うことを決意する。

俺は自分の鞆の中のコンビニ袋から、割り箸を取り出して、彼女に差し出す。そしてポケットからライターを取り出して、同様に。

「あら、ライターをポケットから取り出すなんて、意外と不良なんですね」

「別に、煙草を吸いたくて持ち歩いている訳では、ありませんよ」

「でしょうね。煙草の匂いがいしませんから。では司さん、その割り箸に、名前を書いて頂けますか」

筆箱からサインペンを取り出し、言われた通りに割り箸に自分の名を、記す。不安定な為か地震の時に書いたように振動している『つかさ』という字を彼女に見せた。

「これでその割り箸は、世界で唯一つの割り箸となった訳ですね」

ノナさんは、カードにサインさせたマジシャンのような科白を言う。俺はその言葉に「はあ」と曖昧な返事を返す。別にサインを書く前だって世界で唯一つの割り箸だろう。他の物と見分けがつくかどうかは別問題として。

「では、次にこの紙を使います」

ノナさんは【ぼうけんのしょ】から、あの使用用途のよく解からない紙を一枚取り出すと、を俺に渡した。

「中央に、記入欄がありますね。そこに未来の時刻を――今はなるべく早いほうがいいので、今から一分後の『十三時十五分』にし

ましよう。そこに今日の日付。そして『13…15…00』と書いてください」

言われたとおりに書く。

「書いたら上にある1と3の数字、どれでもいいので丸で囲んで下さい」

言われた通りに囲む。

「では、その時間まで、待ちます」

紙を置いて、俺は床の上に正座をして、待つ。胸の奥から湧き上がる、「俺、何やってるんだろう」という疑問を、必死で押し殺して。

僅か四十秒程度でも、ただ待つ、という作業は、結構な長さを感じるものだ。

部屋の時計の秒針に注目する。

『10』の文字を通り過ぎ、『11』の文字も通り過ぎ、

やがて、

それが

『12』の文字と、重なった――

「はい。これでセーブが完了しました」

ノナさんが、俺の手に行っている紙を指差す。それにつられて俺も紙に目を落とす、と、その変化に気付く。

「あれ、こんな判子、押して無かったですよね」

そうなのだ。俺が書いた時刻の上に、被せるように、少し傾いて、赤い《SAVE》の文字が浮き上がっていたのだ。

彼女が、押したのだろうか。いや、俺がずっと持っていた訳だし、それは、無い。

と、いう事は始めから、浮かび上がるような仕掛け、が、この紙に施されていたのだろう。

「では、先ほどの割り箸。これを『折って』ください」

そういつて割り箸を俺に差し出す。『割って』ではなく、『折って』なのか。俺は一旦割り箸を二つに割り、さらに折った。これで

割り箸は四分割された事になる。『つかさ』の文字も左右に真つ二つと、なった。

「はい。大丈夫です。効果を解かりやすくするために、また五分ほど、待ちます」

またですか。それも今度は、五分。

「その前に、ロードの手続きを済ましておきましょう。紙の下部に線がありますね。そこに司さん。あなたのフルネームを、お書きください」

この線は、名前を書くためのものだったのか。要求通りに俺は『時田司』と、名前を書いた。

これでこの紙は上の方に印刷された数字が丸で囲まれ、中央の欄には今日の日付と、時刻。下部には俺の名前が記載された状態と、なった。

ここまで来ても、この紙を何に使うのか、とんと見当がつかない。いや、まあ、勿論、性質の悪い悪戯の可能性が高いが。

ふと、目線を前にあげると、ノナさんが俺をじっと見ている。こう表現すると、何か好意的な印象を受けるが、実際には、なんといったらいいのか、動物園の白熊を見る目、いや、蛙の解剖を見る目、というのだろうか。そんな感じが、した。

「そういえば、ノナさん」

流石に五分間も黙ったままにいるのは、俺の神経が、持たない。適当な世間話でも、持ち掛ける事にした。

「なんででしょうか」

「ノナさんって、普段は何をやってる人なんですか」

「秘密です」

秘密と来たか。

「ああ、でもこの説明が終わった後には、お話しますよ。《百聞は一見に如かず》と言いますから、今、私がここで何かを言っても、無駄に貴方の猜疑心を高めるだけですから、ね」

もう既に猜疑心はマックスですよ。――とは、当然、言わなか

った。

「さて、五分経ちましたね」

結局そのあとは、特に話題も振れず、殆ど沈黙したまま、過ぎた。

「ではこれで、最後です。司さん。ライターと、今記入した、その紙を持って、庭へ向かって下さい。そして私が合図をしたら、その紙を燃やして下さい」

最後の要求は、かなり注文が多いな。彼女を一人にすることに僅かな不安を感じたが、尤も、この部屋に盗って得するものなど無いだろうから、要求通りに、外へと向かった。

出る途中、恵理香が俺に気付いて、付いて来る。シャツの端をぎゅっと捕まれてしまったので、振り払うなどと無下に扱う事は出来なかった。二人で、庭へと出る。

まるで森の様な景観を持つ、庭。

その中央に俺と恵理香は立ち、俺の部屋の方を見上げる。

その窓からノナさんが、顔を出して、こちらを確認した。

「はい、大丈夫です。燃やして下さい。ところで司さん、今、何時何分ですか」

言われて、俺は自分の腕時計で時刻を確認する。十三時二十一分、三十秒を少し回ったところだった。

答えようとして、再び視線を戻すと、ノナさんは、もう、部屋に引っ込んでいた。

「何なんだよ、本当に」

そう独り言ちる俺を、恵理香が不思議そうな目で見てくる。

しかし、燃やせとの合図が出たのだ。さっさと燃やして、部屋へと戻ろう。

そう考えて、

俺は、

ライターで、

紙に、

火を点けた。

0
—
【Data File
No. 1
—
4
／
1
4
1
3
..
1
5
..
0

九章『TRUE REMBRANCE』

【Data File No. 1 — 4 / 14 13 .. 15 .. 0
0 — ロードしました】

フラッシュペーパー。

マジシャンが良く使う、マジックの小道具である。

通常、紙を燃やしたとき、紙は炎を上げ、少しずつ灰になりながら燃えていく。

が、フラッシュペーパーは特殊な素材で出来ており、閃光を上げ、一瞬で燃え尽きる。

その閃光が出る特性を利用し、不意を付いてフラッシュペーパーを燃やすことで、観客の視線が閃光に集中している隙に、死角（物理的な、あるいは心理的な）から何かを取り出し、まるで空中から物体を取り出したかのように魅せる事も、出来る。

だから、その紙が眩い閃光をあげたとき、もしかしたらフラッシュペーパーで出来ているのかな、と、そんな事が一瞬だけ頭を過ぎった。

ほんの、少しだけ。

目を開けると、目の前に、ノナさんが居た。

と、いつでも彼女が閃光を利用して、二階から飛び降りて来た、
だとか、そんな理由ではない。

『逆』だ。

俺、が、

いつの、間にか、

『俺の部屋に、居た』のだ。

脳が、パニックを、起こす。

旅館先などで目覚めた時に、一瞬だけ陥る、『ここはどこだ、何
故ここに居るんだ』という類のパニック。大抵は直ぐに旅行中だと
いう事を思い出し、収まるが――。

何故、俺は、ここに、居るんだ。

「司さん、今、何時ですか」

ノナさんがそんなことを聞く。何を言っているのだろう。先程確
認したばかりだ。十三時二十一分を少し回ったところ――俺の時
計盤は、十三時十五分を、指し示して、いた。

見間違え――いや、いくらアナログ時計とはいえ、五分も見間
違える事なんて、有り得ない。

それに、十三時十五分から、俺たちは、『五分以上時間を潰した』
筈なのだ。

部屋の時計も確認する。電波を受信するタイプの、正確無比なそ
の時計も、十三時十五分だった。

何だ、

何なんだ、

何が起こっているんだ。

一体、どういう事なんだ。

「司さん、それ」

混乱している最中の俺に、ノナさんが、さらに追い討ちをかける。彼女の指は、俺の足元を指差している。

視線を、下に向ける。

俺の足元に、落ちている、割り箸。

俺がサインを施し、四つに割った、それが、が。

「————綺麗に、一つに、くつついて、いた。」

反射的に拾い上げる。

表面に汚い字で書かれた『つかさ』という文字は、紛れも無く、俺が書いたもので。

しかし、割れているところか、傷一つ付いていなかった。

パニック。それが再び俺に牙を向く。

しかし、頭の中、もう一人の自分が、それを否定する。

それは、多重人格なんて大それたものではなくて、

俺が慌てふためいた時、どこからか客観的に俺自身を見ている、
感覚。

慌てている表層の俺とは違い、理性的な『彼』は今起きた現象を受け止め、一つのある仮説を提示する。

瞬間移動。

戻る時計。

直っている、割り箸。

『多分、これらの現象を同時に満たす為には――』
違う。

そんな事があるはずが、無い。
ファンタジーやメルヘンじゃないんだから。

だが、そんな感情に身を任せた反論など、『彼』が聴く筈も無い。
『彼』は俺の部屋を飛び出ると、一階へと転がり落ちるように降りて行き、

その物音に驚いたのか、居間を出てきて目を丸くしている恵理香に、尋ねた。

「なあ、恵理香。さっき、俺と一緒に、庭に出たか」

恵理香は、その質問の意味が咄嗟には、解からなかったのだろう。
反芻するように、記憶を辿る素振りを見せて、

首を、

横に、

降った。

俺が部屋に戻ると、ノナさんは窓辺に腰掛け、爽やかな春風を堪能していた。

「妹さん、覚えていらっしやらなかったでしょう」

断言する。

俺が無言で居ると、彼女は外に向けていた顔を、俺へと向ける。「安心してください。貴方がおかしくなった訳ではありませんよ。

割り箸を折り、五分間を過ごし、妹さんと一緒に庭に行った。それもある意味、真実の記憶ですから」

尚も無言で佇む俺に向けて、彼女はにっこりと笑いながら、告げた。

「《時間逆行^{リバース}》。それが貴方に与えられた、道具です」

「お察しの通り、【ぼうけんのしょ】は、人間が作ったものではないありません。一定次元以上の高次存在——有り体な言葉でいうなら、『神』、が妥当でしょうか——が創り、戯れに、あるいは実験的に人間界に譲渡したものです。その役割を私が担っている訳ですから差し詰め私は『天使』といったところでしょかね」

ノナさんが約束通り、自らの素性を説明する。【ぼうけんのしょ】の現象を体感していなければ、荒唐無稽、電波だと笑い飛ばすような話だが、今では彼女の言葉を否定出来なかった。

「譲渡の目的は実験、もしくは遊戯のようなものですから、もう【ぼうけんのしょ】は貴方のものです。それを使う事による代償も、特にはありません。どうしても、というのなら他人に譲る事も可能ですが——そんな気は、無いですよね」

意地悪げな視線が俺を射抜く。

「【ぼうけんのしょ】を使えば、セーブとロードを繰り返す事によって、貴方の人生は薔薇色になる事でしょう。多分、恐らく、きっと。基本的な使い方は先程示した通りです。紙の下にしてもらった

サインは、記憶の継承に関する手続きで、ロード前の記憶が必要な場合は書いて下さい。勿論記憶を受け継ぎたくないような事態に陥った場合は書かなくても結構ですが、まあ、そんな事態を記憶無しで回避するのは大変そうですね」

説明を続ける彼女。

「サインは黒か、青のボールペンで――なんて細かい事は言いません。シャーペンでも、出来るんなら血文字とかでも大丈夫です。世界最高峰の探偵に追い詰められたら、そうしてください。が、あくまで直筆のサインでお願いします。判子や代筆は認められません」その説明を、俺は半ば呆然としながら、聞く。未だに自分の身に起きた事実を、肯定しかねていた。

「【ぼうけんのしょ】の中身は、使った分だけ補充される仕組みなので、どしどし使っちゃって大丈夫です。あと、注意すべきは、一度にセーブデータは三個までしか保管出来ません」

そういつて彼女は、紙の上部に書かれている数字を、指差す。

「この番号に丸をつける事が必須条件なのですが、既に同一番号を丸で囲んだセーブデータが存在していた場合、セーブ完了手続きが終了した段階で、古いデータは無効となります。まあ、RPGのセーブデータと同じような物だと考えて下さって結構です」

そこで一度言葉を切り、俺に目を向ける。

「ここまでで、何か、質問はありますか」

質問。

訊きたい事。

沢山あった。

このファイルの原理だとか。

何故俺に渡したのか、だとか。

実験とは何なのか、だとか。

けれど、『彼』は、さしあたって一番の疑問を投げ掛けた。

「この『Level 1』という文字は、何の意味が、あるのですか」

そう、この文字に関してだけ、何も説明がされていない。

その質問に、ノナさんは少々驚いたような顔をしたが、ふふふ、と笑ってから、

「秘密です」

と、言った。

彼女は立ち上がると、此方に背を向け、別れの挨拶を、告げる。

「では、今日はこの辺でお暇しますね。細かいルールとかは、また、後日。一週間後位にまた来ますので、その時までには質問したいことはまとめて置いてください」

彼女が出て行った後も、暫くは動けなかった。俺は『彼』ほど素直でも、計算高くも無かったから。

しかし、机の上の【ぼうけんのしょ】を見て、先ほどの出来事を思い返すにつれて、徐々に、少しずつ、現実を受け止め始めた。

—————過去に、戻れる。

その言葉が頭を支配した時、俺は机に駆け寄った。

乱暴に【ぼうけんのしょ】から一枚紙を取り出すと、二年前の『あの日』の日付を急いで書き込み、数字を丸で囲み、サインを書いてから火を付けた。

が、紙は閃光を上げる事無く、ごく、当たり前の紙のように炎を出して燃え始める。

「熱っ」

思わず手を離す。紙が床に落ちる。慌てて火を消すが、少し、カーペットが焦げてしまった。

こういう事だ、過去に、戻れるんじゃないのか。

『馬鹿か、俺は』

そんな俺の様子を見て、『彼』が嘲笑する。

『あの女の言った事を思い出せ。プロセスが、手順があるんだ』
そうだ。

この本が行えるのは、ゲームで言うところの『セーブ』と、『ロード』。自由に時間を操れる訳ではない。

時間軸で言うなら、戻れる最大の始点は、今日、この時まで。

それ以前の事をやり直しは、出来ない。

両親は、帰ってこないし、恵理香は、救えない。

『それに、あれだけの説明じゃ、明らかに不十分だ。よく解からない事、不明な点が多々ある』

不明な点。

『だから、まずは検証、だろうな』

そういつて俺の椅子に腰掛ける、『彼』。【ぼうけんのしょ】から数枚の紙を取り出すと、何事かを書き始める。

検証――、して、どうするのだろうか。

『《どうする》って、本当の馬鹿か、俺は。《どうとも出来る》だろ。これが、あれば』

何をする気だ。

『だから、《何でも出来る》んだってば。けど、肝心なときにルールを把握して無くて、「戻れませんでした」じゃ、お話にならないだろう』

机の上に無造作に置かれた紙の一枚に、《SAVE》の文字が浮かび上がる。『彼』はそれを見て、何てこと無いように、言った。

『まず、気になってたんだけど、紙が破けてても、効果有るのかな、コレ』

ふと時計を見ると、既に朝、と言っている時間帯だった。我ながら、熱中していたらしい。

部屋中に散見される、紙の燃えカス。

本来ならもっと大量にあってもいい筈だが、《ロード》を繰り返している間に、その数は規則性なく減少する。

ふと、今日は日曜日で、日比野が遊びに来る筈だった事を思い出す。

徹夜してしまって、さぞ酷い面構えになっている事だろう自分の顔に思いを馳せる。夕食の時も峰子さんに何があったのかしつこく心配されたし、一睡もしていないのは、不味いかもしれない。

だから俺はルーズリーフに手を伸ばし（これは【ぼうけんのしょ】ではない、普通のルーズリーフだ）、そこに書かれている内容を頭に叩き込む。その紙には一晩で調べ上げた――まあ、実際にはそれ以上の時間が経過しているが――【ぼうけんのしょ】のルールが記載されて、いた。勿論俺の実験による結果だから、本来の物とは微妙に違っているかもしれないが、まあ、そのあたりの事は今度ノナさんに訊けばいいだろう。

兎に角、その内容を忘れないように、必死に記憶する。

そして粗方覚え終えると、今度は【ぼうけんのしょ】から、一枚取り出して、元は親父のものだったオイルライターを使い、

「おやすみなさい」

火を、点けた。

【Data File No. 3 - 4 / 14 22..00..00 - ロードしました】

幕間『時空かくれんぼ』

小学生の時、よく、かくれんぼをした。

ジャンケンで何故か良く負ける俺は、いつも大抵鬼役をやらされていた。

そのうち、ジャンケンをしなくても、俺が鬼をやるのが恒例化した。

いつも探す役なので、「たまには隠れてみたい」と訴え、鬼役を交換してもらった事がある。

いつもとは違う役割を与えられた俺は、興奮し、気合を入れて隠れた。

意外なところに隠れて、鬼に見つからないよう、息を潜めていた。日が暮れて、あたりが暗くなっても、隠れていた。

星が出てくる頃になって、様子を伺いに外に、出た。

俺以外の友達も、全員、帰っていた。

多分、殺人の動機なんてそんなものなんだろうな、と思う。

足元に転がる女の死体を眺めながら、漠然とそんな事を感じた。

そうすると、あの時俺を置いて帰った友人達は、間接的に彼女を殺した事になるのだろう。

夜の街、帰宅している俺の前を、この女が歩いていた事がきつかけだった。

ふと、振り返って俺を視界に入れた彼女は、少し、歩く速度を上げた。

まあ、夜遅いし、独りで帰宅する女性なら、当然の用心といえな
い事も無いが、

俺は無能な上司の小言やら、職場の煩わしい人間関係やらにうん
ざりして、その時とても疲れていたし、

なんとなく、その行為が癪に障り、
気付いたら、追いかけていた。

なんで逃げるんだよ。俺は鬼か。

かくれんぼでもしようか。なんなら鬼ごっこでもいい。

俺が速度を上げたのに気付き、驚く彼女。

慌てて再び速度を上昇させる。

ちよつと、面白くなった。

俺に追跡されたまま、自宅に戻るのは不味いと判断したのか、彼
女は狭い道を走るように逃げていった。

しかし、その判断は間違っている。

本来逃げるべきは、広い人通りの多い道だ。

人が少なく、カモフラージュ出来ない状況では、相当な体力差が
無い場合、まず撒かれない。

で、今に至る。

倒れた女性。

俺。

煙を銃口から吐き出す拳銃。

ゴミ捨て場まで追い詰めたから、試しに銃で撃ってみた。
まさか初弾で頭に当たるとは思わなかったけど。
俺には銃の才能があるのかもしれない。

まあ、そんなものがあつたとしても、大して役に立つとは思えないが。

ふと思い立って、彼女を観察してみる。

華奢な身体。

派手な服装。

顔の左半分が吹っ飛んで、脳漿がはみ出している事を除けば、それなりに綺麗な、化粧の厚い顔。

人形みたいだな、と思った。

ちょっと、壊したくなって、もう一発、銃弾を撃つ。

乾いた銃声と同時に、彼女の右顔面が吹き飛ぶ。

さらにもう一発。

響く銃声。

飛び散る血肉。

もう一発。

銃声。

肉。

もう一発。

銃声。

肉。

もう一発。

銃声。

肉。

段々興奮してきた。これは、楽しい。

綺麗な人形を壊す、快感。それが元々は生きた人間だったのだと

いう、背徳感から更に高まる。

もう一発、撃とうとした所で、腑抜けた音を銃が出し、弾丸切れを俺に知らせる。

しまった。予備の弾丸は家にしか、無い。

それにこれだけ銃声を響かせたんだ。

そろそろ人が集まるかもしれない。

俺は後ろ髪引かれる思いをしながらも、もっと壊したいという願望を押さえ込み、帰路へとついた。

だけど、うん、そうだな。

次はもっと人形で遊びたいな。

十章『日曜日の太陽』

《ロード》を使い、睡眠時間を稼いだにも関わらず、ほとんど眠れないまま朝を迎えた。

ベットを抜け出し、顔を洗うために一階に降りる。と、そこで峰子さんと鉢合わせた。

「あら、司くん、早いね。今日は日曜日よ」

俺が休みの日に早く起きたことで、驚いた様子だ。

「今日、日比野が来るんですよ」

俺は欠伸を噛み殺して答える。

「あら、それで」

その返答に対して、何か得心がいったような様子で頷きながら、洗面所を後にする峰子さん。何が「それで」なのだろうか。

「げ。これは酷い」

入れ替わるように洗面所に入ると、犯罪者が、居た。

いや、まあ、鏡に映った俺自身の顔なのだけれど。

元々目つきは悪かったが、目の下の隈がくつきりと出来ていて、本当に、脱獄囚のような趣を醸している。

隈ってどうやったら消えるんだっけ、などと思いながら洗顔を開始する。そこで、先ほどの会話をふと、思い返した。

「――あの会話に、この隈。『日比野が来るのが楽しみで眠れませんでした』って言うてるような物だったのか」

まあ、その推察は概ね当たっているけれど。

昨日の【ぼうけんのしょ】の事と、

日比野がバリカンを買いに走ったという事実がなければ、の話だが。

「やあ、一昨日ぶりだな」

日比野は昼過ぎにやって来た。

「あら、響ちゃん、いらっしやい」

「」

出迎えの挨拶をする、峰子さんと恵理香。

「お邪魔します」

「いえいえ、いいのよ。ゆっくりして行ってね」

そういうと、峰子さんは「後は若人だけでごゆるりと」等と歌いながら、出掛けてしまった。どうやら、日比野に挨拶だけしたかったらしい。

靴を脱ごうとする日比野に、抱きつく恵理香。抱きつかれた日比

野も、笑っている。

「久しぶりだな恵理香ちゃん。司に虐められてはいなかったか」

「待て」

なんと言う事を言うのだ。人聞きの悪い。

「こんにちは、司。一昨日ぶりだな」

再び俺に挨拶をし直す日比野。

「そうだな。一昨日ぶりだ」

気の利いた返しが思いつかず、思わず鸚鵡返しおうむになってしまう。

「ところで、司よ。どうして今日は眼鏡をしている」

おお、日比野。お前だけだ、最初に俺の変化を気に掛けてくれるのは。

「コンタクト、落としたんだよ」

「そうか、あれ、高いんじゃないのか」

「まあ、それなりに、な」

「むう」

黙り込む日比野。顔色が浮かない。

「どうした」

「いや、その、まあいい」

心配して声を掛けるも、自己完結されてしまう。ちょっと寂しいですよ、俺は。

「ところで日比野さん」

「何だ」

「そちらの鞆は何なのでしょう」

日比野の服装はシフォンワンピース、というのだろうか、ふんわりとしたフォルムの、明るい水色のワンピースに、デニム生地のパンツを組み合わせたスタイルとなっている。全体的に寒色系で統一されたコーディネイトで、本日の爽やかな春空を俺に連想させる。が、何故か彼女はその服装に似合わないボストンバックを脇に抱えていた。

「これはだな、うん。司が負けてからのお楽しみだな」

しっかりと賭けの事は覚えてらした。

「ああ、そうか、賭けね」

俺は今思い出したかのような演技をしてみせる。

「そうだ。家にあったと思ったが見つからなくてな、色々探し歩いたのだよ」

そうまでして、俺を坊主にしたかったんですか。

「さて、今日はどんなゲームで勝負をするんだ」

彼女は楽しそうな微笑を浮かべて、問い掛けて来る。多分、ゲームをする事自体も、楽しみの一つなのだろう。同時に、どんなゲームが来ても負けないという自信が伺える。

「色々用意しておりますが、どれにいたしましょう」

「一番良いのを頼む」

「ガイスター、ね」

日比野は目の前に用意されたゲーム盤、およびその上に鎮座する十六の駒を見て、そのゲームの名称を、呟いた。

「知っている、のか」

「いや、ただ単に箱に入った文字を読んだだけだが」

うん。確かにこのゲームが入っていた箱に、思いつきり片仮名で『ガイスター』って印刷されてた。

「じゃあ、ルール説明が必要か」

「ああ、願います」

そういつて真剣な表情になる日比野。自分の知らないゲームで戦う時は、いかに早くそのゲームのルールを把握して、駆け引きのポイントとなる部分を理解し、最適な戦略を見つけ出せるかが鍵を握る。百戦錬磨の強さを持つ彼女が、多分、その事を一番よく解かっているのだろう。

俺の部屋。昨日掃除したから片付いているその中心部で、座布団を二つ敷き、ボードを挟んで向かい合う俺と、日比野。恵理香は久しぶりに来た日比野の背中に、負ぶさっている。何と言うか、微笑ましい。仲のいい姉妹のようだった。

「このゲームは、見ての通り六×六マスのゲーム盤と、幽霊をモチーフとした、お互い八個ずつの駒を使って戦う」

そう言って八個の駒を、日比野に渡す。彼女は渡されたそれを、興味深そうに、眺める。

「ボードといい、駒といい、なかなか凝った造形だな」

「ボードゲームマニアの間では、それなりに人気で、評価が高いゲームだからな」

日比野の素朴な感想に、そう答えて俺は説明を続ける。

「自分側に接している二行の、中心四マス。計八マスが自分の《陣

地』だ。そのマスにこの駒を、自由に配置する事で、ゲームが開始される」

指を差し、彼女側の《陣地》を示す。

便宜上、チェスと同じように、俺から見た、三十六マスを、縦の筋を左から順にアルファベットのa、b、c、d、e、f、横の筋を俺から向かって1、2、3、4、5、6と定義するならば、俺の陣地は1b、1c、1d、1e、2b、2c、2d、2eの八マス。日比野の陣地は5b、5c、5d、5e、6b、6c、6d、6eの八マスになる。

「駒の種類は二種類。《良いオバケ》と《悪いオバケ》だ。それぞれの駒の内訳は、各プレイヤーに《良いオバケ》四つ、《悪いオバケ》四つだ」

「両プレイヤーとも、同じ内訳なのだな」

「ああ。この二つの見分け方は、駒の造形が全く同じだから、一見判らないが、駒の後ろ、背中の部分に印が付いているだろう」

「む、確かに。赤と青。二種類の印が付いているが、まさか」

「そう。それが見分け方だ。青い印が《良いオバケ》、赤い印が《悪いオバケ》だ。信号みたいな感じで関連付けると、覚えやすいかもな」

「青が、《良いオバケ》。赤が《悪いオバケ》、か」

「そしてコレを配置する時は、当然、相手の方に前面を向けるように置くから、ゲームが始まったら、相手はどれが《良いオバケ》で、どれが《悪いオバケ》か判らなくなる。自分には見えているけど、な」

「相手は、把握出来ない、ね」

そう相槌を打つと、日比野は黙り込んだ。勘の良い彼女の事だから、このゲームの凡その概要が、予想できたのかもしれない。

「ゲームを進める手順は、こうだ。先手後手を決めたら、自分のタ

ーンに、自分の駒を一つ、縦か横に一マスだけ移動させる。斜め移動は出来ないし、パスは、無い。全ての駒の動かし方は共通だから、そこで相手の駒を判別は出来ない」

こちらをじっと見つめる日比野。

「相手の駒のある場所に、自分の駒を進めると、相手の駒を取る事が出来る。だから、基本的な考え方は、チェスと同じだと思ってもらって良い」

そう、基本はチェスと言える、シンプルなルールのこのゲーム。しかし、全ての駒のスペックが同じである以上、このゲームがそれだけだったのなら、これ程人気を博す事は出来なかっただろう。ここからが、このゲームの肝なのだ。

「では最後にこのゲームにおける、勝利条件を、説明する」

俺は指を一本立てる。

「三つあるが、まず、一つ目。四つの隅にあるマスは矢印が描かれているよな。」

そう、角にある四つのマスには、そこから横へ向けた矢印が、ある。番号で言うなら1a、1f、6a、6fの四マスだ。

「これは脱出口、と呼ばれるマスで、相手側の脱出口のマスから、自分の《良いオバケ》を一つでも逃がす事が出来れば、勝ちだ」

つまり俺は6a、6fから、日比野は1a、1fから脱出させれば良いのである。

「注意して欲しいのは脱出口、矢印の書いてあるマスに到達させた時点で即勝ちとなるのではなく、そのマスに居る、自分の幽霊を次の自分のターンに一回動かして、文字通り盤上の外へ逃がす必要がある、という点だ」

俺は二本目の指を立てる。

「次に二つ目。これは、相手の《良いオバケ》四つを、全て取ると

勝ちになる」

チェスのように駒を取り合い、その結果相手の《良いオバケ》を全滅させればいい訳だ。

「最後に三つ目。自分の《悪いオバケ》四つ全てを、相手に『取らせる』と勝ちになる」

この三つ目の勝利条件が、駆け引きのポイントに、なってくる。

「逆に言えば相手の《悪いオバケ》を四つとってしまおうと、その時点で負け、という事だ」

《悪いオバケ》を取りすぎると、敗北。

そしてゲーム中、相手の駒の種類を判別する、確実な方法は、無い。

「ルール説明は、以上だ。何か質問は、あるか」

「いや、特には無い。君は説明が上手だな」

そう言って、口許を斜めにする日比野。

「じゃあ、これでいいか」

「ああ。面白そうなゲームだ。私はこれで構わない。が、君はこれでいいのか」

確認を取る俺に、逆に問い掛けて来る、日比野。

彼女の言わんとする事は、理解出来る。

このゲームはシンプルで、ルールも理解しやすく、説明は五分もあれば充分だろう。それでいて、世界中のプレイヤーに愛されているのは、奥が深い心理戦が楽しめるからだ。

三つある勝利条件のどれを目指すかで展開する戦略。ブラフ、フエイク。その他諸々。

単純なルールと深い駆け引き。それがこのゲームの魅力、だが。

そういった『心理戦』こそ、いわば日比野のホームグラウンドだ。この手のゲームは彼女の最も得意とするところ。

ポーカーではワンペアでフラッシュの相手を降し、麻雀では此方の当たり牌を的確に避ける。

異能の観察眼に的確な読み。大胆なブラフと緻密な戦略性。

日比野響はこと心理戦において、右に出るものはいないだろう。そういう女の子、だった。

それでもポーカーや麻雀には少なからず運の要素が入ってくる。カードや牌の流れ次第では、此方が勝つ確率も、理論上は、ある。あくまで理論上の話は、だが。

しかしこのゲーム《ガイスター》には運の要素は一切、無い。開始時の駒の配置までプレイヤーに委ねられたシステム系統。そこに乱数は一切存在しない。純粹に、心を狩るゲームだ。互いが互いに相手の認識を支配しようとし、思考で相手をねじふせる。そういう遊戯。

つまり彼女はこう言っているのだ。

——このゲームで私に勝てるのか、と。

成る程。成る程。

確かに日比野の言う通りだ。もう一度言うが、このゲームは彼女が最も得意とするところ。

だが、しかし。

『だからこそ俺がこのゲームを選んだ』という事を、彼女は解かっている。

『運の要素』が入っては、『俺が困る』から、敢えて選んだと言う事を。

そう、俺はそんな事は百も承知で《ガイスター》を選択した。

「といっても勝負を投げたとか、そういった事ではない。俺だって坊主にはなりたく、ない。」

それでも俺が《ガイスター》を選んだ理由。それは、

彼女に百パーセント余すところ無く此方の手を見抜いてもらわないと、『俺が勝てない』から。

此方の手を読み切り、必勝の戦略を紡げる彼女。で、あるが故に俺の罠は作動する。

だから俺は日比野の問いに対して。

「勿論だ。俺だって負けるつもりは、無い」

そう、答えた。

十一章『たったひとつの冴えたやりかた』

二者択一。確率は2分の1。それで俺は今回、勝利を奪うことが出来る。

ゲーム盤を挟んで向こう側では、日比野響が挑発的な笑みを浮かべて、俺の様子を観察していた。——ってあれ、デジャ・ビュか、これ。まあいい。兎に角、ここで俺は再び二つに一つを選択を迫られている。

俺の頭髪を賭けた、《ガイスター》三本勝負。先に三回勝てばいいこの状況で、俺と日比野は共に二勝二敗ずつ。お互いに、後が無くなっていた。

この一局を取ったほうが、最終的な勝利をモノに出来るという大事な最終ゲームも、もう最終局面の様相を見せている。

日比野の脱出口の片方6a。その一つ下のマスである5aに俺の《良いオバケ》が居るのだ。とはいってもこの手を指した時、隣の5bに日比野の駒が居たため、俺の一手はある意味博打だった。彼女は今回俺の《悪いオバケ》を一つも取っておらず、《良いオバケ》だけを的確に三つ取っていたのだ。だから俺は通常考えればもう残り一つの《良いオバケ》を、日比野の駒の射程圏内に置けるはずが無い。だから裏をかいて敢えて無謀な攻めを見せてみたのだが、この程度の思考は日比野は確実に見切ってくる。そんな事は俺も重々承知している。が、俺が承知していることもまた、彼女は把握しているだろう。だから安直な捨て身戦略を俺が取るはずが無い。彼女はそう思うはず。そう考えての一手だった。

裏だの、裏の裏だの、そのまた裏だのを言っているのはキリが無い。兎に角、俺は攻めの一手を打った。彼女がそれを看破し、5bの

駒で俺の5aを取れば彼女の勝ち。取らなければ、6bに駒が存在しない以上、俺の勝ちになるはずで、あった。

あったの、だが。

結論から言えば、日比野は5bの駒で俺の駒を取らなかった。

しかし、勝負はまだ決着しなかった。

日比野は、『1fに駒を進めた』のだ。

1f。俺側の脱出口マス。俺に王手を掛けるための一手。

だが隣の1eのマスには俺の駒が一つ存在している。それ故に、さほど脅威にはならない一手である筈だった。

お互い、まだ駒を取り合っていない状況なら、ば。

ここでお互いの駒の状況を整理しておこう。

俺は《良いオバケ》一つに《悪いオバケ》四つ。俵に足が掛かった状況だ。日比野に提示した三つ目の勝利条件は満たせそうも無い。対して日比野は《良いオバケ》一つに、《悪いオバケ》一つ。俺もピンチだが、それと同じくらいピンチと言っても良い。俺は早々と日比野の駒を取り漁る戦略を取り、その結果、ここまで追い詰められたのだ。

つまり日比野は俺の5aの駒に対し、自分の5bの駒でただとれば良いのだ。《良いオバケ》ならその時点で勝利出来るし、例えば《悪いオバケ》でもさほど不利にはならない。

にも関わらず、敢えて俺側の脱出口に王手を、掛けた。

つまり、

誘っているのだ。

——「君にこの駒がどちらなのか読めるのか」、と。

最後の最後、ババ抜きの際のように二者択一の状況まで俺を誘導し、俺に勝利のチャンスを与えているのだ。

勿論、そこには彼女の読みがあり、決して俺は二者択一の正解を『選べない』ように心理を操られているのだろう。

本来ならここから俺の思考が始まる筈だった。

5bの駒、1eの駒、どちらが《良いオバケ》で、どちらが《悪いオバケ》かという、答えの出ない螺旋論理を繰り返し、その結果出した結論を見事日比野に看破され、彼女に敗れる。それがいつものシナリオだった。

だが、今回は違う。

この時点で、『俺の勝ちも確定した』。

「トイレだっ」

不意に、そう宣言する俺。日比野は目を丸くするが、片手でドアを指し示し「どうぞ」と言った。

本来このゲームの最中に席を外すなど、もってのほかだ。相手に回りこまれるだけで、百パーセントといっていいくらい負けが確定する。

だが今回の状況はもう、そういった次元の話ではない。「俺がどちらを選ぶか」それで全てが決まる。だから日比野も退室を許したのだろう。

俺は許しが出たので、トイレへと向かう。座布団の上とはいえ、ずっと正座は流石に、辛い。

ちなみに恵理香はゲームが始まると同時に、ベットへと移動し、そこで横になりながら、俺たちの対局を眺めていた。自分の表情で

どちらかが不利になるのを避けたのだろう。我が妹ながら、出来た奴である。

「司」

痺れる足に鞭を打ち、部屋を出ようとする俺に日比野が呼びかける。

「なんだ」

俺は答える。

「トイレに行ってもカイジみたいに変転は出来ないと思うぞ」

そう言ってふふふっと笑う日比野。

彼女は俺にも勝機が充分あるこの戦局で、俺の勝利を『逆転』だと言い切った。彼女以外の人間が言ったのなら、意味がまるで通じない科白だ。何しろ今、俺にも五十パーセントの確率で勝利があるのだから。だが、日比野に確率なんて言葉は意味が無い。彼女が勝つと言ったら、必ず勝つ。そういう、人間なのだ。

だから普段の俺ならその言葉に萎縮してしまったかもしれない。しかし、今日は違った。

『勝ち』が確定した、今日だけは。

「それはどうかな」

そう言って、俺は扉を、開けた。

—————計画通り。

そう呟き、俺はトイレで顔を邪悪な様相に歪め、微笑んだ。

成る程、自分の思った通りに事が進むと、こんな気分になるのか。俺はこみ上げる笑いを堪えながら、ポケットから一枚の紙を取り出す。

それは折り畳まれた【ぼうけんのしょ】の一ページだった。まだ何も記入はされていない。

俺は同じくポケットから取り出したボールペンで、現在の時刻と番号、サインを書き込んだ。

昨日の実験で、【ぼうけんのしょ】は破いたり、濡れたりして、印刷された――または書き込んだ文字が形を保たなくなると効果を無くしたが、折ったぐらいでは普通に使える事が確認されたのだ。

《SAVE》と浮き上がった文字に、俺はまたほくそ笑む。

これが俺の切り札であり、《ガイスター》を勝負に選んだ理由でもあった。

確かに、時間を戻せる【ぼうけんのしょ】は無敵だろう。しかし、今回の場合ただ使うだけでは駄目なのだ。愚鈍にセーブとロードを繰り返すだけでは、俺は永遠に日比野には勝てない。だから、『今のような状態』を彼女に作り出させる必要があった。

例えば今日の種目がポーカーだった場合、日比野は俺を同じように二者択一の状態に追い込むだろうか。いや、そうはならない。

麻雀だった場合も同様だろう。

なぜなら、運の要素が存在するから。

極端な話、俺と逆転ギリギリの勝負を彼女が意図的に演出した時、俺が最終局で天和でも上がればその時点で細かいゲームメイクは全とおじちゃんになる。本当に、極端な話だが。

だが、彼女の最も得意とする心理戦の舞台で、そして一切の乱数の要素が存在し得ない状況なら、彼女はきっと、俺に一度チャンスを与える。何故なら、無敵だから。自信が有るから、自分の読みに。

自信があるが故に、余裕が生まれる。そして余裕が生まれたら、試してみたくなる。自分の、読みを。

ババ抜きの時がそうであったように、俺に勝利のチャンスを与え、ギリギリまで自分を追い込む事で彼女はスリルを感じているのだろうか。

詳しい事は判らないが、兎に角。

俺は彼女が俺に勝つチャンスを与える事に賭け、敢えて彼女のホームグラウンドである駆け引き勝負を持ちかけたのだ。

で、俺は賭けに勝った。

彼女が俺を寄せ付ける事無く、その実力全てを発揮していたなら、負けていた。

なまじ自分の得意とするジャンルだからこそ生まれた、隙。そこを突いたのだ。

「とは言っても半ば反則だもんなー。こんな手。幾らなんでもチート過ぎるだろ」

そう独り言しながらも、俺は《セーブ》が確定したその紙を、元通りに折って、ズボンのポケットにしまった。

そして再び、日比野の待つ戦場へと戻ったのだった。

部屋に戻ると、日比野は俺の椅子に腰掛けて、窓から外を眺めていた。

「おや、早かったな」

こちらに顔を向けると、そんな事を言い放つ。

「そうかな、———というか日比野。その座り方は女の子としてどうかと思うぞ」

そう、日比野は机の上に足を乗せ、椅子を傾けるような状態にし、身体を預けているのだ。髪が金髪だから、ヤンキーみたいだぞ。

と、俺の注意を受けた日比野は足を机から下ろしたが、何か珍しい物でも見たかのようにこちらを凝視している。

「何だ。女の子に幻想を抱くなど言いたいのか。だがな、その言葉は思春期の男の子にとっては、結構残酷だぞ」

「いや、その、なんだ。君が私を女の子扱いしているというのが、

少々意外だな」

「意外も何も、日比野は女だろう」

「だけど、ほら、良く言うじゃないか、幼馴染は、恋愛対象として見れない、とか」

ああ、そういう事か。彼女の言わんとする事を、理解する。

待てよ、という事は日比野は俺を恋愛対象として見てないと、遠回しに宣言してないか。

そして俺は日比野の事を、恋愛対象として見ていると、発言を押し進めて考えれば、そういう事に、なって、いるんじゃない、か。

不味い。この議論を展開しても、二重の意味で、俺には得にならない。

「そうか、日比野は、俺の事を、男として見てくれないのか」

だから、俺は大袈裟に、芝居染みた動作で肩を落とす。

「ま、待てっ。別にそんな事は言っていないだろうっ」

それを見るなり、慌て出す日比野。

あれ。意外な反応だ。てっきり俺の身振りに乗って、「そうだな、残念だがG a c k tぐらいに人間離れた美しさでなければ、私にはつりあわないな」とか言ってくると思ったのに。

「いや、馬鹿。早とちりするなよっ。べ、別にお前の事が好きだとか。そんな事を言ってる訳じゃないからなっ。け、けど、き、嫌いでも無いから、落ち込むなっ」

何だろう。真っ赤になって混乱する日比野。科白の前半だけ見てみれば、典型的なツンデレなんだけど、後半でフォローを入れちゃってるから、総評的には「好きでも嫌いでも無い、別に普通の奴」って事になる。

それは、何と言うのか、逆に、傷つく。

「とっ、兎に角っ、今は決着をつける時だろうっ。君はたっぷり考える時間があったんだから、さっさと決めろっ」

そう言って盤の方を指差す日比野。

ふむ。まあどちらにしても、外れを選んだ場合は、もう一度トイレに行くなどして《ロード》をし、次に逆の選択肢を選べばいいだけなのだから、あまり深く考える必要は無いのだが。（あるいは時間が戻るのだから、別に目の前で燃やしてもいいのだが、流石に、それは、ねえ）

そう結論を出し、俺は1eの方の駒を手に取り、

「折角だから俺はこの駒を選ぶぜっ」

そう宣言した。

日比野はまだ顔が赤かったが、その結果を見ると少し安心したようだった。

「な、逆転は出来なかっただろう」

その言葉につられ、俺は自分の手の中の駒を、裏返す。

そこには赤い印が、ついて、いた。

そして俺は再び、トイレに居た。

日比野は俺がトイレに行くと告げると、流石に不審そうな顔をしたが、「庭で待ってるから」とだけ言い、外に出て行った。

最後の二択は、俺は深く考えずに選択したのだから、まさに運否天賦と言っている筈だが、流石というか、日比野には勝てなかった。

まあ、データを《ロード》して、次は5bの方の駒を取れば良い訳なのだから、俺の勝ちは動かないが。

ポケットから【ぼうけんのしょ】を取り出す。先程トイレに来たときの時刻と、《SAVE》の文字が書かれていた。

これも昨日の実験で確認した事だが、この《SAVE》の文字は、《セーブ》が確定した時に浮かび上がるが、何らかの理由でそのデータが使い物にならなくなると、自動で消えてしまうのだ。

つまり《SAVE》と書いてある紙を燃やせば《ロード》出来る
という、目印の役目を果たしている。

俺はその紙を目の前に掲げ、

逆の手で、

ライターに、

火を、

点けた。

十二章『METAMORPHOSE』

乱立する広葉樹。

そこから溢れ出す木漏れ日。

爽やかな春風。

敷かれたビニールシートと、新聞紙。

その中央でパイプ椅子に座っている、俺。

その後ろに立ち、鼻歌を歌いながら、霧吹きで俺の髪を湿らしている、日比野。

俺は今、絶賛賭けの代償を取り立てられ中だった。（日本語が崩壊してるが、気にしない）

といっても誤解はしないで欲しい。別に世界線変動率が変わった数値が少なくて、俺の負けと言う結果に『収束』したため、《ロード》をしても結果が変わらなかったとか、そういったSF的な理由ではない。

ただ単に、俺は、《ロード》が出来なかったのだ。

ライターの火を【ぼうけんのしょ】に近づけ、《ロード》を実行しようとしたが、何故か出来なかった。

いや、理由は解かっている。

俺は、怖かったのだ。

過去を、変える事が。

昨日の実験で、何回も《ロード》したときは訪れなかった感情。

それは、恐怖だった。

俺個人の意思で、世界を、過去を、変えてしまっていたいのだろうか。

それは、禁忌では、ないのか。

それに、

ここで《ロード》をしたら、多分、俺は癖になる。
こまめにセーブを繰り返し、上手くいかなかったら、データを《ロード》してやりなおす。

そういう生活が、癖になる。

きつと止められない。

当たり前だ。

失敗しないのだから。

失敗しない、人生が送れるのだから。

けど、

そんなの、

そんなの、まるで、ゲームじゃないか。

人生を、ゲームのように、扱ってしまう。

そんな魔力が、【ぼうけんのしょ】には、ある。

そこまで考えたとき、俺は反射的に、データを《セーブ》した紙を、トイレに流した。

で、今に至る。日比野は着々と俺を坊主にする準備を進めている。恵理香は庭の片隅で、こちらをぼうっと眺めていた。

嗚呼、悲しいかな、悲しいかな。俺は明日から眼鏡坊主だ。どんな渾名がつけられるだろうか。

でも、これでいいのだ。所詮、俺にとって【ぼうけんのしょ】は過ぎた道具だった。

身に余る道具を扱う人間は、いずれ道具に扱われる様になり、破壊する。

器じゃなかったのだ。俺は、時間を操るだけの。

それに、いくらイカサマではない、といっても、そんな方法で勝つ事は、日比野を裏切る事になるような、そんな気が、した。

返そう。

来週、ノナさんがまた来る、みたいな事を言っていた気がする。

その時に、【ぼうけんのしょ】を、返却しよう。

それで、いいんだ。

俺には、使いこなせないから。

と、日比野が何かベルトのような物を取り出した。それは、床屋や美容師がよく使う。ホルダーに様々な鋏やら櫛やらが入っている物だった。

「あれ、日比野。バリカンじゃないのか」

髪が服に付かない様にだろう。ビニールのマントを被せられた俺は問いかけてみる。

「へえ、覚えていたか」

「怒ってるんじゃないか」

てつきり俺のセクハラ発言に腹を立てたまま、バリカンで剃って来ると思ってたのに。

「あの程度の事で私が本気で怒るような、器の小さい女だと思われていた、その事に対してなら、今、猛烈に怒っているよ」

頬を膨らませて此方を睨む日比野。その動作は、反則だろう。

思わず目を逸らす俺に、日比野は言葉を続ける。

「まあ、兎に角、負けたら『散髪する』約束だっただろう。取り立てさせてもらうよ。本当は美容院に行ければそれが一番なのだろうが、そんな金は、無いみたいだからな」

全くの通りだった。が、どうなのだろう。プロ以外の人間に、髪を切ってもらった事など、小さい頃、母親に数回程だ。そして、その数回は間違いなく俺のトラウマ認定されるぐらいの出来だった事は記憶している。

日比野に髪を切られる事に、一抹の不安が脳裏を過ぎる。が、それは杞憂に終わった。

数十分後、日比野に髪を切られ、シャンプーをし、ドライヤーで乾かされた俺は、彼女が用意した鏡を見て、驚愕する。

「ひっ日比野さんっ、髪形が、ヤバイですっ。なんかイケメンみたいなフォルムになってますっ」

そう、彼女の仕事は完璧だったのだ。

長いか短いかで言えば、間違いなく長いのだが、ドラマでジャニーズ系の俳優がするような、格好良い髪形になっている。

ミディウムウルフと言えば良いのか、ミディウムレイヤーと言えば良いのか、髪形に詳しくない俺はピッタリと説明が出来ないが、兎に角。

「ちよっと待て。まだ最後の仕上げが残っている」

そういつてワックスを掌で伸ばし、俺の髪をセットしていく日比野さん。

「おおおっ、どんどん格好よくなるっ、そんな気がするっ」
テンションが上がって叫び出す俺。

「良し。コレで完成だ」

そういつて俺から離れる日比野。

鏡で何度も確認するが、やはり、凄い。

「ありがとう、日比野」
礼を言う俺。

「そんなに気に入ってくれたのか」

「ああ。どこでそんなスキルを身につけたんだ」

てっきり特技はギャングブルだけだと思っていたのに。

尋ねると、日比野は少し恥ずかしそうにして、答えた。

「その、将来は美容師になりたいくて、な。初音さんのところで、中学の頃から、少しずつ、習ってた」

初音さん、というのはこの近く美容室のお姉さんだ。俺も時々、行く。

「成る程、ね」

俺は相槌を打つ。彼女がこんな技術を持っている理由に納得したのだが、そんな風に将来のビジョンを明確に描いている彼女を、少し、羨ましく思ったのだった。

「これなら毎回日比野に切ってもらってもいいな」

「次からは金を取るぞ。と、言いたいところだが、プロじゃない私が人の髪を切れる機会なんてほとんど無いからな。実験台として、切ってやってもいいだろう」

えへん、と日比野は胸を張る。

と、庭の隅にいた恵理香が近づいてきた。

「恵理香、どうよ、この髪形」

そう訊くと彼女は首を何度も縦に振り、肯定の意志を示す。

「そうだ」

日比野が声を上げる。

「どうせだから三人で、出かけないか」

その提案は素晴らしいものだった。二つ返事で了承する。

「じゃあ少し待ってくれ。片付けるから」

そう言っただけは、切られた俺の髪や、新聞紙を処理する。

——全く。《ロード》なんてする必要、なかったじゃないか。

内心でそう呟く、俺。

《ガイスター》での敗北は、差し詰め『幸せの礎の不幸』とでもいったところだったのだ。

ふと、空を見上げる。

四月の空は、今日も晴れていて。

今の俺の心の中を、そのまま映した様だった。

髪を切ったことで、ポジティブな思考になったのだろうか。

多分、明日も、明後日も、
素晴らしい日になる。
そんな気が、した。

幕間『人形式モナリザ』

日曜日にも関わらず、出勤しなければならぬ不運を嘆く。

自分のデスクに座ると、同僚の柏崎だか柏木だかが俺に話しかけてくる。

不快だ。不愉快だ。

しかし、俺はそんな内心を欠片も見せずに、何事かを返す。

その俺の科白に柏崎が笑ったのだから、何か気の利いた事を言ったのだろう。

無駄だ。こんな事に何の意味も無い。

だけど、俺はこんな無意味な生活を続けている。

演技をし、周囲に溶け込む作業を淡々とこなす。

人形だ。人形に見える。

周囲の人間が、人形に見える。

昨日の夜、通りすがりの女を銃で撃ってから、一段と周囲が人形に見える。

顔面が吹っ飛んだ死体を思い出す。

そうだ。あちらの方が自然だ。

人形として、自然なのだ。

つまり、こちらが不自然なのだ。

なんでお前らは動いている。

どいつもこいつも動いていやがる。

そういえば、小さい頃は、良く人形で遊んでいた。

男の俺が人形遊びに興じるのは良く馬鹿にされたものだが、俺は別に人形で遊びたかったわけではなかった。

人形を壊したかったのだ。

プラスチックで出来た人形の手を、足を、首を切断するたびに、俺はなんとも言えない快感を感じるのだった。

人形遊びは俺が中学校を卒業するまで続いた。

中二の頃、家にあったフランス人形をバラバラにしたのを、覚えてる。

最後の最後、親父の吸っていた煙草を使い、顔に火を押し当てたとき、俺は射精した。

壊したい。

高校に入り、演技する事を覚えてから、俺は人形を壊す欲求を忘れていた。

それが昨日、女を殺したことにより、再び開花した。

俺が壊す人形は、全部人間を模したものだった。
人間を模するからこそ、人形。

だとしたら動かない人間は、最高の人形だといえるのではないか。

壊したい。

昨日のような中途半端な破壊ではなく、もっと、心行くまで壊したい。

徹底的に、

完全に、

惨めに、

無残に、

惨たらしく、壊したい。

隣のデスクの柏崎に目をやる。

自分のパソコンに何かしらを打ち込んでいた。

何時間かけたのか判らない厚化粧に、鼻に付く香水の臭い。

例えばここで銃を取り出して、彼女の頭を打ち抜き、壊しつくしたとして、俺は満足だろうか。

いや、違う。

そうはならない。

壊すなら、人形は、美しくなければ、駄目だ。

意味が無いとはいえ、自分の生活を捨てる覚悟で行うその行為。どうせなら、可能な限り美しい人形を壊したい。

ふと、目を窓の外へと向ける。

女子高生が歩いているのが目に入る。

あれくらいが、いいのかもしれない。

人間としては少しも魅力は感じないが、人形は外面さえ綺麗なら、それでいい。

思考が昨日の殺人へ、戻る。

証拠らしい証拠は残していない筈だが、だからといって捕まらないと高をくくるのは、樂觀的過ぎるだろう。

警察が、俺を犯人だと特定するまでに、どれくらいかかるだろうか。

それまでに、なるべく沢山人形を壊したい。

だとすれば、あまりゆっくりとはしてられないな。

十三章『隣の町で死んだひと』

朝、水で洗顔を流した顔を上げると、鏡に俺が映る。日比野に教えて貰った通りにワックスで髪を整えると、昨日までの俺とは別人のようだった。

ワイシャツにネクタイを通し、セーターを上に着る。

居間に向かうと、もう、既に、朝食の準備が出来ていた。

「おはようございます、峰子さん」

「おはよう、司くん」

「おはよう、恵理香」

「」

峰子さんと恵理香に挨拶をする。今日の朝ごはんは、ご飯に味噌汁。鮭の塩焼きと海苔と玉子焼きだった。

三人で食卓に付く。

「いただきます」

「いただきます」

「」

峰子さんの料理の腕はかなりの物だ。俺は鮭を解すと、ご飯と共に口へ運ぶ。うん、美味しい。

「それにしても、本当に上手なのね、響ちゃんは」

峰子さんが俺の頭を見て、そんな事を言う。新しい髪形は峰子さんにも好評だった。

「そうですね。俺も、そう思いますよ」

「今度、私もお願いしようかしら」

そんな他愛も無い会話をしていると、テレビに映るニュースにふと目が行く。

「あれ、ここ、隣町の話じゃないですか」

そこは俺にも見覚えがある、街の光景が映し出されていた。確か学校の近くだった筈だ。

「あら、本当」

俺の言葉に峰子さんと恵理香も視線をテレビへと移して確認する。ニュースの内容は、若い女性が殺されたといった物だった。銃で何発も撃たれていたらしく、警察は暴力団の抗争が関与しているとみているらしい。

「物騒ね」

そう、峰子さんが呟く。確かに、その通りだった。俺が通う学校の傍で殺人事件。しかも銃で撃たれていたなんて、ぞっとしない話だ。

嫌な予感が、した。

学校に登校してみると、案の定というか、殺人事件の話題で持ち切りだった。教室のそこかしこで今朝の事件に関する会話が繰り広げられていた。

「おい、司、今日のニュース見たか」

氷室が話しかけて来た。珍しく真剣な表情をしている。

「ああ」

「なんなんだろうな。事件に関係してるのかは判らないけど、緊急の職員会議とかがあるらしいし。ホームルームの時間が少し遅れるってよ」

「そうなのか」

今後の対策でも話さなければならぬのだろうか。登校する時は

俺の通学路とは外れていたから知らなかったが、現場周辺では警察やマスコミがごった返していたそうさ。

「そう言えば、司。お前髪切ったんだな」

「おうよ」

「似合ってると思うよ」

「どーも」

「どこで切ってもらったんだ」

「内緒だ」

まあ、身近で起きた殺人事件は多少センセーショナルとはいえ、所詮は他人事だ。話題はそれから昨日観たテレビとか、そんな事に移っていった。

今日は部活動が行われず、教職員が放課後に周辺を見回るらしい。朝、谷嶋原先生がホームルームでそう報告した。

授業は通常通り六限目まで行われるとの事だったので、クラスメイトの何人かが失望の声を上げた。

まあ、そんな感じで。

幕開けはほんの少しだけ劇的だったけど、俺たちの日常はいつもと変わりなくて。

だけど何かが、狂い始めていた。

「めっしだっ。めっしだっ。ひーるめーしだーっ」

昼休みになるなり氷室が謎の唄を歌いながらこちらにやって来た。

普段俺以外の前ではクールキャラを貫いている癖に、昼休みになるとテンションが上がって馬脚を露すのだ。しかし何故か氷室の人気は落ちない。彼曰く、「時々地を出すのは、所謂一つの萌え要素として処理されてるから大丈夫」との事。畜生、イケメンは何をやっても許されるのか。

昼休みは席を自由に変える事が出来るので、俺達はいつも俺、氷室、日比野、猫恋、飛驒の五人でグループを作って食べている。

今日は俺の席の周りに集まる事にしたらしい。氷室が俺の席の前に陣取る。

「いやー。この時間の為だけに学校に来てるといっても過言ではありますまい」

そんな事をほざいている氷室。その隣に座る日比野。その前に座る猫恋に、その横、氷室の前に当たる席に座る飛田。

新しいクラスが出来て一週間も経てば、大きさは大小様々だが、大抵の生徒が似たようなグループで食事を摂っている。

ただ独りを除いて。

小鳥遊、来夢。

俺はちらりと横目で彼女を確認する。俺たち五人やその他大勢は、思い思いに机を寄せ合っていたが、このクラスでただ一人、彼女だけはそこに交わっていなかった。

教室の端で、いつも通り文庫本を読みながら、パンを頬張っている。

どう、すべきなんだろうか。

勿論彼女を、誘うべきなのだろう。

しかし、そんな義務感で声を掛ける俺の心を満たしているのは、安っぽい同情だ。

言い方を変えれば、上から目線で押し付けられる、御節介な誘い。そんな物で彼女が加わるとは思えないし、そんな事を言うような人間には、なりたくない。

それに彼女は一年の最初からこの食事スタイルらしい。

今更俺が誘ったくらいでそれを曲げるとも、思えない。

必要以上に他人と関わらないのが、彼女の信念なのかもしれない。でも、

「小鳥遊さん」

俺は声を掛けていた。俺の人生哲学は『やらずに後悔するより、やって後悔』なのだ。

小鳥遊さんが顔を俺のほうに向ける。

「一緒に、ご飯、食べませんか」

思わず敬語になってしまった。

彼女が、目を見開いた。

そのまま静止する。

俺も思わず、固まる。

氷室や日比野、猫恋に飛田が驚いた様子でこちらを見つめる。

暫くそのままだったが、やがて小鳥遊さんが口を開いた。

「本気、ですか」

「本気です」

即答する俺。

彼女は俺を睨むように見つめる。俺も負けじと見つめ返す。ここで目を逸らしたら、多分、食事に加わってくれなさそうな気がしたから。

もう一度、そのまま場が膠着しそうになったが、彼女が根負けしたのだろう。

机を、寄せてくれた。

食事風景は和気藹々としていた。

日比野や猫恋、飛田はまるで以前の親友のように、話題を小鳥遊さんに振っていたし、氷室も俺に小声で「グッジョブ」というと、積極的にその会話に参加していたからだ。

ただ、なんだろう。周囲から妙に見られている気がする。が、それも無理のない話かもしれない。

学年でもトップクラスの美少女四人と、それにひけを取らないイケメン一人だ。まるでギャルゲーの光景ではないか。

あれ、でも待てよ。そうすると俺のポジションは、主人公（氷室）の親友になってしまう。

脇役だ。完全に脇役だ。

と、いう事は。俺は氷室に訊かれたら、彼女たちの好感度とかを報告しないといけないのかよ。

「絶対に、教えないからな」

「どうしたんだ、司」

俺の独り言を聞き取ったのか、話しかけてくる氷室。因みに小鳥遊さんが居るからか、今の彼は『爽やかモード』だ。

「別に何でもない。ただの独り言だ」

と、いうか単なる僻みだ。

俺は内心憤慨しながらも、ご飯をかつ込んだ。うん、美味い。

その後は連絡にあった通り、六限目まで授業を行った後、下校す

る事となった。

部活は中止との事だったので、いつもよりも混雑している通学路を、日比野と共に歩く。

「凄い人の多さだな」

隣を歩く日比野が、感嘆の声を漏らした。

「結構な人数の生徒がいるって事だ。『数クラス毎に帰宅時間帯をずらす』とかにすれば良かったのにな」

学校の前の歩道は生徒たちで溢れていた。ちらほらと生徒以外の人も居るが、まあ、とてもじゃないが前には進めないだろう。これは、明日あたり学校側に苦情が来るのではないだろうか。

「っ、つかさっ」

日比野の叫び声が耳に入る。振り返ると、人の波に吞み込まれている彼女が見えた。とはいっても、小柄な彼女の特徴的な金髪が上下に動き、そこに日比野が居るのだという事を、俺に示しているだけだったが。

人の波を掻き分け、彼女の元へ向かう。途中、迷惑そうな視線が俺を射抜いたり、舌打ちとか聞こえたけど、無視。

「大丈夫か」

腕を引っ張り上げて日比野を救出する。

「大丈夫だ。問題ない」

強がる日比野。

うん。またはぐれたりすると、面倒だから、仕方ないな。

俺は彼女の手を掴むと、そのまま歩き出す。嫌だなあ。下心なんて少ししかありませんよ。

「ちょっ、司っ」

「なんだ。一刻も早く人ごみを抜けないと」

「それはそうだがっ、手っ」

「あれ、痛かったか、済まない」

流石に強引過ぎたかと、そう謝罪して俺は手を離す。

「————っ」

「ん。どうした日比野」

彼女は少し立ち止まる。すると何を思ったか今度は彼女のほうから俺の手を取り、前を歩き出した。

「おい、日比野っ」

「なんだ。一刻も早く人ごみを抜きたいのだろう」

俺の抗議も無視して、日比野は前を進む。

彼女に手を引かれる、俺。

今の状態を的確に表現する言葉は、何だろう。役得————とも少し違う気がする。

語彙の貧弱な俺には上手く当てはまる言葉は見つからなかったが、今の俺の気持ちを表す表現なら、簡単に発見出来るだろう。

十四章『スノースマイル』

全ての原因が自分にあるという事が解かっている、それにより生じる不利益に『理不尽さ』を感じてしまう。それが人間という生き物の自己中心的な感情であるのだろうし、そう思うという事は俺もまだまだ子供だという事だ。

と、益体も無い事を考えて、無理矢理自分を納得させる。

場所は近所でも大型のショッピングモール。帰宅した俺は、今日の料理当番が自分である事を思い出し、夕飯の買出しにここに来ていた。午後五時から始まるタイムセールに参加し、卵パックを格安の値段で手に入れたまでは良かったのだが、『お一人様二パック限り』と書かれた紙が目に入らなかった俺は、三パックとってしまったのだ。いや、あの戦場のような状況で、割らずに三パック確保した事を褒めて貰いたい所なのだが。

兎に角、そのまま混雑したレジに並び、ようやく俺の番が回ってきたときに、レジ打ちのオバさんに指摘されるまでその事に気付かなかったのだ。

オバさんは「卵、今日は二パックまでですよ」と一言だけ言うと、俺をスルーして、次の客の会計を始めた。どうやら返して来い、との事だろうが、またあのレジ待ちの行列に並ばなくてはならないと思うと、俺は溜息を吐かざるを得ないのだった。

と、卵のタイムセールが行われていた跡地（勿論今は売り切れ）の前に、意外な人物が、いた。

「小鳥遊さん」

そう、小鳥遊来夢がその売り場の前に佇んでいたのだ。

キチンと着こなされた制服。長く、艶やかな黒髪。美しい顔は、憂いを湛えている。その表情はこの世に存在するありとあらゆる不幸を嘆き、悲しんでいると言われても納得がいくような暗さではあ

ったが、視線がタイムセール後の売り場に向けられていた事を考えると、ただ単に卵パックが取れなかったのだろう。

思わず呼びかけてしまった俺の声に反応して、彼女が振り向く。が、俺も特に何か用事があった訳ではないので、会話は始まらない。

沈黙が、俺たちの間に舞い降りる。

「えっと――」

それに耐えかねて、俺は思わず、

「卵、要りますか」

そう、言っていた。

大型ショッピングモール《アナト》。生鮮食料品売り場を後にし

た俺は、内部にあるスタバでキャラメルマキアートすすを啜る。席の向

かいでは小鳥遊さんがコーヒーを飲んでいた。彼女に「話がありま
すので、このあとお茶をしませんか」と誘われてこの状況に至る訳
だが、彼女はこの店に入ってから、一切口を開こうとしなかった。

無口、という部類に入るのだろうか。なんというか、彼女と関わ
ると、毎回、大抵沈黙が場を支配している気がする。

こういう場合は、男から積極的に話しかけて、場のムードを明る
くしなければならないと、氷室が言っていた。

まあ、その時の話の内容は『氷室のパーフェクトでーと教室』だ
ったのだから、若干今の状況とは異なる気がするが。（ちなみに『
氷室のパーフェクトでーと教室』では他にも「男は常に車道側を歩
くべし」とか「公園で休む時、ベンチの上に敷くために、ハンカチ

は常に持ち歩くべし」とか「女性に掛けて上げるために、常時カーデガンを羽織るべし」だとかなんか色々な事を勝手に氷室はご教授してくる。まあ、役に立った事は一度も無い。と、いうか使う機会が一度も無かったのだが。え、泣いてないですよ。雨ですよ、雨)

「小鳥遊さん」

「はい、何でしょう」

「十回クイズって知ってますか」

「十回クイズ、ですか」

「はい、有名な所だと『ピザって十回言って』と相手に『ピザ』という単語を十回繰り返し返させ、その後『ここは』と自分の膝を指差し、相手に思わず『ピザ』と言わせる、引っかけクイズの類です」

「ああ、その事ですね。もちろん、知っていますよ」

なんと言うか話題の振り方とか、内容とかが、物凄く野暮ったい感じがするが、気にしない。

「では、『舌』と十回言って下さい」

「わかりました。舌、舌、舌、舌、舌。した、した、した、した、した」

「サンタが乗っているのは、なんでしょう」

「引っかけません。トナカイです」

「ソリですよ」

「—————っ」

顔を赤くして小鳥遊さんが黙り込む。表情は読みづらいが、多分悔しがつてるのだろう。

それにしても、まさか乗ってくれるとは、思わなかった。案外、ノリが良いのかもしれない。

と、彼女が咳払いを一つ、した。どうやら話を始めてくれるらしい。

「ところで、何故、あんな事をしたのですか」

それが俺に訊きたかった事、なのだろうか。

「それはですね。『お一人様二パック限り』だったのに俺は三パック取っちゃって」

「違います。卵の事は、感謝しています。そうではなく、昼休みの事です」

昼休み。

彼女を、食事に誘った事だろうか。今の口ぶりだと、その事は感謝していない、とも受け止められる。

「迷惑、でしたか」

「いいえ。正直に言うのと、————少し、嬉しかったです。ですが、貴方にとって、私を食事に誘う事に、どのようなメリットがあったのですか」

小鳥遊さんは少しも嬉しくなさそうな無表情で返答し、再び俺に問いかける。

メリット、ねえ。

「小鳥遊さんが、加わる事でしょうか」

「手段と目的が混合してますよ。そのような科白では、誤魔化されません」

偽りの一切無い俺の言葉を、切り捨てる彼女。

まさか、本当に、彼女は、俺が誘った理由が、他に、あると、思っているのだろうか。

何気ない昼食の誘いにも、損得勘定が、存在しなければならないと、本気で、思っているのだろうか。

だとしたら、

それは、

とても、

悲しい。

「あのですね。小鳥遊さん」

「はい」

「俺はね、特に明確な理由があって、声を掛けた訳じゃないんですよ」

こちらを見つめる、彼女。やっぱり表情にはほとんど変化が無くて。

「本当に、君と、昼ごはんが食べられたらいいなあ、って。そう、思っただんです」

だけど変化が全く無い訳じゃない。

「信じてもらえるかどうかは判ら無いけど、本当です」

我ながら陳腐な言葉だ。氷室だったらもうちょっと格好良く、言葉紡げたりするのだろう。

「そうですか」

相変わらず、無表情のまま、答える彼女。日比野なら、その些細な変化から、彼女の感情を読めたりするのだろう。

「時田君」

「はい」

「さっきの『少し嬉しかった』って言葉。あれは嘘じゃありませんから。念の為、言っておきますけど」

それからは、友人のように他愛も無い事を話し合った。相変わらず彼女は無表情で、楽しいのかそうで無いのかはさっぱり判らなかつたけど。

「もう、こんな時間か」

俺は時計を確認して、言う。もう七時になろうかという時間帯だった。なんだかんだで一時間以上も話していた計算になる。

「すみません。付き合ってもらってしまつて」

「いえ、大丈夫ですよ」

お互いに荷物を持ち、帰り支度をする。

と、春になって陽が伸びたとは言え、もう外は暗くなっていた。

「送っていきましようか」

そう、提案する。

「結構です。ちよつと歩きますし。卵、早く冷蔵庫に入れないと、痛みますよ」

それもそうか。しかし、少し歩くのならば、尚更送るべきだと思うのだが。

「そうだ、時田君」

「はい」

「『小野小町』って十回言ってください」

「小野小町、小野小町、小野小町、小野小町、小野小町。おののこまち、おののこまち、オノノコマチ、小野小町、オノノコマチっ」

「日本で最初の遣唐使は誰でしょう」

「小野妹子」

「それは遣隋使ですね。正解は犬上御田鎌です」

「問題単体のレベルが高過ぎるっ」

思わずツツコミを入れる俺。『小野小町』と十回言わなくても、

答えられなかったぞ。

彼女は俺に仕返し出来たのが嬉しかったのか、少しだけ、笑った。
「じゃあまた明日、学校で」

そういつて去って行く、小鳥遊さん。

俺は凍りついたように、ただ彼女の背中を見送る事しか出来なかった。

何故なら、初めて見せてくれた彼女の微笑が、

とても、

とても、

綺麗だった、から。

幕間『いともたやすく行われるえげつない行為』

自分がとても天才的だと感じる事がある。

それが今だ。

暗い、夜の闇。

ビルとビルの間。

俺は自分の性器を少女の陰部に挿入し、前後に動かす。
ピストン運動を繰り返すが、少女は一切の反応を返さない。

ブラウスの前のボタンを外し、ブラジャーも剥ぎ取る。

露わになった豊かな乳房に顔を埋める。

しかし、それでも、なんの反応も無い。

何故なら、少女は既に『人形』だからだ。

人形は、動かないし、喘がない。

当然の論理だ。

崩れた右半分の顔面に、はみ出す脳漿。

それらが少女が既に『人形』である事を、如実に語っていた。

俺は腰を突き動かしながら、右側の乳房をしゃぶる。

舌先で、乳首を転がす

空いた左手でナイフを掴むと、少女の左の胸に突き刺す。

そのまま円運動をする事で、胸を抉り取った。

まだ少し残っている体温が、彼女が少し前まで『人間』であった証だ。

抉り取った乳房を投げ捨てると、俺はピストンの速度を上げた。

最高だ。

人生で最高の瞬間だと断言できる。

数万払えばソープ嬢や、売りをやっている若い女とは幾らでもやれる。

だが、そんなものとは比べ物にならない快感、興奮がもたらされる。

屍姦。

彼女を人形にした後、ふと、思いついたのだが、これは、良い。我ながら、天才的な発想だ。

腰を激しく打ち据えていると、徐々に射精感が高まる。

点滅する視界。

深く、奥へと突き入れる。

中へと、出した。

妊娠の心配は、無い。

そんな冗句が頭に浮かんだ。

最高だった。

人生で最高の瞬間だと断言できた。

一通り『人形』の解体作業を終えると、俺は傍らに置いてあったビデオカメラのスイッチを切った。

帰ったらハードディスクに焼こう。

煙草を啜えて、火を点ける。

爽やかだった。

生まれ変わったように晴れ晴れとした気分だった。

煙を肺にたっぷり溜め込み、吐き出す。

美味い。

最高に美味かった。

ふと、『人形』の持ち物だった物に目が行く。

着ていた制服のスカートから、生徒手帳が落ちていた。

今時正直にこんな物を持ち歩いている学生が居る——『居た』事に軽い驚きを覚えた。

そうする事になんの意味も無いが、俺は生徒手帳を開いた。

何となく、今はもう誰が見ても判らないほど壊れた『アレ』の顔を、もう一度確認してみようと思ったのだ。

一ページ目。

彼女の顔写真と、名前が記入されて、いた。

《小鳥遊来夢》

それが、『アレ』の名前だった。

十五章『それでも町は廻っている』

「小鳥遊さんが、亡くなった」

教壇の上に立った谷嶋原先生が、そんな言葉を言った。
俺は、何を言っているのか、良く、解からなかった。

「いずれ、皆の耳に入る事だから、言っておくが」

そういえば今日、朝は三時間遅れだった。
大雪も、台風も無いのに、妙だな、とは思ったけど。

「彼女は、殺された、らしい。昨日、買い物帰りに」

買い物帰り。

買い物。

つまり、それは、俺と会った《アナト》の帰りって事で。

「詳しい事は警察が調査中だが、今日は全校集会の後、直ぐに放課となる」

———じゃあまた明日、学校で。

やだなあ。冗談きついよ。

俺は学校に来たけど、なんで今日休んでるんだよ。それじゃ会えないじゃないか。

広がる動揺。ざわめく教室。

なんか泣いてる女の子も居るぞ。

みんな何言っているのか解からないみたいだし。

——結構です。ちょっと歩きますし。卵、早く冷蔵庫に入れないと、痛みますよ。

何言ってるんだよ。卵と君と、どっちが大事だと思ってるのさ。それとも、君は自分より卵の方が重要だったのかい。

隣の席を見るけど、そこに居るべき人間は、居なかった。

——さっきの『少し嬉しかった』って言葉。あれは嘘じゃないから。念の為、言っておきますけど。

俺は自分の頬に手を当てる。だけど、誰も泣いていなかった。

メイド・イン・ヘブン。時は加速するっ。

なんか校長っぽい人（まあ、自分の学校の校長なんていつの間にか変わっても気付かないから、もしかしたら教頭かもしれないけど、普通こういうときって校長が話するからやっぱり校長なんだろうね）が何か良く解からない事を話していたけど、本当に意味があるのかは良く解からない話だったから、俺は聴いてなかった。

RPGで最初に聞かなければならない王様の話みたいだな。だから○ボタン連打して、飛ばしたい感じがな。そうするとキングクリムゾンになっちゃうけど。どちらにしてもボス級のスタンド能力だ。

でも飛ばしてたらいつの間にか魔王を倒す選択肢が出ててさ、勢いあまってボタン押しちゃうから、勝手に『はい』を選択する羽目になっちゃうんだよな。いや、別に『いいえ』を選んでもどっちにしろ、魔王を倒さざるを得なくなるから、選択肢なんて意味無いんだけど。

人生も案外そんなものかもしれないね。

学校の外を歩いてます。

今日は皆行儀良く、一列で歩いています。道路には先生方が立っていて、先導したり、なんかしてる。

テレビカメラとかリポーターみたいな人が何か喋ってるよ。これ、テレビに映ってんじゃね、俺。凄いな。何気に初体験ですよ。そういった物とは無縁の場所で過ごしてますからね、日々を。

普段利用してる駅が見えたよ。ここで駅を利用する生徒は、別行動になるらしい。

って駅の中までは先生ついてきてくれないのかよ。手抜きだな。職務怠慢だ。

切符を買おうかと思ったけど、定期があったから大丈夫だぜ。持ってた良かった定期入れ。

しばらく待っていると、アナウンスが聞こえてきたから、聞こえた。「黄色い線の内側までお下がりくださいーい」

って言うけどさ、数学的に言えば、二次元なら内側は、面積の少ない領域になるんだって。

だから俺はキチンとテストで満点な回答にそって内側に入る。おいおい皆さん。これは引っかけ問題ですよ。リスクを恐れてちゃ、正解には辿りつけない。マルコポーロだかコロンブスだかが言ってたような気がしたけど、多分言っていないな。だからコレは俺の名言だ。「リスクを恐れてちゃ、正解には辿りつけない」。格好いいな、俺。

「おいっ、司っ、危ないぞっ」

でも誰かが俺の手を、引っ張って引っ張るから、俺は外側に引きずり出された。ナンテコッタイ。

電車が来て、それに乗って。

揺られながら家路に着く。今日の晩飯当番は、誰だっけか。

俺だった気がするから、帰りに《アナト》によって、買出ししなくちゃいけないな。

相対速度は10?/hで俺と車が衝突する。目測だから自信は無いけど。

絶対的に見れば、俺が止まっている車に、衝突したのかもしれない。

走らねばならない理由が無いから、走っている訳ではないのだよ。
「大丈夫か。おい、どこに行くんだ」

違うんだ。卵がタイムセールだから、冷蔵庫に早くしまわないと、腐るんだ。

「つかさっ」

いや、腐るからタイムセールなのかもしれない。

兎に角、《アナト》に辿りついたよ。

エブリデイ・ヤングライフ・ア・ナ・ト。

それは違う。ジュネスだ。面白いギャグを思いついたのに、誰も笑ってくれないから、俺は自分で笑う。

「おい、つかさっ」

駐車場は広い。だが、俺はその駐車場には用がない。駐車場が敷地面積の半分以上を占めていたら、俺はアナトの半分以上に用がないことになる。

生鮮食品売り場を目指せっ。走るのだ。走らねばならぬのだ。待っている、セリヌンティウス。

「しっかりしろっ、おいっ」

俺の進行方向に、車が回りこむ。このまま走り抜けた場合、衝突せずに切り抜けられる確率はいくらだ。

千に一つか、万に一つか。億か、兆か、それとも京か。

それがたとえ那由他の彼方でも、俺には充分に過ぎ――――

「つかさっ」

乾いた衝撃音。左頬に残る、痛み。

数瞬遅れて、俺は、自分が日比野に頬を張られたという事を理解する。

アスファルトの上に、立ち尽くす俺。

日比野は、泣いていた。

泣きながら、俺を、睨んでいた。

「――あれ、猫恋はしたんだ。慰めなくていいのか」

アホみたいに呆けていた俺の、第一声はそれだった。ほかに言うことがあるのに。

でも、確か彼女は泣いていた気がする。一緒の駅を利用しているから、家は近い筈だ。

「飛鳥に、任せたよ」

日比野が答える。

「そうなのか。泣いて、いたような気がするんだが」

「お前だって、今にも泣き出しそうじゃないかっ」

涙で顔をグシャグシャにした日比野が、叫ぶ。

「そう見えるか。俺は、至って普通のつもりなんだが」

「どこがだっ。線路に落ちそうになるしっ、止まってる自動車にはぶつかるしっ、駐車場で走りだそうとするしっ」

——ああ、そうか。俺は、こんなにも脆かったのか。
みっともなく動揺して、事故りかけて。その度に日比野に助けて
もらって。

全く、情けない。

「何が、あった」

彼女が、問いかける。

「何、って。——特に、何も、なかったんだ」

俺は、答える。矜持がそれ以上語る事を許そうとしなかったが、
一旦言葉にすると、あとは、決壊したダムのようなだった。

「卵、バーゲンセールでさ、俺、余分にとっちゃって。戻そうとし
たら、小鳥遊さんが——いて、で、卵をあげて、スタバに行って、
特に何て事のないような話を話して、さ。友達——彼女が、どう
思ってるかは、全然、判らなかつたけど、俺は、彼女と——友達
になれたって、思っで、で。帰り際に——」

話すに連れて、徐々に声が上擦る。目の奥が、熱くなる。

泣いちゃ、駄目だ。

そう、思ったのに。

「帰り際に——俺、送ってこうかって、言って、断られたんだけ
ど、だけど、さ、もし、もしもの話だけ——」

ここで泣いたら、最低の人間だ。

そう、思ったのに、俺の目から涙が、出てきた。
次から次へと、止まらなかった。

「違うっ」

日比野の、怒号。

喋っていた、俺の、言葉が、止まる。

「彼女が、死んだのは、司のせいじゃ、無い」

日比野が、ゆっくりと、言い聞かせるように、話す。

その言葉を、聴いて、俺は、ゆっくりと、崩れ落ちた。

そして泣いた。日比野の前で、情けなく。惨めに。泣き崩れた。

日比野は、その後は何も言わず、俺を抱き締めてくれていた。

最低で、格好悪くて、プライドなんか無くて。

聞き分けの無い餓鬼のように泣きじゃくる俺を、ただ、抱き締め
てくれていた。

十六章『友達の唄』

その後、アナトには寄る事無く、俺は帰路についた。日比野は「心配だから、家まで送ってやる」と言い、さっきからずっと俺の隣を歩いてくれている。彼女の、その気遣いが、嬉しかった。

思えば彼女には支えられてばかりだ。二年前の事故の時も。あの時はただ、傍に居てくれたただだったが、とても心強かった。

「あれ、何だ」

日比野が前方を指差す。そこには人だかりが出来ていて、テレビカメラ等も見えた。レポーターらしき人が、マイクを片手に、熱心に何かを喋っている。

「――学校――生徒――遺体――警察――足取り――」

断片しか聞こえてこなかったが、俺は理解した。

人ごみの中心にある、路地裏。ビルと、ビルの、間。テープで封鎖された、そこが――

「司、行こう」

日比野も解かったのだろう。俺の手を引き、人ごみから遠ざかうと誘導してくる。

だけど、俺は、彼女に逆らい、そこに駆け寄った。

「ちょっと、おいっ」

人を掻き分け、掻き分け、その場所に、近寄る。

が、立ち入り禁止を示す、テープ。更に配置されている、無数の警察官が、それを遮る。

「ちょっと、止まってくだ――って、君っ、どうしたんだっ」

俺の目の前に居る警官が、俺の様子を見て、慌てる。

なんなのだろう。俺の顔に何か変なものでも付いているのだろうか。

周囲に居る人間も、何故か騒ぐのを止め、俺の様子を驚いたように凝視している。

俺の後から、日比野が駆け寄ってくる。

「司、ほら、早く帰るぞっ」

そう言って、日比野が再び手を引く。

「その前に、涙、拭け」

ハンカチを差し出す日比野。どうやらまた、泣いてしまっていたらしい。

呆然と、小鳥遊さんが殺された現場であろう場所を、俺は見つめ続ける。

「司っ、言っただろう。お前は、悪くない」

俺の様子を見かねた日比野が、そう言葉を掛け、俺を引っ張ってこの場を離れ――

「ちよっと、待ってくれるかな」

そんな声が、聞こえた。

「うん、ごめんねー。本当はこういうの、キチンと手順踏まないといけないくて、ね。刑事ドラマみたいにはばっと聞き込み、解決が出来るればいいんだけど、まあ、世の中そうそう上手い話ばかりじゃあないって事かな」

そういうと向かいの席に座る男はウェイトレスさんに「コーヒー四つ、アイスで」と頼んだ。

俺と日比野、そして二人の警官は、現場の近くの喫茶店《R・I・P・》に、居た。

曰く、俺の話を聞きたいんだそうだ。

「ああ、じゃあまず自己紹介からかな。うん、それは大事だ。俺、俺はね、捜査第一課の蕪木、フルネームは蕪木長門。戦艦みたいな

名前だろ」

そう言いながら、蕪木さんは手元の警察手帳を開いて一ページ目の写真と名前を見せる。

蕪木長門は、かなりふくよかな方だった。今話題のメタボリックシンドロームを体現したような体型。度の強い眼鏡を掛けている。髪は黒々と若々しく、肌も張りがあるため年齢は良く解からなかったが、『警部』、と書かれていたため、それなりの役職なのだと理解する。

「んで、こっちが」

「同じく捜査第一課の真野康彦といいます」

真野、と名乗る男は、蕪木さんと同じように警察手帳を開き、写真を見せてくれた。

真野さんは蕪木さん比べると、かなり精悍そうに見えた。すらっとした長身にモデルのような体型。短めに刈り込んだスポーツマンのような髪形に、ノーフレームの眼鏡を掛けている。

「それにしても、出来すぎた名前だろう。真野康彦ってさ。俺も事件とか起こったときに、いつもこいつを疑うんだよ」

蕪木さんはそう言うと、くつくつと笑った。

それに対して真野さんはクスリとも笑わず、冷たい視線で蕪木さんを見ていた。饒舌と、無口。体型だけでなく、性格も対照的なかもしれない。

「あれ、通じないかな。ジェネレーションギャップって奴だね。全く、月日の残酷さってのをしみじみと感じるよ」

冷ややかな三人の目線を受け、嘆く蕪木さん。

真野さんはきっと何回もこのネタを聞かされてうんざりしているのだろうし、日比野は何を意味しているのか解からないのだろう。

俺は何が言いたいのかは解かったが、黙っていた。

「と、また話が脱線したな。俺、良く注意されるんだよな。でもさ、こういう話術って大事よ、本当に。大学時代で、俺、今みたいにデブだったけどさ、話術だけが頼りで合コンとかには結構呼ばれるタ

イブだったし。まあ、彼女は出来なかったけど。——と、お兄さんには余計な心配だったかな。結構、モテるタイプでしょ」

「蕪木警部」

脱線した話を戻そうとして、もう一度脱線させるといふ荒業をこなす蕪木さんを、真野さんが窘める。

「ああ、ゴメンゴメン。謝る、謝りますよ。で、君たちの名前はなんていうのかな」

そういつてこちらの自己紹介を促す。

「えっと、俺は、時田司って言います」

「私は日比野響だ」

恐縮しながら自己紹介をした俺と異なり、日比野は何故か無然とした表情をしていた。

「時田君に——日比野ちゃん、ね。おっけー、覚えた、覚えた」と、そこで注文したコーヒーがウェイトレスさんによって運ばれてきた。

「うん、早いね。いい事だ。早い事は大抵、良い」

そんな事をぼやきながら、蕪木さんはコーヒーを啜る。

不意に、ストローから口を離して、俺を見据える。

目が、合う。

恰幅の良い体型。顔は人の好い笑みを浮かべていたけれど、度の強い眼鏡の奥の——

その目は、笑って、いなかった。

「ところでさ」

何てこと無い世間話をするように、蕪木さんは、切り出した。

「時田君、キミ、アレだよ。昨日、小鳥遊さんとスタバでコーヒー飲んでたっていう男の子、アレってもしかして時田君じゃないかな」

少しの、沈黙。

「ええ、そうです」

そして俺は肯定する。

「うん、そうか、やっぱりね。昨日、彼女がスタバに居たっていう証言は店員とかから取れてただけだよ、その時一緒にいた男の子、気になってたんだよね、彼女のその後の目撃証言とかが、一切無かったからさ」

蕪木さんは口許を斜めにしながら、話を続ける。

「どんな話を話した、とか訊く気は無いよ。でもさ、彼女と何時ごろまで一緒に居たのかな」

「えっと、七時、ぐらいだったと思います」

「七時。七時、ね」

彼は俺の答えに満足げに微笑む。

「ところでさ、この喫茶店、俗に言う『メイドカフェ』ってやつなのかな。俺、始めて入ったから良く解からないんだけど、ああ、意外だったかい。俺、別にこう見えてもオタクじゃないんだぜ」

また、話が脱線する。

「別に、メイドカフェという訳じゃない。ウェイトレスの格好が、メイド服というだけだ」

と、その質問に日比野が答える。相変わらず、表情は険しい。

「あー、成る程、成る程。確かに来店するときも普通に「いらっしやいませ」っていわれたからなあ。うん。じゃあオムライス頼んで、じゃんけんゲームさせられて、三千円とかぼったくられることも無い訳だ」

納得したように頷く蕪木さん。

「じゃあもうひとつ」

あんたは刑事コロンボか。

「これは、まあ、うんドラマとかでも、さ、よく聞く科白だと思うんだけど、形式上、ね、尋ねるんだけど、昨日の夜十一時半ごろ、何処にいたかな」

「彼を、疑っているのか」

質問に対して質問で返す日比野。しかし蕪木さんは、「疑問文に疑問文で返すなあーっ」と怒鳴り出す事はなく、「あくまで形式上の質問。疑ってる訳じゃないよ」といなす。ああ、確かにドラマでよく見かけるな、この光景。

「えっと、家で、寝てましたけど」

「うん、そうだよ。そうなるよね」

不在証明――。

それを、俺に要求しているの、だろうか。

「ごめんなさい。こんなのじゃ、アリバイにはなりませんよね」

「いや、いや、別にいいよ。むしろ夜の十一時半にアリバイのある高校生なんて、逆におかしいし、ね。そもそもアリバイを訊いたんじゃないし」

「えっ」

「うん、あのさ、死亡推定時刻なんだけど、判らないんだ」

蕪木さんは頭を掻きながら、そんな事を言い出す。判らないというなら、何故そんな時間帯の事を尋ねるのだろうか。いや、そもそも死亡推定時刻が判らないとは、どういう、事だろう、か。そんな事がありえるのか、彼の言葉が偽りなのか、その判断がつかなかった。

「いや、ちゃんと検死にはかけたんだけど、まあ、その、『死体の損傷』が激しくて、さ、普通そういうのって、胃の中身とか、生体反応とか、まあ、他にもいろいろあるんだけどさ、なんていうの。そりゃ、ある程度までは判ったんだけど、彼女の場合は――――」

「おいっ」

「警部っ」

日比野と真野さんの大声が、彼の喋りを遮る。

日比野は兎も角、自分の部下であろう真野さんにも、注意されるとは。

「ああ、ごめん、ごめん。つい、余計な事まで喋っちゃった。俺、気が利かないってよく言われるんだよなあ」

「あの」

日比野が立ち上がる。

「もう、いいだろうか。流石に今の発言は、気が利かないとか以前に、人としてどうかと思うぞ」

そう言い捨てると、彼女は俺の手を取って席を立つ。

「ああ、うん、時間取らせちゃってゴメンね。コーヒー代はこっちが持つから」

そして、彼らは俺たちを見送ろうとする。

「—————すいません」

俺の言葉が、その場を、遮る。

「なんだい」

「一つ、訊いても、いいです、か」

「まあ、質問の内容にもよるけど、さっきの発言のお詫びって事で、いいよ。なんでも答えよう。あ、でもモチロン、俺が知ってる範囲の話で、だけどさ」

では、遠慮無く。

「そんなに、酷い状態、なのに、どうして、小鳥遊さんだと判ったの、ですか。彼女じゃないって事は、ないんですか」

その俺の質問に、蕪木さんは少し驚いた表情を見せた。横目で真野さんを見やった後、俺の隣の日比野に視線を向ける。

そして再び俺に向き直ると、

「あのさ、これはお詫びというか————訊かれたから答える訳で。えっと、まあ他言無用って事は勿論だけど、極秘に近い感じだし」
そう、前置きしてから、答えた。

「確かに、彼女の遺体は損傷が――と、いうより損壊、かな。が、激しくて、一目見て彼女だと、いや、人だとは判らなかったし、衣類や荷物の類も無くて、今も発見されてないけど、うん、その現場に、『生徒手帳』が、落ちてたんだ」

「生徒手帳、ですか」

「そう、正確に言うなら、学生証って奴かな。名前と顔写真が入ったカードみたいなやつ。君たちの学校は、そのカードを生徒手帳のページ目に入れておくのが、決まりなんだってね。まあ、兎も角、第一発見者、コレはただの通りすがりのサラリーマンだったんだけど、が、通報してくれて。で、警察が現場に到着したら、そのカードが落ちてて。彼女の家の住所とか調べて行ったら、――留守で、そこにあった毛髪とかを調べて、現場の死体とDNAとか照合したら、一致したってわけ」

「その、サラリーマンの方が、カードを発見したのですか」

「いや、現場に最初に駆け付けた、刑事だけど」

「そうですか、ありがとうございます」

生徒手帳、ね。

確かにそれは事実だった。俺の生徒手帳の最初のページにも、同ようなカードが挟んである。

「それでは、また」

何でそんな事を訊くのかと、追求される前に、俺は日比野と一緒に、喫茶店の外に出た。

今にも雨が降り出しそうな、空をしていた。

「おい、司、大丈夫か」

「なあ、日比野。DNA鑑定ってそんな短時間に終わる物なのかな」
日比野の問いかけと、俺の質問がほぼ同時に行われた。

その所為で彼女の言葉が聞き取れず、何と言ったのか確認しようと彼女の方を見ると、目が合った。

が、俺と目が合った途端に、そっぽを向いた。

「何だ、どうしたんだ、日比野」

「違う。なんでもない」

彼女はそう、答えた。

少しだけ、震えるように。

何かに怯えたような表情をしながら。

自分に言い聞かせるように。

「なんでも、ないんだ」

もう一度、言った。

十七章『Burn My Dread』

俺の部屋の扉を開けると、そこには意外な人物が、居た。

「ノナ、さん」

「おかえりなさい。司さん、お邪魔しています」

俺に【ぼうけんのしょ】を与えた、その人——いや、天使、か——が、ベットに座り、退屈そうに足を揺らす光景が目に入る。

今日は何故か黒い浴衣を着ており、結い上げた髪に簪を挿した、金髪碧眼の彼女には本来似合わない筈のその姿は、何故か奇妙なマツチングを魅せて、ただ腰掛けているだけなのに、窓から差し込む夕日との相乗効果で、とても、人間とは思えない、虚ろな美しさを華っていた。

「どうしたんですか」

「救う気なんでしょう。小鳥遊、来夢を」

俺の質問には答えず、俺の方を見る事すらなく、退屈気に窓の外を眺めながら、断定するような口調で彼女はそう、告げた。

そこで俺は机の上に、【ぼうけんのしょ】が出ている事に、気付く。

中を、見たのだろうか。

そんな考えが一瞬頭を過ぎるが、そもそも彼女はこの世界の法則を無視した存在なのだ。もっと超常的な手段で知っていたとしても、別になんら不思議は、ない。

そう、【ぼうけんのしょ】には、『四月十六日の朝』の時点でのセーブデータが、存在している。

朝食の時、妙な胸騒ぎを覚えたため、学校に行く前に《セーブ》しておいたのだ。

と、いう事は当然、そのデータを《ロード》すれば、彼女は、生き返る。

生き返る、のだ。

「はい。四月十六日の朝に戻って、彼女を、小鳥遊さんを、助けます」

俺は、そう、宣言した。

「そうですか」

ノナさんは平然としている。まるで、そうであるのが当然のよう

に。

「でも」
彼女は今まで窓の外へ向けていた視線で俺を貫き、言った。

「一応、忠告しておきますけど、止めておいた方が、いいですよ」

禁忌。

過去を変える事。

日比野との勝負で、俺が怖気づいた理由。

今度はあの時とは違う。

絶対に戻らなくてはならない。

だが、よく考えてみれば。

ゲームの勝敗を変えるより、

人間の生死を変えるほうが、より、禁じられるのでは、ないか。

「やっぱり」

俺は、辛うじて声を出す。

「やっぱり、禁じられているの、ですか。過去を、変える、事は」俺のその言葉を聞き、ノナさんは軽く驚いた表情を見せた後、破願した。

「いえ、そのような事はありませんよ。貴方が【ぼうけんのしょ】を使い、何をしようと自由です。株の動きを覚え、巨万の富を得ようとも、第三次世界大戦を止めようと、そういったペナルティはありませんよ」

そう言ってノナさんは、至極尤もな論理を、続ける。

「第一、過去を変えられないのなら、そのような《時間逆行^{リバーズ}》にどのような意味があるのですか」

その通りだった。過去を変えられないのならば、戻る意味などまるで無い。

全く持ってその通りだ。

でも、

だったら、

何故、

「どうして、彼女を——」

「貴方が小鳥遊さんを助けるのを止める理由は、今はお話出来ません」

言いかけた俺の科白を遮るノナさん。

「今は、まだ」

ゆっくりと、言い聞かせるようにそう呟く。

「ですが、確実に、貴方にとっては、小鳥遊来夢を助けない人生のほうが、幸福です」

「なん——」

「逆に訊きますが、何故貴方は小鳥遊来夢を助けなければならない

のですか」

再び、俺の言葉に被せ、質問をしてくる。

彼女を、助けなければならぬ、理由。

そんなの、

「友達だからに、決まってるじゃないですか」

そうだ。それ以外に、一体どんな理由が必要だというのだ。

しかし、俺の返答を聞いた彼女は、くつくつと、本当に、可笑し
そうに、笑った。

「ぷっははははははははははっ」

暫くすると、耐え切れなくなったのか、大笑いし始める。
腹を押さえ、本当に苦しそうに。

まさか、このような反応が返ってくるとは思わず、俺はその場で
立ち尽くした。

「ねえ、司さん」

やがて彼女は腹を抱えながら、俺に、問いかけた。

「どうして、そんなに良い人間の振りをするのですか」

——トクン、と。

心臓が一つ、鐘を打つ。

「ねえ、司さん。何で帰ってくるのが、こんなに遅くなったんですか」

「いえ、大丈夫です。聞かなくても解かります。大変でしたね。車にぶつかったり、錯乱して日比野さんに窘められたり」

「でも、何であんなに慌ててしまったんですか」

「いえ、大丈夫です。聞かなくても判ります。小鳥遊さんが、自分のせいで死んでしまったと、思ったからですよね」

「でも、【ぼうけんのしょ】があるのに、あんなに慌てるのは、ちよっとおかしい気がするんですよ」

「慌てても、いや、慌てるのだったら『まっさきに自分の部屋に来るべき』ですね。アナトに行くのではなく」

「忘れた、何て事はないでしょう。あんなものが手中にあったら、貴方の頭の中の何割かは常にそれを思い浮かべてますし」

「ましてデータを《セーブ》していたならば、人間、いつ《ロード》しようかと、それだけを考えるようになるんですよ」

「ねえ、司さん。どうしてわざわざアナトに行ったんですか」

「日比野さんを――、いえ、自分すらも騙して」

「ねえ、司さん。本当は、本当に助けたいのは『小鳥遊来夢じゃない』のではないですか」

「—————さい」

「小鳥遊来夢は貴方にとって、比較的どうでも良い存在で、助けても、助けられなくても、どっちでも良かったんじゃないですか」

「—————ださい」

「ねえ、司さん」

「—————ください」

「どうして、そんなに良い人間の振りをするのですか」
「やめてくださいっ」

俺は飛びのくように後ずさりをして、質問をする毎に一步步近づいてきたノナさんから、距離を取る。

彼女は楽しそうな、本当に楽しそうな表情をしていた。
新しい玩具を買ってもらった子供のような、純粋で、邪気の無い、
笑み。

駄目だ。

俺にはそれが耐えられない。

何故耐えられないのかは解からないが、兎に角。

机に駆け寄る。

ズボンから、オイルライターを取り出す。

【ぼうけんのしょ】から、四月十六日のデータファイルを外す。

そこに《SAVE》の文字が浮かんでいる事を確認して、

火を点けた。

【Data File No. 1 - 4 / 16 07 :: 35 :: 0
- ロードしました】

十八章『日常の価値は非凡』

【Data File No. 1 — 4 / 16 07..35..0
0 — ロードしました】

「司くーん、学校に遅れるわよー」

階下から峰子さんの間延びた声が聞こえる。

辺りを見渡す。

俺は机に座っており、さっきまで部屋に居た筈のノナさんが、いつの間にか消えていた。

時計を確認する。七時三十五分を少し回ったところだった。

どうやら、『ロード』は正常に行えたらしい。

溜息を吐き、机の上の【ぼうけんのしょ】を確認する。すると予想通り、『四月十七日の朝』のセーブデータが存在していた。

—————【ぼうけんのしょ】に書かれた内容は、『セーブ』、『ロード』の影響を受けない—————

これも、検証によって確認できた、事実だった。

今日の朝、十六日の朝にニュースを観て、胸騒ぎを覚えた俺は、毎朝セーブをする事にした。つまり、十七日の夕方時点で、『十六日の朝』のセーブデータと、『十七日の朝』のセーブデータの両方が存在していたのだ。

そこから『十六日の朝』を『ロード』し、『十七日の朝』のデー

タは本来この時間には存在していない筈なのだが、既に【ぼうけんのしょ】には、『十七日の朝』が、記されている。

尤も、《SAVE》の文字は消えていたため、この紙を燃やしても《ロード》する事は出来ない、が。

俺は『十七日』のデータを二つに破ると、【ぼうけんのしょ】から、未記入のデータ用紙を数枚取り出した。

それらを折り畳み、財布へと入れる。以前読んだ漫画のアイデアを参考にさせてもらったのだが、何処でもセーブ出来るというのは、心強い。

更にもう一枚に今の時刻とサインを書き込み、数字の1に丸を付け、《SAVE》の文字が浮かんだのを確認すると、折り畳み、それは胸ポケットにしまった。これで万が一失敗しても、再び今の時刻から始める事が出来る。

そして俺は、階下へと向かった。

学校に登校してみると、案の定というか、殺人事件の話題で持ち切りだった。教室のそこかしこで今朝の事件に関する会話が繰り広げられていた。

「おい、司、今日のニュース見たか」

氷室が話しかけて来た。珍しく真剣な表情をしている。

「ああ」

「なんなんだろうな。事件に関係してるのかは判らないけど、緊急

の職員会議とかがあるらしいし。ホームルームの時間が少し遅れるってよ」

「そうなのか」

今後の対策でも話さなければならぬだろう。登校する時は俺の通学路とは外れていたから知らなかったが、現場周辺では警察やマスコミがごった返していたそうだな。

「そう言えば、司。お前髪切ったんだな」

「おうよ」

「似合ってると思うよ」

「どーも」

「どうで切ってもらったんだ」

「初音さん、の弟子かな」

「あれ、あの店に弟子なんかいたっけ」

「いるんだよ、ところで氷室、猫恋がどこにいるか知っているか」

俺は前回の今日と同じように会話をしながら、猫恋の所在を尋ねる。気になる事があったのだ。

「えっと、確か図書室に居た気がするけど、どうしたんだ」

「ちょっと訊きたい事があってね」

「成る程」

俺の答えになっていないような答えに、氷室は納得する。

そう、猫恋心音の博識ぶりは、俺たちの間では、有名だった。フラミンゴの意外な生態から、この街の美味しい漬物のお店まで、およそ猫恋に訊いてみて、答えられない事はない、といっても過言ではない。

氷室に礼を言って、俺は図書室へ行く事にした。

「猫恋、ちょっといいか」

朝の図書室、その隅で黙々と読書に励む猫恋に声を掛ける。

時間が時間なので、現在の図書室利用者は少ない。けれど自然と声を潜めてしまうのは、図書室の魔力だろう。

猫恋は椅子に座って読書をしている。足が床に届かずに、前後に振り子運動をしているその様は、彼女の幼い容姿も相俟って、可愛らしさを演出していた。本当に、高校の制服を着た、小学生に見える。――読んでいる本が、位相幾何学に関するものでなければ、だが。

「あれー、時田君だー。おっはよー」

底抜けに明るい声で、挨拶をする猫恋。

緩くカーブしたツインテールをリボンで止めているその髪形は、まるで漫画で出てくるお嬢様キャラのようだった。まあ、実際、彼女は結構なお嬢様らしいのだが。

「ああ、おはよう」挨拶を返す。

すると猫恋は満面の笑みを浮かべる。ああ、クソ、可愛いな畜生。「それでー、何を訊きに来たのかなー」

やはり猫恋、お見通しか。と、言いたくなかったが、そもそも俺が自発的に彼女を訪れる時は、大概何かを尋ねる為だけだったと思う出す。

「ああ。えっと、DNA鑑定ってあるだろ。あれ、さ。どれくらいかかるものなんだ」

なのでストレートに用件を伝える。

と、猫恋の表情が、凍り付いた。

「だ、誰と、なの」

震える唇で必死に言葉を紡いでいる。どういう事だろう。何が、『誰と』なんだろうか。

「響ちゃんを見捨てて、誰との子供とDNA鑑定するんだこのやろ

「っ」

ここは図書室。にも関わらず、なんかとてもじゃないけど聞き捨てなら無い事を叫ぶ猫恋。

数が少ないとは言え利用者がいるのだ。視線が痛いし、とてつもない誤解だし。

「落ち着け猫恋っ」

「こ、これが落ち着いていられるか、こらっ」

椅子から降りて、俺に駆け寄り、握り拳で俺の胸板を何度も叩く。

「ひ、密かに、おっ応援っし、してたのにつ」

「だから、違うって」

「でも、せ、責任はとって、ちゃんと、子供を認知するよーにつ」

「ちがーうっ」

殴られても全然痛くないけど、流石にこれ以上の暴言は俺の学校生活に支障を来たす。と、いうか今でも十分にヤバイ気がする。先生とかの耳に入って、退学。なんて洒落にならない。

「死体だよ、死体」

「えっ」

猫恋の両肩を持って引き剥がし、諭すように、言う。

「例えば、身元が良くわからないような殺人死体があったとして、それがとある個人の可能性が出てきて、DNA鑑定で調べるとき、どれくらいかかるのかという、そういう質問だよ」

そう、決して「貴方、できちゃったの」とかいう元カノが現れて、その子供が本当に俺の子供かを調べる為にした質問などでは決しないのだ。

「なんだー、そうだったのー。吃驚しちゃったよー、本当に」

吃驚したのはこっちです。とは、言わないでおいた。

「でも、何でそんな事訊くのーって、質問して良いかなー」

「んー、止めておいてくれると、助かる」

「そっかー、じゃ、訊かなーい」

察しが良くて、助かる。説明しようとしたら、朝の時間は潰れるだろうし、信じてもらえる自信が無い。

「んー、DNA鑑定、ね」

記憶を検索するような仕草（人差し指を立てて、頭の上でくると回す動作。一休さんが頓智を閃く時の動作ともいう）をして、やがて猫恋は口を開いた。

「例えばー、さっきみたいな例だと、外国の調査機関に外注って事になるから、結果を知るまでに数週間かかるケースもあるみたいだけどー」

まだひっぱりますか、その話題。そう思ったが、口を挟む事はやめておいた。

「殺人事件や、事故のケースだとー、まあ、死体の状態にもよるんじゃないかな」

「死体の」彼女の言葉を無意識に繰り返す。「状態、ね」

「うん。DNA鑑定が必要なほど損傷した死体ってゆーのは、有り体に言えば腐ってる訳だからー、DNAサンプルの抽出に結構苦労するみたいだよー」

「成る程」

「でも状態が良ければ結構早くて、二日ぐらいで終わるみたい」

「二日」

刑事である蕪木長門の言葉が、思い出される。小鳥遊来夢の死体が発見されてから、個人だと特定出来るまでに、やはり早すぎる気がする。

嘘、だったのだろうか。

そうになると、やはり、俺の考えは間違っているという事になる。

そもそも、蕪木刑事の言葉が全て正しかったとしても、俺の感じ

たひっかかりは、ごく僅かなものだったのだ。

「あ、でもー」猫恋が思い出したように言葉を継ぎ足す。「死体とか個人の特定には、DNAもだけど、結構歯形で判断することもあるみたいー」

「そう、なのか」

「顎の形、とか歯の治療痕とかは結構誤魔化しが効かないからー、歯が数本ついた顎があるだけでも、個人を特定する大きな手がかりになるみたい、だよー」

そうすると、彼の言葉も強ち嘘だと切り捨てるものではないのかもしれない、のだろうか。

判らない。

判らない事が、多過ぎる。

「有難う、参考になったよ」猫恋に礼を言う。

「いいって事よー、それに、私も本で聞きかじった程度の知識だから、もしかしたら間違ってるかもだし」

彼女はそう江戸っ子風に返事をし、親指を突き出した拳を、俺に示す。

「でもねー」

その拳を下ろすと、猫恋が頬を膨らませて、言う。

「響ちゃんを悲しませたらー、許しませんよー」

だからその話は完全に誤解ですって。

そもそも俺は――――、いや、やめとこう。セクハラだし。言ってて悲しくなるし。

もう一度猫恋に礼を言って、俺は図書室を後にした。

今日は部活動が行われず、教職員が放課後に周辺を見回るらしい。

朝、谷嶋原先生がホームルームでそう報告した。

授業は通常通り六限目まで行われるとの事だったので、クラスメイトの何人かが失望の声を上げた。

まあ、そんな感じで。

俺は『二回目の今日』を繰り返していた。

十九章『ボクらの17回目の春に』

「めっしだっ。めっしだっ。ひーるめーしだーっ」

昼休みになるなり氷室が謎の唄を歌いながらこちらにやって来た。普段俺以外の前ではクールキャラを貫いている癖に、昼休みになるとテンションが上がって馬脚を露すのだ。しかし何故か氷室の人気は落ちない。彼曰く、「時々地を出すのは、所謂一つの萌え要素として処理されてるから大丈夫」との事。畜生、イケメンは何をやっても許されるのか。

昼休みは席を自由に変える事が出来るので、俺達はいつも俺、氷室、日比野、猫恋、飛驒の五人でグループを作って食べている。

今日は俺の席の周りに集まる事にしたらしい。氷室が俺の席の前に陣取る。

「いやー。この時間の為だけに学校に来てるといっても過言ではありますまい」

そんな事をほざいている氷室。その隣に座る日比野。その前に座る猫恋に、その横、氷室の前に当たる席に座る飛田。

新しいクラスが出来て一週間も経てば、大きさは大小様々だが、大抵の生徒が似たようなグループで食事を摂っている。

ただ独りを除いて。

小鳥遊、来夢。

俺はちらりと横目で彼女を確認する。俺たち五人やその他大勢は、思い思いに机を寄せ合っていたが、このクラスでただ一人、彼女だけはそこに交わっていなかった。

教室の端で、いつも通り文庫本を読みながら、パンを頬張っている

る。

長い黒髪。

美しい、横顔。

いつも不機嫌そうな、表情。

俺は、彼女が生きている事に、感謝した。

「小鳥遊さん」

俺は一回目と同じように声を掛ける。

小鳥遊さんが顔を此方に向ける。

「一緒に、ご飯、食べませんか」

思わず敬語になってしまった。

彼女が、目を見開いた。

そのまま静止する。

俺も思わず、固まる。

氷室や日比野、猫恋に飛田が驚いた様子でこちらを見つめる。

暫くそのままだったが、やがて小鳥遊さんが口を開いた。

「本気、ですか」

「本気です」

即答する俺。

彼女は俺を睨むように見つめる。俺も負けじと見つめ返す。ここで目を逸らしたら、多分、食事に加わってくれなさそうな気がしたから。

そして、ここで食事に加わってくれなかったら、彼女がアナトで俺と出会ったとき、スタバに誘ってくれなくなるかもしれないから。――まるで恋愛ゲームのフラグじゃ、ないか。心の中で、そう自嘲する。

もう一度、そのまま場が膠着しそうになったが、彼女が根負けしたのだろう。

机を、寄せてくれた。

食事風景は和気藹々としていた。

日比野や猫恋、飛田はまるで以前の親友のように、話題を小鳥遊さんに振っていたし、氷室も俺に小声で「グッジョブ」というと、積極的にその会話に参加していたからだ。

ただ、なんだろう。周囲から妙に見られている気がする。が、それも無理のない話かもしれない。

学年でもトップクラスの美少女四人と、それにひけを取らないイケメン一人だ。まるでギャルゲーの光景ではないか。

あれ、でも待てよ。そうすると俺のポジションは、主人公（氷室）の親友になってしまう。

脇役だ。完全に脇役だ。

と、いう事は。俺は氷室に訊かれたら、彼女たちの好感度とかを報告しないといけないのかよ。

「同じ事何回も繰り返して考えるのは、ちょっと馬鹿らしい、かな」

「どうしたんだ、司」

俺の独り言を聞き取ったのか、話しかけてくる氷室。ちなみに小鳥遊さんが居るからか、今の彼は『爽やかモード』だ。

「別に何でもない。ただの独り言だ」

俺はご飯をかつ込んだ。うん、美味しい。

その後は連絡にあった通り、六限目まで授業を行った後、下校する事となった。

部活は中止との事だったので、いつもよりも混雑している通学路を、日比野と共に歩く。

「凄い人の多さだな」

隣を歩く日比野が、感嘆の声を漏らした。

「結構な人数の生徒がいるって事だ。『数クラス毎に帰宅時間帯をずらす』とかにすれば良かったのにな」

学校の前の歩道は生徒たちで溢れていた。ちらほらと生徒以外の人も居るが、まあ、とてもじゃないが前には進めないだろう。これは、明日あたり学校側に苦情が来るのではないだろうか。

「っ、つかさっ」

日比野の叫び声が耳に入る。振り返ると、俺に手を握られている彼女が目に入る。

「ん、ああ。ゴメン。逸れそうだったから、つい」

俺は手を離し、彼女に謝罪する。前回人波に吞まれていたのを思

い出し、反射的に彼女の手を握ってしまっていたのだ。

「――っ」

「ん。どうした日比野」

彼女は少し立ち止まる。すると何を思ったか今度は彼女のほうから俺の手を取り、前を歩き出した。

「おい、日比野っ」

「なんだ。司が迷子になったら探すのが面倒だからな。仕方ないだろう」

俺の抗議も無視して、日比野は前を進む。

彼女に手を引かれる、俺。

今朝、図書室で猫恋に聞いた話を思い出す。

蕪木長門の提供した情報に感じた、違和感。

例えば、あくまで例えばの話だが、俺の推察がどんぴしゃりと正解だったとして、

彼をどうやって警察に突き出せるのか、証拠をどうやって集めればいいのか、まだ、分からない。

それに、やっぱり俺の考えだって穴だらけで、別に『偶然』の一言で片付けられる話だった。

根底が、弱い。

だけど、戦わなければならない。

小鳥遊来夢を今日助けられたとしても、明日や明後日まで護り切れるとは限らないし。

犯人のターゲットが日比野になる可能性だって決して低くは無いのだ。

日比野の、手のぬくもりを感じる。

彼女に手を引かれ、生徒でこった返す歩道を歩きながら、俺は自分の考えを再び整理し始めた。

二十章『因果律のメルト』

大型ショッピングモール《アナト》。生鮮食料品売り場を後にした俺は、内部にあるスタバでキャラメルマキアートを啜る。席の向かいでは小鳥遊さんがコーヒーを飲んでいた。彼女に「話がありますので、このあとお茶をしませんか」と誘われてこの状況に至る訳だが、彼女はこの店に入ってから、一切口を開こうとしなかった。

前回と同じようにアナトに行き、同じように卵を三パック確保し、同じタイミングで、同じレジに並び、同じ時間帯にスルーされた結果、小鳥遊さんに出会え、卵を渡す事が出来たのだ。

で、今に至る。

俺は意識的に前回の行動を極力なぞるように行動してきた。

えっと、とすると、まず切り出すべきは、確か――――

「小鳥遊さん」

「はい、何でしょう」

「十回クイズってご存知ですか」

「十回クイズ、ですか」

「はい、有名な所だと『ピザって十回言って』と相手に『ピザ』という単語を十回繰り返させ、その後『ここは』と自分の膝を指差し、相手に思わず『ピザ』と言わせる、引っ掛けクイズの類です」

「ああ、その事ですね。もちろん、知っていますよ」

なんと言うか話題の振り方とか、内容とかが、物凄く野暮ったい感じがするが、気にしない。

「では、『舌』と十回言って下さい」

「わかりました。舌、舌、舌、舌、舌。した、した、した、した、

した」

「サンタが乗っているのは、なんででしょう」

「引っ掛かりません。トナカイです」

「ソリですよ」

「—————っ」

顔を赤くして小鳥遊さんが黙り込む。表情は読みづらいが、多分悔しがってるのだろう。

「ところで、何故、あんな事をしたのですか」

彼女が真剣な表情で俺に尋ねる。

「それはですね。『お一人様二パック限り』だったけど、俺は三パック取っちゃって」

「違います。卵の事は、感謝しています。そうではなく、昼休みの事です」

「迷惑、でしたか」

「いいえ。正直に言うと、—————少し、嬉しかったです。ですが、貴方にとって、私を食事に誘う事に、どのようなメリットがあったのですか」

「小鳥遊さんが、加わる事でしょうか」

「手段と目的が混合してますよ。そのような科白では、誤魔化されません」

同じ会話を、繰り返す。

きつと、この質問に対する答えは、重要だから。

「あのですね。小鳥遊さん」俺は一つ、深呼吸をしてから、彼女に

返答する。

「はい」

「俺はね、特に明確な理由があつて、声を掛けた訳じゃないんですよ」

こちらを見つめる、彼女。やっぱり表情には殆ど変化が無くて。
「本当に、君と、昼ごはんが食べられたらいいなあ、って。そう、思ってたんです」

だけど変化が全く無い訳じゃない。

「信じてもらえるかどうかは判ら無いけど、本当です」

我ながら陳腐な言葉だが、気持ちをも、言葉に乗せる。

「そうですか」

相変わらず、無表情のまま、答える彼女。

彼女はふっと溜息を吐き、それから、言った。

「時田君」

「はい」

「さっきの『少し嬉しかった』って言葉。あれは嘘じゃありませんから。念の為、言っておきますけど」

それから、友人のように他愛も無い事を話し合った。相変わらず彼女は無表情で、楽しいのかそうで無いのかはさっぱり判らなかつたけど。

「もう、こんな時間か」

俺は時計を確認して、言う。もう七時になろうかという時間帯だった。なんだかんだで一時間以上も話していた計算になる。

「すみません。付き合ってもらってしまつて」

「いえ、大丈夫ですよ」

お互いに荷物を持ち、帰り支度をする。

と、春になって陽が伸びたとは言え、もう外は暗くなっていた。

「送っていきましようか」

そう、提案する。

「結構です。ちょっと歩きますし。卵、早く冷蔵庫に入れないと、痛みますよ」

ここだ。ここが分岐点だ。

ここで、彼女を送り届けなければ、死ぬ。だから、運命を、変えなければならぬ。ノナさんになんと言われようと、彼女を助けたいと思うこの気持ちに、偽りは、無い。

「そうだ、時田君」

「はい」

「『小野小町』って十回言ってください」

「小野小町、小野小町、小野小町、小野小町、小野小町。おののこまち、おののこまち、オノノコマチ、小野小町、オノノコマチっ」

「日本で最初の遣唐使は誰でしょう」

「犬上御田鍬」

「――――っ」

俺の解答に驚いた様子をみせる小鳥遊さん。

呆然としている彼女の荷物を、俺は空いて居る右手で奪う。

「あっ」

「じゃあクイズに勝った事ですし、送っていきますね」
別にクイズと送迎になんの因果関係もないのだけど。

「――分かりました。では、お願いします」

小鳥遊さんは不承不承といった様子で、頷いた。

「一つ、訊いてもいいですか」

商店街通りを抜け、少し人通りが無くなったあたりで、隣にいる小鳥遊さんが、問い掛けてきた。

「はぁ、何でしょう」

「その前に、敬語は止めてください。他人行儀です」

俺の言葉遣いが注意される。彼女自身は敬語なのに、俺に止めるとは―――何というか、何だろう。

「私は、良いんです。これがデフォルトですから」

また思考が読まれた。彼女にまで筒抜けとなるとどうやら本当に、俺の考えは読み易いという事になるのかもしれない。

「えーっと、おっけー、分かった。それで、訊きたいことって、何かな」

早々とタメ口モードに切り替えて、彼女の質問の続きを促す事にする。

と、彼女はこちらに向き直り、俺の目を真っ直ぐ見て、言う。

「どうして、送って、くれるのですか」

また、だ。

昼食誘った理由を問うた時と同じ、目。

純粹に、本当に、何故か分からない、そんな瞳。

なんとなく、彼女が抱える暗い部分が、見えたような気がした。

しかし、そこは、俺が触れていい場所じゃ無い、と思う。

少なくとも、今は、まだ。

だから、

「そりゃ、最近は何騒だからだよ。連続殺人犯がいるから、ね」
俺は適当に誤魔化す事にした。

そんな俺の返答に対し、少し眉を顰め、彼女は何かを言おうとする。

「――――あの、」

「あがああああああああつ」

二十一章『You were there』

悲鳴。

俺の物でもなく、当然、小鳥遊さんの物でもない悲鳴が、鼓膜を揺らす。

そちらの方に視線を向ける。
が、誰も居ない。

良く見ると、左の建物と建物の上に、路地裏が、あった。
—————そうか、此処は、確か。
走り、路地裏を確認する。

其処には一人、蹲る男と、それを取り囲む三人の男が、居た。
全員俺のものとは異なる制服を着ているから、この近くの高校の生徒である事が確認できる。

取り囲む側の男の一人、髪を金髪に染めてピアスをつけた生徒が、倒れた生徒に何事かを、言う。

「月森いいいゝ、駄目だろ、そんな大きな声出しちゃあ」
それに伴い、三人組のもう一人、坊主頭も下卑た笑い声を上げる。
「んつとにへタレだよな、のび太は」

最後の一人、髪をツンツンに立てた生徒が、「それじゃあ罰ゲームだな」と言いながら、何かを取り出す。

コンビニのビニール袋に入れられたそれは、一見何だかは判らな

かったが、

「ほら、犬の糞、喰えよ。出来立て、ほやほやのを持ってきてやったんだから」

そう言っ取り出し、蹲る男の顔面に突きつける。

「うぐうがあああつ」

「おい、騙せると思ってたのか、のび太」

金髪が、倒れ込みながら咽る男の頭髪を掴み、無理矢理顔を上げさせる。

そして、ツンツン頭から受け取った犬の糞を、

倒れている男の口に、

塗りたくる――――

――――前に、その身体が宙に舞っていた。

一瞬。

遅れて、俺の横を颶風が通り過ぎる。

吹き飛ばされた金髪の身体が、脇に置かれたゴミ箱に突き刺さり、

そこで、ようやく、

俺は、理解する。

俺が、彼を助けようか如何か迷っている間に、『小鳥遊来夢は既に動き出し、目にも留まらぬ速度で金髪に蹴りを叩き込んだ』のだ

という事を。

圧倒的初速度に、加速度。

その動きは、人間のそれを遥かに超越していた。

これが漫画や映画なら、残された二人の男が、「な、何だこの女っ」とか小物くさい科白を言い、彼女に挑みかかって負けるのだろうが、そうはならなかった。

否、彼女の速度はそれすら許さなかった。

突然、吹き飛ばされた仲間。

乱入者。

まだ、この状況を頭で理解できず、混乱している。

その間に、

彼女は坊主頭の顎に掌底を入れる。

脳を揺らされ、男は倒れた。

彼女は一片の容赦も無く、そいつの鳩尾を踏みつける。

そこでようやく、最後のツンツン頭は自分達が襲われているのだという事を理解し始めたのだろうが、

彼が何らかの行動を起こす事は、無かった。

何故なら、その時には、既に、彼女の後ろ回し蹴りが、正確に、頭を撃ち抜いていたから――――

五秒。

三人の男を倒すのに、彼女が要した時間は、五秒あったか、なかったか。

「すみません。お待たせしました」

小鳥遊さんは何事も無かったかのように、平然と、戻ってきた。俺は駆け出そうとして、そのまま固まった、何と言うか、間拔けなポーズだった。

「えっと、小鳥遊さん」

「敬語は禁止。そう言った筈ですが」

『苗字+さん』も敬語に入るのか。ならば、

「来夢ちゃん」

まだ混乱しているのだろう。俺は変な言葉を口走った。いや、同級生に、ちゃん付けは、無いだろう。

「————つく、何でしょう」

絶対に拒否されると思ったのに、彼女は俺に質問の続きを促す。

あれ、意外。

まあ、兎に角、俺は、訊く。あんな人間離れた動きが出来るのは、俺の知るところ、『ただ一人』だけだったから。

「何か、格闘技、習っていたり、するの」

その問いに、彼女は、

「ええ、一応古武術を習ってますが」そう、答える。

古武術。

日常生活では聞き慣れない単語だが、俺は、思い当たる節があった。あ

と、いうよりそれしか有り得ない。

「————《新陰一刀流》、か」

「ご存知、だったんですか」

来夢ちゃん（なんか気に入ったから心の中でもそう呼ぶ事に決め

た)が俺の呟きに、少し、目を見開いた。

嗚呼、やっぱり。

——初音さん、弟子は取らないって、言っていた癖に。

「来夢ちゃんっ」

と、俺が太刀花初音に思索を巡らせていると、そんな叫び声が、聞こえた。

当然俺でも、来夢ちゃんが出したものでもない。

ふと、見ると、先ほどまで虐められていた男子生徒が、此方を凝視している。

いや、正確に言うならば、小鳥遊来夢を、見つめている。

名前を叫んだ、という事は、知り合い、なのだろうか。そう思つて来夢ちゃんの方に目をやるが、特に表情に変化は見られない。寧ろ、眉を少し顰め、怪訝そうな顔をしていた。

「ぼっ、お、ぼく、だよっ、月森」

名乗り上げる少年。坊ちゃん刈りのような髪形に、度の強い眼鏡を掛けている。太い眉毛と対照的な薄い唇。おそらく普段は陰気な雰囲気醸しているのだろうが、今は少し高揚しているように見えた。

「ほら、中二の時、さ、クラスメイトだった、ほら」

虐められていた少年、月森君は、必死のアピールを繰り返す。

「ごめんなさい」

が、

「ちょっと、誰だか、判りません」

来夢ちゃんは、覚えていないようだった。

その言葉を聞いた月森君の顔から、色が消える。彼の表情をみる絶望が侵食していった。

うん、彼の言葉が真実だったとしたら、それは、少し、可哀想だ。と、いうか相当辛い。

俺が彼の立場だったら、ちょっと泣くかもしれんね。

そこで、ふっと、月森君が、俺の方を、見た。

驚いた、顔。

まるで、今初めて俺の存在に気付いたかのような、そんな表情をする。

そしてその驚いた顔から、

「おお、お前っ」

憎悪が溢れ出す。

「お前だよっ、お前っ」

耳を打つ、怒号。彼は本気で俺に怒っている。

俺に。

何故だろう。

初対面の筈なのに。

「誰なんだよっ、お前っ」

やっぱり、初対面だ。でも、十七年生きてきて、初めて会った人間に、此処まで敵意を向けられた経験なんて、殆ど無い。

「何で黙ってたんだよっ、誰だって訊いてんだろうがっ」

彼の様子に面喰っていたが、やはり、ここは答えるべきなのだろう、か。

「俺は時————」

「お前っ、あ来夢ちゃんの何なんだよっ」

答えようとした俺の科白に、被せる様になり立てられた。

と、

星空が、見えた。

身体に走った衝撃が、俺を襲う。

後頭部を、打つ。

少し遅れて、彼に倒されたのだと、理解する。

完全に不意打ちだった。

それはつい先程来夢ちゃんが魅せた体術とは比べ物にならないほど未熟で遅かったが、そもそも彼は俺に襲い掛かる必要性が無いのだし、まさか攻撃をしてくるなんて思ってもいなかったのだ。

頭を打ったことで、目の前に星が散る。

月森（もう、呼び捨てでいいよね）が俺に跨る。

やだなあ、男相手に騎乗位なんて、絶対にしたくない。

なんて、そんな場違いな冗句が頭を過ぎる。これは、マウントポジション、だ。

「がっ」

意図せずに、息が漏れる。

月森が、叫ぶ。

「なんでお前が、お前みたいな奴がっ、居るんだよっ、隣にっ、なんだよっ、弱みかっ、来夢ちゃんの、弱みを握ってるんだろっ、そお、それでっ無理矢理、付き合わせてるんだろっ、い畜生があっ。糞お、卑怯者があ。卑怯者っ、糞がっ。おい、なんとか言ったら如何なんだよ、糞がああっ」

耳を打つ、罵詈雑言。

振り上げられた、拳。

俺は両手を自分の顔の前に、翳す。

素手での攻撃は、ガードをすり抜けて、当たる。

そんな話を聞いた事が、あった。

体当たり、そしてマウントポジション。

月森の一連の動作は、技術は決して無いが、力が無いわけではない。

つまり、拳が振り下ろされれば、ただでは、済まない。

俺は訪れるであろう衝撃を覚悟して、目を瞑った。

目を、開いた。

「ぶげえっ」といった間抜けな声が聞こえたつきり、何も起こらなかったたので、不審に思ったのだ。

月森はもう俺の上にはおらず、数メートル離れたところで伸びていた。

俺の前には来夢ちゃんが立っており、片手を差し出してくる。

助けて、くれたのだらう。状況的に考えて。

「大丈夫ですか」

俺はその手を掴み、立ち上がらせてもらう。

「ああ、うん。大丈夫、かな、割と」

後頭部を打ったし、道路に倒されて白セーターが汚れまみれになったけど、変なところで強がってしまう。

唐突に訪れる、沈黙。

何を言ったらいいのか、分からない。

「あの、来夢ちゃん」

「なんででしょう」

「助けてくれて、ありがとう」

だから、取り敢えずお礼を言っておいた。

「どういたしまして」何て事無いように返された。「では、帰りましょう」

俺は自分の荷物に目をやる。

卵は、割れていた。

二十二章 『小悪魔ヘヴン』

そのアパート《ハイヌウエレ》には七時半ほどに着いた。

途中での一悶着が無ければ、歩いて十五分程の距離だった。

「意外と、近いんだな」俺はそんな感想を漏らす。

「そうでしょうか」

「ああ、いや」

答えるか如何か少し迷ったが、隠すほどの事でも無いので、教える事にした。

「俺の家、ここから五分くらいの所なんだ」

「そうなんですか」

「うん。だから意外と近所なんだ、って思って、さ」

「その割には朝、お見かけしませんね」

「そうだね」

本当、不思議だ。ここは俺の通学路とは微妙にずれているが、同じ駅を利用している以上、出くわしていてもおかしくはないのに。

「まあ、私は割りと朝早くに登校しますからね、それ程不思議な話でもありませんけど」

「そうなんだ」と、朝はそれでも良いが「帰りは、部活とか入ってたっけ」

「いいえ、帰宅部です」

「俺も帰宅部だけど」帰りにも鉢会った記憶は、無い。

「道場に寄ってから、帰りますからね」

「ああ」納得した

《新陰一刀流》の道場は、家とは反対方向だ。

「――っ」

後頭部が、痛んだ。

「如何しました」

来夢ちゃんが俺の顔を覗き込む。

「いや、別に」強がる俺。

「氷枕くらいなら、ありますけど」見抜かれた。

正直、結構痛い。コンクリに思いつきりぶつけて、完全に瘤になっ
ている。一步踏み出す時の振動が、痛みになる程だ。

「それに送って頂いたのですから、お茶くらい出しますよ」

「そっか。じゃあ、悪いけど、氷枕、貸してもらえないかな」

俺はお言葉に甘える事にした。我が家には氷枕なんて素敵アイテムは存在しない。

と、いうか、今時氷枕って随分アナクロな気がする。熱が出ても冷えピタに頼ればいいので、あまり必要な機会は無いのではないか。尤も、今現在必要になっているのだから、俺がとやかく言えた義理ではないのだが。

それにしても《ハイヌウエ》、ね。

その突っ込み辛い名前の割には、比較的普通のアパートだった。クリーム色を基調とした、シンプルな外観は好感が持てる。

て、あれ、もしかして。

「来夢ちゃんって、一人暮らしなのかな」

「――っ」

気になって問い掛けるも、無視される。

もしかしたら、訊いてはいけない話題なのかもしれない。高校生が一人暮らしなんて、きっとそれなりの事情があるのだろうから。

「っと、ゴメン」

「別に、上がれば分かる事ですから。ええ、一人暮らしです。――

―それより、その呼び方」

「来夢ちゃん、の事かい」

「――っ、それですっ。もっと如何にかなりませんかっ」

珍しく語調を荒げる来夢ちゃん。うん、さっきは兎も角、やっぱ
りお気に召してはいない模様。

「えー。でも、『小鳥遊さん』は他人行儀で、嫌なんだよね」

「はい」

そうなる、と、

「来夢さん」

「新婚ですか」突っ込まれた。

「タカ」

「欧米か」突っ込まれた。

「らーたん」

「ラーメン屋の注文の略し方みたいで、嫌です」

「ことりちゃん」

「これは女装ではありません。私は女です」

「イムリン」

「バカップルじゃないですか」

意外と注文の多い料理店だ。

と、来夢ちゃんが嘆息を漏らす。

「もう、結構です。今まで通り、呼んでください」

諦められた。そんなにネーミングセンスが無かったのだろうか。

あ、そうだ。一つ気になった事があったので、尋ねておきたい。

「おーい、イムリン」

「せいっ」

號、と音がして、俺の顔の前、数センチを彼女の踵が通過した。

数秒の後、回し蹴りをされたのだと理解する。

「えっ、突っ込みにしては激し過ぎる気がするのですが」思わず敬
語になってしまった、俺。

「すみません。ボケにしては悪質過ぎた気がしたので」

全く申し訳なさそうな様子を見せない彼女。
今後、彼女の前でボケる時は、間合いに気を付けよう。
そう、誓った。

来夢ちゃんの部屋は生活感をまるで感じさせなかった。女の子らしいファンシーな小物等は一切存在せず、必要最低限の家具が申し訳程度に配置されているだけだった。

女の子の部屋に入る――と言うのは男なら多少なりとも緊張を感じざるを得ないシチュエーションであるにも関わらず、そういった類の感情を一切与えられないコーディネートだ。

「えっと、シンプルな部屋だね」取り敢えず、無難な感想を述べておく。

「どうぞ」

「あ、どうも」

促されるままに部屋に上がる。しかし、テーブルの類が一切無い。部屋の隅に、ソファが一つ、置いてあるだけだ。

何処に座ればいいのかと悩んでいると、彼女が無言でそのソファを指し示すので、そこに腰掛ける。

「では、氷枕を取ってきますので」

と、いうと彼女は部屋の反対側にあるキッチンへと向かい、冷凍庫を開ける。

彼女が背を向けた内に――というわけでもないが、部屋を一通り観察する。1DK、トイレ、風呂付といった所だろう。かなり綺麗な部屋だし、お値段もそれなりにするのもかもしれないが、そういった事情に疎い俺は、幾ら位なのかという予想は付かなかった。

来夢ちゃんが戻ってきた。

「氷枕です」

「あ、ありがとう」

「少し、頭を見せてもらえませんか」
そう言うと、俺の隣に腰掛ける。

俺は首を横に向け、後頭部を彼女へと向ける。うん、アレですよ。平静を装ってますけど、内心ドギマギしっぱなしですよ、ええ。

「瘤が出来てますね」

彼女は指で俺の髪を分け、患部を確認すると、そこに氷枕を押し当てる。冷たい。

ゆっくりと、患部を冷やされる。

じわじわと、

心地いい冷たさが、広がる。

「っ、と」

いかん。うつらうつらしていた。と、いうか多分一瞬だけど意識が飛んでいた。

気を張っていて疲れたのだろうか。

よくよく考えてみれば、《ロード》を実行したから、俺の主観時間ではもう二十時間程度起きっぱなしだった。

まあ、記憶以外の時が戻っているのだから、疲れもリセットされる筈なのだが、精神的にはそうもいかない。

色々と、起こりすぎたのだ、『今日』は。

しかし、いくら座り心地が凄まじいソファだとはいえ、あまり遅くなっただけじゃない。峰子さんは今日は仕事が休みだからいいものの、家事当番は俺なのだ。少し遅くはなるとメールしたものの、二人ともきつと、もうお腹を減らしているだろう。

「来夢ちゃん——」

そろそろお暇させて頂く。

振り向いてそう言おうとした俺の言葉は、音をなさなかった。
来夢ちゃんが、

泣いて、

いたから。

如何いうことだろう。

彼女は、俺の隣で。

振り返った俺の目を見つめたまま。

音も無く、

はらはらと、

涙を、流していた。

俺が振り向くと、彼女は慌てたように目を逸らしたけれど、
俺が振り向いて何を言おうとしたのか察したのだろう。

「駄目っ」

小さく、そう叫ぶと、

俺に、

飛び掛って、

と、

言うよりも、

抱きついて、

の、方が正確か。

兎に角。

俺はソファに押し倒された。

俺が下。

彼女が上だ。

綺麗な黒髪が勢いで、靡いて。
シャンプーの香りが俺の鼻腔をくすぐる。

彼女が、顔を、俺の胸板に押し当てる。
俺からは、彼女の頭頂部が見えて。

彼女が、硬く、きつく、抱きしめるから。
彼女の大きな胸が、俺の身体との間で形が変わるのを感じて。

「お願い」

顔を上げ、此方を見据える。
距離が近い。

睫毛の一本一本まで、見れる。

近くで見た、彼女の顔は、やっぱり、とても、とても綺麗で。

潤んだ瞳と、上気した頬は、官能的な印象を、与える。

つい——と、彼女が身をよじる。

彼女の太腿が、俺の脚をこすり、

彼女の胸が、俺の胸板に押し付けられる。

体勢を整えるその行為ですら、俺の理性を狂わせて。

柔らかい。

温かい。

惚けて何も出来ない俺を、見つめる彼女。

不意に、その顔が近づく。

近づいて、

近づいて、

それはやがて会話をする距離を、越える。

ゆっくりと、確実に、超えていき、

徐々に、零へと近づく。

近づいて、

まだ、近づいて。

零になる——。

彼女の唇の感触が、俺の唇を通して伝わって来た。

頭蓋に電流が走るような、感覚。

柔らかい。

それしか、考えられない。

それ以外の、全ての思考が、遮断され、中断され、切断される。

柔らかい。

一分、か、十秒か、時間の感覚がなくなる。

ほんの一瞬だったかもしれないし、あるいは永遠に近い時間かもしれない。

ほんの少しだけ、唇が離れた。

お互いの、吐息を感じる。

彼女が、少し、はにかむように、微笑んだ。

幕間『Dirty deeds done dirt cheap』

自分がとても天才的だと感じる事がある。

それが今だ。

暗い、夜の闇。

ビルとビルの間。

俺は自分の性器を少女のそれに挿入し、前後に動かす。
ピストン運動を繰り返すが、少女は一切の反応を返さない。

ブラウスの前のボタンを外し、ブラジャーも剥ぎ取る。
露わになった乳房に顔を埋める。

しかし、それでも、なんの反応も無い。

何故なら、少女は既に『人形』だからだ。

人形は、動かないし、喘がない。

当然の論理だ。

崩れた右半分の顔面に、はみ出す脳漿。

それらが少女が既に『人形』である事を、如実に語っていた。

俺は腰を突き動かしながら、右側の乳房をしゃぶる。

舌先で、乳首を転がす

空いた左手でナイフを掴むと、少女の左の胸に突き刺す。

そのまま円運動をする事で、胸を抉り取った。

まだ少し残っている体温が、彼女が少し前まで『人間』であった証だ。

抉り取った乳房を投げ捨てると、俺はピストンの速度を上げた。

最高だ。

人生で最高の瞬間だと断言できる。

数万払えばソープ嬢や、売りをやっている若い女とは幾らでもやれる。

だが、そんなものとは比べ物にならない快感、興奮がもたらされる。

屍姦。

彼女を人形にした後、ふと、思いついたのだが、これは、良い。我ながら、天才的な発想だ。

腰を激しく打ち据えていると、徐々に射精感が高まる。

点滅する視界。

深く、奥へと突き入れる。

中へと、出した。

妊娠の心配は、無い。

そんな冗句が頭に浮かんだ。

最高だった。

人生で最高の瞬間だと断言できた。

一通り『人形』の解体作業を終えると、俺は傍らに置いてあったビデオカメラのスイッチを切った。

帰ったらハードディスクに焼こう。

煙草を啜えて、火を点ける。

爽やかだった。

生まれ変わったように晴れ晴れとした気分だった。

煙を肺にたっぷりと溜め込み、吐き出す。

美味い。

最高に美味かった。

ふと、かつて人間だったものに目をやる。

もはやそれが元々は彼女だったとは——否、人間だった等とは思えないような有様だったが。

手元のビニール袋。

現場に俺の精液を残すのは不味いかと思い、子宮と膣——性器は取り出して置いた。

如何やって処理すべきだろうか。

野良犬に喰わすか、

川に流すか、

森に埋めるか。

まあ、兎に角、最高だ。

また、やろう。

二十三章 『失踪HOLIDAY』

俺の右に便座がある。

俺の左に浴槽がある。

この部屋には窓が無いから、昼過ぎにもかかわらず、薄暗い。

簡単に言えば、俺はユニットバスの便座と浴槽の間に挟まっていた。

現在時刻は午後二時。

学生である俺は、本来学校に登校していなければならない。

便座と浴槽の間で、体育座りなどしてはいけけない。

だけど、俺は学校には行けなかった。

左手に、手錠が、つけられていたから。

手錠には二つの輪があるが、その内の片方が俺の左手首を捕らえ、もう片方がトイレのパイプに繋がれている。

これで俺は鎖に繋がれた犬よろしく、このトイレから離れる事が出来なくなってしまった。

手錠はしっかりとした作りで、壊せるような代物ではないし、当然の如く、俺の手の届く範囲に鍵は存在しない。

平たく言えば、俺は小鳥遊来夢の手によって監禁されていた。

うん。状況だけを描写すると、そういう事なのだけれど、もう少し、説明が必要だろうか。

そうは言っても難しい話ではない。あのあと峰子さんに「友達の家泊まるから」と連絡を入れた途端、後ろからスタンガンで電流を流され、俺の意識は飛んだのだ。

で、目が覚めたらこの状況。

そうだね。色仕掛けだね。

「油断したーっ。《新陰一刀流》を習ってるって、事前に知っていたのになー」

古武術でありながら、《新陰一刀流》の真髄は『騙し討ち』にある。

遙か昔、己の命を賭けて真剣で切り結んでいた時代。確実な勝利を目指した剣豪——名前は、忘れたが。が開いた流派。

他の流派が『剣の技術を上げる事』を目標としていたのなら、この《新陰一刀流》は『生き残る事』を唯一にして最大の目標として掲げ、鍛錬してきた。

暗殺、ではない。

確かにそれが可能であれば、ノーリスクで相手の命を奪えるのだから、それに越した事はないのだろうが、刀と刀、その時代に、卑劣な行為は許されない。

お互い流派を名乗り上げ、立会人の下、命を上げての決闘。

一対一で向かい合ったその状況から、『不意を討つ』。

言わば『正々堂々と騙す』。

それが《新陰一刀流》の、根幹。

まあ全部初音さんの受け売りだけど。

当然そんな死合いで色仕掛けなどは通用しないが、そんな歪んだ

武術を学んでいるのだから、そのくらいの発想は余裕で出てくる筈だ。

だから、新陰一刀流を習っているとされた時点で、俺は警戒すべきだったのだ。

いや、警戒すべき、だったのだろうか。

警戒しろという方が無理な話だ。

だって、来夢ちゃんが俺を襲う事に何の意味があるのか、全くわからない。

現に今監禁されているが、これがどんな目的に置いてなされているのか、俺にはほとんど見当がつかない。

色仕掛けしてまで、俺を監禁したかった、理由。

——ファーストキス、だったのになあ。

どうでもいい思考が頭を付くが、全く考えがまとまらない状況なので、しょうがないのかもしれない。

昨日の映像が、蘇る。

彼女の身体の、唇の、柔らかさが思い出される。

電流が走るような、蟲惑的なキス。

「ファーストキスは、涙の味でした、ってか。その直後に本当に電

流流されて失神してるんだから、笑えるな」

と、いうか色仕掛けにやられるってなんだよそれ。
よくよく思い出すと、凄く恥ずかしい気がする。

昭和の漫画ぐらいじゃないか、女の色香にやられる男って。

時代錯誤。

助平。

うわ、如何しよう。考えれば考えるほど、顔から火が出るくらい
恥ずかしい。

可能なら、枕に顔を埋めて、足をじたばたさせたい。

黒歴史だ。確実にこれは俺の黒歴史になる。

出来るなら、時間を元に戻したい。

そんな事は無理だとわかってるけど、時よ戻れと叫びたくなる。

————— 待て、よ。

出来るじゃん。

確か、『十六日の朝』の時点でのセーブデータを取っておいた筈
だ。

慌ててズボンのポケットをまさぐる。オイルライターを取り出す。
携帯は見当たらないが、ライターは盗られていなかったようだ。

ライターは、あった。あとは、データだ。

急いで俺は胸ポケットに手をつっ込んだ、が。

【ぼうけんのしょ】は、
無かった。

気付かれた——のか。

一瞬だけ頭を過ぎる考えを否定する。

いや、違う。そうじゃない。アレは知らない人が見たって何を
するもののかはさっぱり解からない筈だ。

それに——財布を確かめると、財布の方の白紙の【ぼうけんの
しよ】はそのまま残っていた。

つまり、月森に倒された時、あの時に落としてしまった。そう考
えるのが、自然だ。

原因が判っても、意味が無い。

と、言うより『十六日のデータ』を無くした事は、かなり致命的、
ではないだろうか。

つまり、昨日の夜に誰かが殺されていたとしても、もう、戻る事
が出来ないのだ。

汗が、伝う。

暑いから掻いているのではない。冷や汗、という物だった。
嫌な想像が、頭から離れない。

もし、狙われたのが、日比野だったら——

頭を振る。そんな訳が無いと自分に言い聞かせる。

と、違和感。

漠然と、違和感を感じる。

何故、彼女が俺を監禁したのか。

ではない。

そうではなく――

目の前に置かれている紙袋が目につく。中身は確認したが、アンパンとコーヒ―牛乳。それから氷枕が入っていた。

確認した直後は毒でも入っているのでは、と警戒して手をつけなかったが、ちよつと考えればそんな回りくどい事をしなくても、俺が失神している間に何千回でも殺せたと開きなおる。

腹が減ったから、ネガティブな思考になるのだろう。

取り敢えずは好意に甘えて、腹ごしらえをさせて頂く事にする。

袋を破り、アンパンに噛り付く。ふわふわの生地と、餡の甘みが、俺の舌の上で絡まる。

考えてみれば丸一日食事をしていなかった。スタバでキャラメルマキアートを飲んだだけだ。

ああ、美味しい。

食事をして人心地付いた俺の耳に、玄関のドアを開ける音が届く。如何やらこの部屋の主がご帰宅らしい。

次第に足音が此方に近づき、ユニットバスのドアが開く。

そこには俺の予想通り、小鳥遊来夢が立っていた。

「すみませんでした」

いきなり色仕掛けた上に監禁騒動。まあ、そりゃされたほうは普通に通に頭に来る訳で。

で、相手に不快な思いをさせた以上、謝罪するのは自然の流れで。彼女が深く頭を下げているのは、自然の流れなの、だが。

俺は困惑していた。

来夢ちゃんは帰ってくるなり、俺の手錠を外し、謝ってきたのだ。困惑した、というより拍子抜けしたのかもしれない。

何と言っているのか、解からなくなった。俺はてっきりこのあと、何か、拷問のような事をされるのではないかと、何の根拠も無くそう考えていたのだ。まさか謝罪されるとは、予想だにしていけない。

「えっと」

俺は頬を少し掻くと、言った。

「もういいから、取り敢えず、顔を上げて貰えるかな」

頭を見せるよう促すと、彼女は素直に此方を向く。

来夢ちゃんの部屋。俺はソファに座り、彼女が床に正座をした状態で向かい合う。

気まずい。

とても気まずい。

いくら策略とは言え、あんな姿を見せられたら、うん。その、なんだろう。良くは解からないけど、なんだか、とても、まっすぐ向き合えない。

「あー、学校、無断欠席になっちゃったかな」だから何となく、そんな事を呟いた。

「あ、それは大丈夫です。先生に風邪だと伝えておきましたから」

「いや、皆勤賞、狙ってて」

「本当に、申し訳ございませんでした」

もう一度、彼女が深々と頭を垂れる。

うーん。何と言うか、彼女の謝罪は誠意が伝わってこない。

と、言うよりも来夢ちゃんは全体的に、感情を表に出してこない気がする。いつも無表情だし。

もうちょっと人間味が出てくれば、凄く楽しく学校生活が送れるだろうに、と他人事ながら心配する。

って何を考えているんだろうか。彼女の人生の話は彼女に任せればいいのだ。

いけない。このところ立て続けに非日常的な事が起こってるから、「同級生に監禁される」ぐらい普通に思えてきてしまった。

全然普通じゃないのに。

「あの、さ。ひとつ、訊いていいかな」

「あ、はい。どうぞ」

質問の許可が出たので、最大の疑問を投げ掛ける。

「如何して、こんな事をしたの」

その質問に、彼女は少しだけ顔を歪ませて、

「貴方を、その、犯人だと思って」そう、言った。

「俺を、犯人って、何の犯人だい」

「アヤさんを、殺した」

アヤさん。誰だろう。

「アヤさんって、誰の事」

「あの、一昨日銃で撃たれて、亡くなった」

ああ、彼女の事、か。

「えっと」少し迷ったが、訊く事にした「知り合い、だったの」

「――はい」

何となく、その一言で。

『アヤさん』が彼女にとって、掛替えの無い人だったのだと、感じた。

「でも、如何して俺が犯人だと思ったわけ」質問を続ける。

ひとつ、と言いながらふたつ目だが、気にしない。

「あの」来夢ちゃんは少し言い淀んだが、続けてくれた。「昨日、一緒に帰っているときに、貴方仰いましたよね」

「何を」

「私が如何して送ってくれるのか、尋ねたとき『最近は何事だからだよ。連続殺人犯がいるから』って」

「――嗚呼、成る程」

それは、言ったかもしれない。だとしたら、致命的なケアレスミスだ。時間が戻って彼女が生きているのだから、まだその時は『連続殺人犯』ではなかったのに。

「最初は、聞き間違いかと思いましたけど、妙に確信的――そうである事が当然のように言ったから、てっきり」

そうだ。その時は俺の主観時間では『アイツ』は連続殺人犯だったから、そう言った。

「だったら」そうすると新しい疑問が生まれる。「如何して、俺を解放するんだい」

そうだ。その理論だったらまだ俺の疑惑は晴れていない、筈だ。にも関わらず、こうして手錠の拘束から開放した、という事、は。まさか――

「今日、新しい被害者が出ました」

予想通り。

「意識がありませんでしたから、御存じないかとは思いますが、今日は学校が三時間遅れで」

雪でも、台風でもないのに。

「朝、ホームルームで谷嶋原先生が、報告したんです」

それは、つまり。

「私たちの学校の生徒が、殺された、と」

二十四章 『セントエルモの火』

口の中が乾き、舌が口腔に張り付く。

声は出し辛かったが、決死の思いで言葉を紡ぎ出す。

「だ、誰が――」

まさか、まさか、まさかまさかまさか。

先ほどの、悪いイメージが抜け切らない。誰だ、誰なんだ。

「判りません」そんな俺の様子に気付かないのか、彼女は淡々と答える。「私たちの学年ではなく、一年生らしいのですが」

ほっと、した。

殺されたのが、日比野では、猫恋では、飛田では、氷室では、なかった事に。

だけど、直ぐにそんな自分の思考回路に吐き気を催す。

――知り合いじゃなければ、死んでもいいのか。

俺が、《ロード》した事によって、殺された。

《ロード》する前は生きていた。

それは、つまり。

俺が、殺したようなものだろう。

にも関わらず、俺は、ほっとしている。

俺は、自分が想像するよりも、ずっと醜い、人間だった。いつか、ノナさんに言われた科白が、蘇る。

——「如何して、そんなに良い人間の振りをするのですか」

頭を振る。

大きく、振る。

違う。今は自己嫌悪に浸っている場合では、ない。

これからだ。これから如何、動くか。

勿論犯人の犯行がコレで終わり、というのならば、何もする必要が無い。

しかし、多分、それは有り得ない。

なんの根拠も無いが、そう、漠然と感じる。

『ヤツ』はまた、殺す。

きつと、捕まるまで、繰り返す。

だから、終わらせなければ、ならない。

他の誰でもなく、俺が。

時間を戻し、来夢ちゃんを救い、見知らぬ誰かを殺した、この、俺が。

「ところで」

呼びかけられる声で、現実に取り戻される。来夢ちゃんが俺に正対する、足を崩した時に白くむっちりとした太腿が目に入るが、見ないようにする。こんな時にでも反応するって、どれだけ助平なんだ、俺は。

彼女は此方を見つめて、問い掛けてくる。

「如何して、貴方は『連続殺人犯』だと、断定したのですか」

それは時間を《ロード》して、彼女自身が殺されているからなのだが、如何すれば信じてもらえるだろうか。

俺はその質問に答えようとして――――

――――また、違和感。

ここ最近頻繁に感じるようになった、それ。

今回は曖昧模糊としたそれを、推し進めて考える。

小鳥遊来夢は俺が犯人を『連続殺人犯』だと断定した口調で告げ
たから、俺を犯人だと思い込んだ。

断定した口調。

そうであるのが当然のニュアンス。

そこから誤解が生じた。

俺がもう既に誰かを殺したから『連続』だと断定した。そう思われたのだ。

じゃあ、俺は何故『連続殺人犯だと』確信したのだろうか。

既に《ロード》で来夢ちゃんが殺されたのを知っていたからだ。

あ、そうか。

わかった、気がする。

いや、その表現は正確ではない。俺は、『わかっていた』。だが、俺の思いついた仮説の根拠が薄く、証拠も無い。『偶然』の一言で片付けられるものだったのだ。他の解答が浮かばないから、それが唯一解に見えたんだけど、そう思っていた。

だけど、仮説が無数にあり、全ての仮説が同一の事象を指し示していた場合、また、それらを否定する根拠が『偶然』だけだったのなら、逆に『偶然』で片付けるのが難しくなる。

例えば廊下のある場所で、太郎君が転んだとする。それは、『偶然』で片付く。

だが、次郎君が同じ場所で転び、三郎君も同じ場所で転んだ。それぞれは『偶然』で片付くが、この三つの事柄がほぼ同時に起こったならば、逆に『太郎君が偶々転び、次に次郎君が同じ場所で偶々転び、最後に三郎君が偶々転んだ』というのは、少し苦しい。

『廊下が濡れていた』等の明確な理由があって然るべきだ。

だけど、足りない。

俺の中では確信へと変わったそれも、証拠が無ければ意味が無い。そう思っていた。

今の、今までは。

けれど、今俺の目の前に居る来夢ちゃん。彼女の協力があれば、『証拠を作る』かもしれない。

一種の博打。

成功しないかもしれない。

でも、警察の捜査をのんびりと待ってはいられない。そんな間に日比野が牙を向けられるかも知れない。それを防ぐために毎日毎日《セーブ》して殺人犯の影に怯え、知り合いが死ぬたびに《ロード》を繰り返す。そんな生活は真っ平御免だ。そもそも俺が殺されたら《ロード》するも何も無い。そこで終わりだ。

だから、終わりにしよう。

俺の日常を奪い、壊したこの事件に、幕を降ろそう。

俺はソファの前に座り、此方を見つめる来夢ちゃんに目をやる。まずは、彼女に協力を仰がなくてはならない。だけど、多分、全部話せば協力してくれるはずだ。

迂闊とは言え発言一つでクラスメイトを監禁する。それだけの大事をやる理由が彼女の言う『アヤさん』にはあったのだ。

その感情を、利用させてもらうように気がひけるが、兎に角。

だから俺は来夢ちゃんの目を、彼女と同じくらい真摯に見つめ返して、こう、切り出した。

「説明に割り箸を使いたいんだけど、用意できるかな——」

幕間『D4C』

失敗した。

俺は夜の街を失踪する。

二人目を『人形』にした翌晩。俺は三人目の標的をしぼり、二人目と同じように近づき、スタンロッドで意識を奪おうとしたのだが、直前に逃げられたのだ。

迂闊。何処で気取られた。

そんな素振りは少しも見せなかった、筈だ。

いや、違う。今はそんな事を考えている場合ではない。
失敗した。その事実を限りなく零に近づけること。

アイツに追いつき、今度こそ確実に、殺す。

それが一番大事な事だ。

夜の街。

殺人事件が話題になっているからか、大通りを外れば人通りは殆ど、無い。

この追いかけてこを他人に見られなくてすむのは、好都合だ。

しかし、足が速い。

俺はもうアイツほど若くは無いとはいえ、こっちは男、相手は女。
にもかかわらず、何時まで経っても距離が縮まらない。

焦り始める。

焦燥が俺を、襲う。

如何する。体力はどれくらい、もつ。

と、彼女が路地裏の細い道を選択した。
しめた。

この区画に無数にある、路地裏。

大企業を誘致しようと画策し、乱立したビルとビルの間。
誘致に失敗し、殆どが空きビルとなっているが。

兎に角、その道は————行き止まりだ。

以前下見に来たことから、俺は知っている。

やった。やった、やった。

勝った。俺の勝ちだ。

俺は息を切らしながらも、速度をそのままに獲物を路地裏へと追
い込む。

曲がり角の手前、速度を上げる。

と、そこで足を引っ掛け、無様に転んでしまった。

歳なのか、何も無いところで転ぶとは。

手からスタンロッドが離れ、回転しながら滑っていく。

だけど、結果的には、転んだ事は僥倖だった。

何故なら、倒れ込む前の俺の移動する軌道上に、
曲がり角の死角から、

スタンガンが、突き出されていたから。

連続で金属を打ち鳴らすような音が響き、

火花が、散る。

スタンガンを突き出した『そいつ』は、俺がそれを躲した事を驚いていたようだ。

俺だって驚いた。

転んで避けられた事もだが、何より、『そいつ』が居た事に、だ。

如何いう事だ。

頭は混乱状態になりながらも、俺は『そいつ』から距離を取る。

「あー、えっと」

『そいつ』は、頭を掻きながら、少し恥ずかしそうにしている。まさか外れるとは思わなかったのだろう。

街灯が照らし、そいつの姿を露にする。

学校指定の白いセーターにスラックス。

俺はそいつに見覚えが、あった。

「時田——司」

そう、今日学校を休んだはずの、生徒の姿だ。

時田はこちらを一瞥すると、ゆっくりと、言った。

「高校生に手を出したら犯罪ですよ、谷嶋原先生」

二十五章『終人』

俺はスタンガンを片手に谷嶋原先生と向かい合う。当然の事ながら彼は俺が待ち伏せていた事に驚いているみたいだ。

「お前、何で――」言葉に出来ない、といった様子で谷嶋原が呟く。

その言葉を聞き流し、俺は路上に転がるスタンロッドを一瞥する。恐らく彼が次を取る行動は、それを取りに行く事だろうと思ったからだ。スタンロッドの他にも幾つか凶器を持っているかもしれないが、刃物程度なら刺さり所にさえ気をつければ、俺のスタンガンの方が有効だ。

出会い頭の不意打ち。先制攻撃が外れたのは、俺にとっても予想外だった。

俺はあの後、谷嶋原が犯人だと、来夢ちゃんに説明し、そして協力してもらい、彼を罠に嵌めた。

言うならば、囮作戦だ。

来夢ちゃんが俺のいう事を信用してくれるか、谷嶋原が罠にかかってくれるか等、不確定要素が多すぎて、立てた時点ではおおよそ策と呼べるほどの物ではなかったが、兎に角、今この時点では八割方成功と言える。

本当はさっきの初手で彼の意識を奪い、来夢ちゃんが襲われたと警察に通報すれば、それで終わったのだが――万事上手く事が運ぶほど、甘くはなかった訳だ。

「何で、判った」谷嶋原が、俺に問う。

「何をですか」俺は惚ける。

「巫山戯るなよ」

彼は此方をぎりりと睨みつける。視線だけで俺を殺そうとしているかのようだ。

よく考えれば、もうこの時点で彼の勝ちは、無い。来夢ちゃんを逃がしてしまった事で、通報されるのは間違いなく、そしてピンポイントで取り調べされれば、連続殺人についても捜査の手は及ぶ。

だから俺の策は殆ど成功したと言っても良い。

「俺が、殺人犯だって事にだよ」

「そうだったんですか、知らなかったな」

「糞が。よく言うぜ。態々こんな罠を張ってまで俺を確保しようとした癖に」

「嫌だなあ。偶々ですよ、偶々」

「猿芝居は止める。何処で気付いたんだ」

「言っても、理解できないと思いますよ」

彼は、その言葉に気分を害したようだ。

「舐められたモンだ」

別に彼を低く見たわけではない。彼が犯人だと気付いたのは、『時間を戻す前』の事だから、彼は身に覚えの無いところで墓穴を掘っていた事になる。だから理解は出来ないだろう。そういう意味での発言だったのだ。

「大人を、舐めるなよ、餓鬼が。もう俺は終わりだ。だから、時田、お前だけは、殺す。道連れにしてやる。――気付いた時点でさっさと警察に相談してれば死なずに済んだのにな。探偵ゴッコなんざやってるから、火傷するんだ」

言って、彼は構える。

だから証拠は無いし、今の時間では根拠も無い。だから態々こんな手の込んだ真似をしたのに。

まあ、教えないけど。

「ところで時田、一つだけ訊かせろ。小鳥遊は」

彼はそこで言葉を止めると、走り出した。

不意打ち——しかし、用心していれば、それ程効果は無い。走り出した方向が、予想通り、スタンロッドのところに向かっていたからだ。

少し遅れて俺も走り出す。この距離なら俺の方が先に到達できる。

そう思った矢先、谷嶋原が方向転換した。

俺の方に、向けて。

懷に手を入れ、何かを振り抜く——ナイフ——だろうか。

俺は咄嗟に身を引いてそれを躲す。十分、十二分に距離を取り、射程距離の外に出る。そしてそのままスタンロッドを奪う——筈だった。

衝撃。

俺は、地面に倒れ込んだ。

何を——された——。

頭部への打撃が、俺の平衡感覚を、奪う。

へたり込んだ俺を尻目に、谷嶋原は悠然とスタンロッドを拾う。

俺の目は、奴の右手に釘付けになる。

如何いう、事だ——。

彼の右手には、金属バットが、握られていた。

成る程、さっきの距離はナイフの射程からは十分離れていたが、金属バットならば、余裕で仕留められる、距離だ。

いや、いや、いや。

納得しかけたが、それはおかしい。

奴は、バットを、懷から、出した。

それは、おかしい。

谷嶋原は学校の帰りなのだろう、スーツ姿だ。スーツの内ポケットに、金属バットが入る訳が無い。

仕込んでいたとして、そんな長物を取り付けた洋服を着て、走り回れる訳が無い。

如何いう、事だ。

脳内を疑問が走り抜けるが、今はそんな事を気にしている場合ではない。

「形勢逆転、だな」

谷嶋原が、顔面に笑みを貼り付けて、近づいてくる。
不味い。

咄嗟に立ち上がる。

奴の両手の武器の射程は、俺のスタンガンのそれを、遙かに凌駕する。

「何処から――」

「何処からバットを出したか、知りたいか」

俺の質問を遮って、奴が言う。

「教えないよ、少年漫画じゃないんだ。自分の事を饒舌に語るなんて、しない。冥土の土産に教えても、やらない」

考える。奴は両手に武器を持っているが、一流の武人でもない限り、二刀流は却って弱くなる。ルール上剣道では二刀流が認められているが、滅多に二刀流の剣士が居ないのが、その証明だ。だから、逆に、奴が武器に頼ってくれば、戦い易くなる。

俺は後ずさりし、谷嶋原から距離を取った。

スタンロッドと金属バットの射程から離れて、相手から仕掛けてくるのを待つ事にする。

「まあ一言だけ、教えてやるなら———」

そう思った途端、奴は金属バットを『手放した』。それだけならまだしも、スタンロッドも、『手放した』。

二つの凶器が、地面に落ちる。

再び、理解不能。

徒手空拳に、自信があるのか——。

だが、そうでは無かった。

奴は、もう一度スーツの内側に手を入れると、

「《物品収集》^{コレクト}。それが俺の授かった、道具だ」

其処から、銃を、取り出した。

銃。

テレビや映画。そういった場面でしか見た事の無い、兇器。

思考が、止まる。

乾いた、音。

巨大な、見えない拳で殴られたような衝撃が、右肩に走る。

俺は跳ね飛ばされて、路面に転がった。

「スナイパートライアングルって、知っているか」
そんな事を呟きながら、谷嶋原が撃鉄を上げる。

馬鹿か、俺は。

最初の殺人が『銃殺』だった時点で、こいつが銃を持っているのは予想できた——いや、そんな曖昧な状態じゃない。予想していた。

だからこそ俺は初手でスタンガンの不意打ちをしたのだ。銃を、使わせない為に。（無論相手が銃を持ってなくとも、不意打ちが戦闘において最強の戦略なのは言うまでもないが）

にも関わらず、俺は『距離を取ってしまった』スタンロッドや金属バットに気を取られ、最大にして最凶の武器を、使わせてしまった。

今なら解かる。

奴がスタンロッドを取りに走ったのも、金属バットで此方を牽制したのも、この展開に持っていくための、俺に距離を取らせる為の——ブラフだった。銃を取り出す際に、また、それを構える際に、

標的が近過ぎると、奪われてしまう危険性があるから。だから長物をちらつかせて、俺を誘導した。

頭が回らない。

俺には喧嘩の、戦闘の経験が、圧倒的に足りない過ぎた。

だがもう遅い。

銃を使わしてしまったのは最悪の失策。言い訳しようのない悪手だ。

「スナイパートライアングル————狙撃手がヘッドショットが難しい時に狙う、第二の急所なんだけどな。首の付け根から、両胸を結んだ三角形の事を言うんだ」

ゆっくりと、奴が近づく。

弾丸を外さない、けれど俺が銃を奪いに飛び掛るには遠い、絶妙な距離まで。

「其処には肺やら、肺動脈、心臓は勿論、大事な臓器や神経、血管が沢山、ある。運動を司る神経系の小脳や脳幹とは違い、撃たれて即死って訳じゃあないが、まず死ぬ」

終わった。

けれど、まあ、いいか。こいつは確実に捕まる。

夏休みの宿題の計画さえ碌に実行できなかった俺にしては、今回の策のこの結果は上等と言えるだろう。

これで、日比野を、守れたの、かな。

「で、此処からが重要なんだが、スナイパートライアングルの恐ろしい所はな、即死じゃないにも関わらず、『反撃出来ない』んだ」

右肩が、熱い。

「普通心臓を撃たれようが、人間はしぶといから、十秒弱は活動できる。その間に反撃を受けて死んでいった兵士はそれこそ掃いて捨てるほど、いる。鼬の最後っ屁みたいなもんだな」

走馬灯、は流れないのか。

「ヘッドショットにしたって、キチンと運動を司る小脳や脳幹をぶち抜かないと、反撃をされる恐れはほんの僅かだが、ある。にも関わらず、スナイパートライアングルは、反撃を許さないんだ――『痛み』でな」

動けない。

撃たれた部分は右肩だけだが、動けなかった。

この感覚は、以前にも味わった事が、あった。

「胸骨にヒットさせる事により、砕けた骨と弾丸が肋骨の中で跳ね返り、肺や肝臓に、脾臓。その他諸々の臓器を傷つける」

そうだ。ノナさんと出会った時、引ったくり犯に相対した、あの時だ。

あの時は惣菜屋の親父さんが助けてくれたが、今回は無理だ。

だったら、行動を起こすしかない。確率は低くても、座して死を待つ訳には、行かない。

「その時の痛みが、想像を絶するみたいでな」

やるしかない。

俺は奴の科白が終わる前に立ち上がろうとする。

銃声。

再び地面に倒れ付した。
今度は左の太腿、だ。

「人の話は最後まで聴けよ、時田。まだ慌てるような時間じゃないだろ」

肩の方の出血が、酷くなってきた。

脳内麻薬の影響か、痛みはあまり感じないが、意識が薄れていく気がする。

「まあ、兎に角、この世に二つと無い苦しみらしいんだ。絶命までの時間は内臓の損傷具合によりまちまちで、数分か、数秒か、それはわからないが――」

奴が、銃を構える。

「――苦しんで、死」

次の瞬間、目の前で起こった出来事を、俺は暫く理解出来なかった。

奴の構えたりボルバー。

それが、グリップの部分と銃口の部分を別々として、ぱっくり二つに、

割れて、いた。

「ね」

目の前、より正確にいうならば、谷嶋原の目の前に『現れた』のは、来夢ちゃんだった。

数メートル離れた俺でさえ、理解が追いつくのに少し時間が掛かったのだから、谷嶋原は何が起こったのか、本当に理解出来なかったかもしれない。

この路地裏は空きビルと空きビルに挟まれている。
彼女は空きビルの二階から、飛び降りてきたのだ。

逆手に、ナイフを持って。

豪華な装飾を施された其れは、ナイフ、と言うよりもサイズの小さい剣のような形状をしていたが。

着地の衝撃を和らげる為、足を大きく広げ、ナイフを持っていないほうの手も地面につけるような体勢だった。

綺麗な長い黒髪が、扇のように広がり、
そこから、

一瞬。

一閃。

『銃を切った』ナイフの返し刃で、谷嶋原の胴体を左下から右上にかけて、袈裟斬りにした—————

どさり、と。

谷嶋原は、その場に崩れ落ちた。

決着は、あっけなかった。

来夢ちゃんが振り返り、此方に向かって歩いてくる。
平手が、俺の頬に炸裂する。

失いかけていた意識が、強引に引き戻される。

「寝たら駄目」

彼女が此方を睨みつける。

その瞳が、少し濡れていた気がした。

暗くて、良くは判らなかつたけど。

と、

「てれってってー、聖剣は、レベルアップー」

不意に、明るい男の声が、路地裏に響き渡る。

驚いて、そちらを見つめる。

一人の男が、立っていた。

拍手をしながら、此方に歩いてくる。

青を基調とした、一部分が少し尖ったような水玉柄のスーツ。胸元は大きく肌蹴ているが、そのスーツには様々な場所に、『ジツパー』が、付いていた。それはズボン等についているものとは違い、かなり大きい。

髪形はおかっぱのようで――。

その男の、格好は、

有り体に言えば、コスプレだった。

終章『陽だまりの詩』

二週間が、経った。

世間を震撼させた殺人犯が、実は地元の高校の教師だったという事実はそれなりにセンセーショナルだったようで、連日のワイドショーは殆どと言っているほどこの事件の顛末を報道している。

とはいえ、また別の大きな事件が起こったりすれば、いずれこのニュースも忘れ去れるのだろうか。

病院のベットに横たわりながら、俺はテレビのスイッチを消した。谷嶋原の撃った弾丸は、俺の肩に結構深刻なダメージを与えたらしい。もう少しで右腕が動かなくなったとかならないとか。失った血液の量が多くて生死の境を彷徨ったとか、ふらりと立ち寄った無免許の天才外科医の御蔭で完治しそうだ、とか。そんな嘘か真か判らないような説明を看護師さんから受けた。まあ、流石に三つ目は嘘だと思うけど。

銃ってやっぱり大変な凶器だな、と撃たれてまじまじと思う。銃で撃たれるなんて、人生で初めての経験だったが、出来ればもう二度としたくない。

二週間のうちで、色々な人がお見舞いに来てくれた。

まずは氷室、猫恋、飛田。

氷室は「溜まってんだろっ」とか爽やかな笑顔を浮かべながらエロ本を土産に持ってきてやった。内容は、うん、物凄い内容のプレイで、氷室は一体俺の事を如何思っているのか、小一時間ほど問い詰めたいレベルの凄まじさだった。しかし貰った物はしょうがないので、見舞いに持ってきた藤河原書店の袋に入れたまま、他のお見舞い品の中にカモフラージュして置いてある。——いや、別に気

に入ったとかではなくて、折角だし、勿体無いからであって、決して俺の趣味に合った訳ではない。そう、断じてそう言う訳ではないのだ。

猫恋と飛田は二人で一緒に来た。俺が「日比野は一緒じゃないのか」と訊くと、「そんな野暮な事はしないよー」と返された。どの辺りが野暮なのだろう、と不思議に思ったが、それは訊かなかった。猫恋の土産物はフルーツの盛り合わせだった。フルーツは俺一人ではとても食べきれない量で、メロンやらマスカットやら、やたら高級そうなものが盛り合わさっていた。ぐぬぬ、流石お嬢様。飛田は老舗の和菓子屋の羊羹。「煎茶は無いのかい」と若干ボケて訊いたら、「甘えるな」と素で返された。ちよっと落ち込んだ。

次に日比野。

彼女は俺の意識が戻るなり「馬鹿っ」と大きな声で叫び、病室を出て行った。まあその様子から、心配させてしまったんだろうと思いい、胸が痛んだ気もしたが、次の日から普通にお見舞いにやって来た。

意識が戻った時に傍にいた、という事は、当然意識が戻る前にずっと居た訳であって、普通、親族以外は面会謝絶だとは思うのだが、きつと峰子さんが氣を使って、何か病院側を説得したのかもしれない。

そうなるとやっぱり相当日比野を心配させた事になり、かなり罪悪感らしきものが心に芽生えたのだが、翌日あまりにも普通に現れたから、拍子抜けしてしまった。一応謝ってはみたのだが、「別に何も謝ることは無いだろう」と逆に不思議そうな顔をされてしまった。ちなみに彼女は俺の家から《ガイスター》を持ってきて、毎日俺と猫恋のくれた果物を賭けて勝負をしていく。勿論俺の連戦連敗で、昨日は高級なマスカットを獲られた。俺の目の前でさぞ美味しそうにマスカットを頬張るのだ。ちよっと泣いた。やっぱり怒ってるのかもしれない。

峰子さんと恵理香も毎日来た。

彼女は仕事のシフトを昼の部に移してもらったらしく、朝恵理香を俺に預け、夜に取りに来る、といった変則的な生活を続けている。最初は怒られるかとも思ったが、そんな事は無く、極めて普段と同じ様子だった。

最後に、来夢ちゃん。

彼女とは二週間前、谷嶋原との一件の夜から直接会っては居ない。ただ、看護士さんが俺に手紙だと言って、今日の日付——五月二日に見舞いに来るとの旨が書かれたメモを渡してくれた。

ドアをノックする音が病室に響く。

この病室は四人部屋だが、今は俺ひとりしか居ない。元々は二人しか居なかったのだが、もう一人は昨日退院していった。

続いてドアが開き、入ってきたのは来夢ちゃんと——白装束の男だった。

「こんにちは」

「ああ、うん。こんにちは」来夢ちゃんに挨拶を返すも、俺の目は後ろの男に釘付けだった。

白い、着物に、狐のお面を被っている。尤も狐面は斜めにかけて自分の顔は見えるようにしてはいるが、その姿は、まるで。

「やあ、はじめまして——いや、二回目かな。でも君、初対面の時直ぐに気絶しちゃったから、覚えていないんじゃないかなと思って。ああ、自己紹介が遅れたね。僕の事は、『うみねこ』、とも呼んでくれ」

気さくな物言いで自己紹介をする、うみねこ、と名乗る男。端正な顔立ちだ。氷室と同じレベルと言っても過言ではない。良く見ると、瞳が青い。

兎も角、名乗られたら名乗り返すのが礼儀だろう。

「えっと、俺は——」

「知ってるよ。時田司君だろう」

自己紹介を遮られて、先回りされた。ならば、

「その、格好は」

「ああ、これかい。コスプレは趣味だ。気にしなくて良い」

やはりコスプレか。コスプレなのか。よくそんな格好で此処までこれたな。しかし初対面の時といい、コスプレのチョイスが渋過ぎる気がする。

と、益体も無い事を考えていると、うみねこが話を切り出した。

「さて、じゃあ自己紹介も済んだところで、【アイテム】の最後の使い方について、説明をさせてもらおうかな」

「司君はまあ、薄々感づいているとは思うけど、僕は『天使』だ。

君に【ぼうけんのしょ】を与えたノナちゃんの、同業者だと思ってもらって良い」

「ノナさんの、同業者」

そう言われれば、そう見えない事も無いかもしれない。

「そう。本当は君はノナちゃんから説明を受けるのが道理なんだけど――、彼女、面倒臭がり屋なところがあるから、どうせならって事で君達二人には、一遍に僕から説明する事になったんだ。本当はもっと早く来たかったんだけど、何分あまり他人に聞かれたくない話でね。今日まで待ってもらっていた訳だ」

成る程。俺が病室に一人になるタイミングを見計らっていたって事か。

「念には念を入れて、来夢ちゃんも今日までお見舞いは自粛して貰っていた。――大変だったんだよ、彼女、早く君のお見舞いに行きた」

「うみねこ。下らない前置きはいいですから、さっさと説明をしてください」

うみねこの言葉を来夢ちゃんが遮る。彼は「ああ、ごめんごめん」

と謝罪すると、説明を再開した。

「何から話そうか——そうだな、うん。まあそんなに難しい話じゃないんだ。時田君、君の【ぼうけんのしょ】——あるいは来夢ちゃん、君の【アイギスの楯】みたいな道具が、この街には沢山ある。ただそれだけの事なんだ」

「人智を超えた神様の道具——【道具】^{ツール} 【道具】^{アイテム} 【道具】^{ウェポン} 【道具】^{アーティファクト}

【道具】^{オーバーツ}——呼び方に意味は無いから、どう呼んでくれても構わないけど。それらの存在とその道具が持つ効果はもうそれぞれ君達は体験済みだから、いまさら言う必要は無いよね」

驚いた。彼が自分を天使だと名乗ったあたりで想像はついたとはいえ、まさか来夢ちゃんも俺と同じような【道具】を持っていたとは思わなかった。

しかし、よく思い出してみれば谷嶋原を捕まえた日、俺は来夢ちゃんの前で【ぼうけんのしょ】をノナさんと同じように『実演』したのだが、その時彼女はさほど抵抗無く事実を受け入れていたように見えた。ただ単に俺よりもそういう事態に対処する能力が高いのかと思っていたが、既に【道具】を持っていたのもその一因になっていたのかもしれない。

（ついでだがその時に、記憶の継承欄に俺以外の人間がサインした場合も同様に記憶を引き継げる事が確認された）

「上位存在。まあ神様みたいなモノが実験的に配布したっていうの

も説明したと思うけど、まあその実験の対象が君たち一人だけではなく、大勢で行われていた、っていう事なんだけどね」

成る程。『実験』ならばサンプルは多い方が良いのだろう。

「大勢って言うのは具体的には何人なんですか」

「百八人」

如何なのだろう。それが多いのか少ないのかは、ピンと来ない。神様が行った壮大な実験———にしては若干少ない気がする。

「尤も、もう一つはなくなったから、今は百七つだし、まだ配布していない道具もあるから、今現在の人数は五十人前後だと思うよ」
うみねこが情報を捕捉する。

「自分の時のケースを思い出してもらおうと解かり易いけど、僕達『天使』がそれぞれ一人ずつ、道具についてのチュートリアルみたいなものを行って、それから譲渡するから、少し時間が掛かるんだよ」
彼は其処で一つ溜息を吐く。

「それぞれの道具は異なった性質を持つから、全部違う効果を持つてる。例えば司君なら《時間逆行》^{リバース}だし、来夢ちゃんなら———つてこれは止めておこうか」

其処で意地悪そうな目線を来夢ちゃんに向ける。それに対して彼女は「構いません」とだけ返した。

「そう、じゃあ言うけど来夢ちゃんなら《^{デイスコネクション}相对切断》。それにあの教師、谷嶋原、だっけ、は《^{コレクション}物品収集》だね」

彼の説明を聞いていると、なんというか、こう、背筋の辺りがむず痒くなってきた。中学校の頃ノートに描いていた、異能バトル漫画を見せ付けられている気分だ。

「あの、なんでいちいち四文字熟語に振り仮名なんですか」

「えっ、だって、なんか格好良いじゃん」

新事実発覚。天使は、厨二病だった。

「それにしても、あいつ何が『少年漫画じゃない』だよ。べらべら

べらべら喋っちゃってさ、余裕で来夢ちゃんに不意を討たれて。冷静に迅速に、は闘争の基本じゃないか。『謙虚にふるまってさっさとどめを刺せ』ってウェカピポも言ってたし。——尤も今回は君に恐怖を与えるのが目的だったみたいだけど、そういうのは絶対に邪魔が入らない場所でしかやるべきじゃないね」

うみねこは二週間前の戦闘について見解を述べる。全く持ってたの通りなのだが、実行されていたら俺は生きてはいなかった。

「因みに彼の道具は【道具袋】って言ってね。RPGでよくある『てつのよろい99個とか如何やって持ってたんだよっ』っていう突っ込み、アレをモチーフにしているんだ」

随分と庶民的なモチーフだな、とは言わないで置く。

「物体を体積、質量、その他諸々の条件を無視して『保存』できるって代物さ。本物の銃だって簡単に持ち歩けるし、九州のトンコツラーメンだってホカホカのまま保存して、この街で好きな時に食べる事だって出来る」

堂々と声高にパクった科白を吐くな——と、言いたい衝動をぐっと堪える。

だが、今の説明で納得する。彼がスーツから金属バットなんて無茶苦茶な物を取り出せたのは、そういう道具を彼が保持していたからだったのだ。

「解かり易くスタンドで例えるならエニグマって所かな」

「堂々と声高にパクった科白を吐くな。しかもそれ娘の科白だろう確かっ」

敬語を忘れて思わず突っ込む。他にも四次元ポケットとか色々例えようがあるだろうに。アンタそれ言いたいがためにコスプレしてきたんじゃないだろうな。

「時田司、ツツコミ属性、と。メモメモ」

「その情報を如何使うんだよっ」

「やだなあ。だから実験だよ、実験」

「全然実験の全容は把握してないけど、多分俺の属性は関係ないん

じゃないかなっ」

「あの」漫才を続ける俺らに、来夢ちゃんが声を掛ける。「説明を、続けてもらえませんか」

「そうだね、うん、ゴメンゴメン。で、ここからが重要。君達も気になってたみたいだけど、【道具】に設定されている『Level』についてだよ」

それは確かに気になっていた。

「あれは単純に、その【道具】の持つ性能のレベルだと考えてくれて良い。大きくなればなる程、【道具】は便利になる」

つまり、俺の【ぼうけんのしょ】もこれ以上のバージョンアップが出来る、という事なのだろうか。色々と制約の多い道具だとは思っていたが、レベルの上昇を鑑みられて能力を抑制されている部分もあるのかもしれない。

「レベルを上げる方法は、二つ。一つ目は他人の【道具】を破壊する事。先日の来夢ちゃんの例がこのケースだね。谷嶋原の【道具袋】を破壊したから、【アイギスの楯】のレベルが上がったって事」

うみねこは人差し指を立てて、一つ目の条件を説明する。来夢ちゃんの道具——俺はよく知らないけど、恐らくはあのナイフ——が谷嶋原を一閃した時に、壊れたのだろう。多分。

だけど、ちょっと待て。レベルを上げる条件が、他人の【道具】を破壊する事だとは、随分物騒だな——

そして彼は、底意地の悪そうな笑みを浮かべ、中指を立てる。

「二つ目の条件。それは、【道具】を所有している人間——『所有者』を、殺す事」

一つ目の条件を物騒だとするなら、

二つ目の条件は凶悪だった。

「どちらのケースも、『所有者』の所有している道具全てのレベルが、1ずつ上昇する。後者のケースではそれに加え、殺した人間の持っていた道具も、自分の手に入るね」

しん、と。

病室全体の温度が、少し下がった気が、した。

恐らくは、錯覚だろうけど。

殺す。

レベルを上げる為に、他者を、殺す。

うみねこは「んじゃ、これで」と言っ、そのまま立ち上がる。

「ちょ、ちょっと、待ってくれ」

『もう説明は終わった』と言わんばかりのその態度に、俺は慌てる。

「如何したの。説明は終わったと思ったけど」

「えっと、その」俺は当然の疑問を口にする「本当に、それだけなのか」

何を訊きたいのか、良く解からない、そんな質問だった。

にも拘らず、

「————はあ。解かるよ、言いたい事」

俺のその疑問。突然の事で驚き、全く言葉の足りていない質問を、うみねこは直ぐに理解する。多分、俺がこういった質問をする事を見越していたのだろう。

「疑ってるみたいだけど、これで終わり。他には何も無いよ。えっと、随分前の仮面ライダーであつたみたいに、お互いに殺しあつて最後の一人の願い事が叶う、だとかそんな事は無い。あるいは最後の一人が魔界の王様になるとか、最後の一人に空白の才が与えられるとか、そんな事も一切無い。説明すべきシステムは、これで、終わり」

その言葉に俺は、少し安堵する。

レベルアップのための条件は悪意に満ちているが、それ以外にメリットがないのなら、積極的な————

「でもね」

うみねこは続ける。

「殺し合うよ、君達は、確実に。最後の一人になるまで殺し合う」

俺の安心を奪う、言葉。

「なん————」

「何でも何も、そうした方がいいからさ。唯でさえ人間の範疇を超えた道具。それを高レベルまで鍛え上げ、更には複数個所持出来たら、それこそ大袈裟でも何でもなく、王様にでもなれるかもしれないじゃないか」

「そんな————」

「そんな事は考えないってか。そりゃ君はそうだろうね、時田君。」

そうだろう、『特に君はそんな事を考えはしない』だろう。でもね、他人がそう考えないとは限らないだろう。百八人も居れば、そんな奴等はごまんと出てくるさ。そうでない奴も、そんな状況になった時、『やられる前にやる』って疑心暗鬼の末の自己防衛をする」

「――」

「何もこれは推測で言っている訳じゃない、経験則さ。この『実験』は過去に何度も繰り返されている。【道具】自体は時代と共に変化してきたけど、百八というこの数と、《性質》は変わらずに、何度も、何度も、何度も何度も繰り返されてきた。でもね、唯の一回だって殺し合いが起きなかった事は無い。欲望と、疑心の末、殺し合って来た」

「――」

「現に君だってそうじゃないかな。君は隣に居る来夢ちゃんが、どんな【道具】を持っているかは正確に把握していないよね。彼女は君の【道具】をデモンストレーションまで受けて完璧に理解しているにも関わらず。そんな状態で、君は、『彼女が絶対に自分に危害を加えない』って、信用できるかな――」

「――っ、出来る」

と、それまで立て板に水だったうみねこが、俺の返答を聞いて固まる。

固まって、暫くしたら震え出した。

如何やら、笑っているらしい。我慢できなかったのか、暫くすると声を出して、腹を抱えて笑い始めた。

「っははっ。なんだ、なんだ。あのノナちゃんが因果律を捻じ曲げてまで渡して、どんな人間かと思って来てみれば、甘いなんてレベルじゃない、危機管理がまるで出来ていないじゃないかっ」

突然の事態に、俺は何も言えなくなる。

「全く、こんな人間に入れ込むなんて、彼女を結構買い被りすぎていたかな。それとも、面倒臭がりが高じて、選定も適当にやったとか。有り得るな、本当に有り得るところが、笑えないよね」

一頻り笑い、収まってからうみねこは立ち上がる。

「まあ、君がいつ殺されても別に構わないけど、『逃げ隠れてれば大丈夫』なんて甘い考えはやめる事だね。――所有者同士っていうのは、どういう理由か正体を知らなくても知らず知らずのうちに引き合うんだ。結婚する相手の事を『運命の赤い糸で結ばれている』とかいうだろ。そんな風にいつか、どこかで出会うんだよ。敵か、友人か。バスの中で足を踏ん付けるやつか、引越してきた隣の住人とか、それはわからないけどね――まあ、僕のお勧めとしては、今のうちに【ぼうけんのしょ】を来夢ちゃんに渡しておくのが懸命だと思うよ。そうすればもうこの件には関わらずに済むし、来夢ちゃんが君を狙う理由も無くなるからね。――尤も、【道具】の魔力に魅せられた今、素直には渡せないと思うけど」

最後まで饒舌に、堂々と漫画から引用した文を残し、彼は病室を出て行った。

俺はそれに突っ込むことも、声を掛ける事も出来なかった。

ただ、自分が何かとんでもない事に巻き込まれているのだという事を、理解し始めた――。

うみねこが病室を去り、暫くの間、俺と来夢ちゃんは黙ったままだった。何を言えば良いのか、解からない。

「あ、あの」来夢ちゃんが声を掛けて来る。「傷の具合は、大丈夫ですか」

「ああ、うん。通りすがりの無免許医の御蔭で、なんとか」

看護士さんが教えてくれた情報をそのまま伝えてみるが、怪訝そうな顔をされた。それはそうだろう。まあ、無事だというニュアンスは伝わったようなので、「良かった」と言って安心してはくれたが。

あの、と彼女が話題を切り出す。

「ひとつ、訊きたい事があるんですけど」

「なんだい」

「何で谷嶋原先生が犯人だと判ったのですか」

――そこを訊いてきますか。

来夢ちゃんには【ぼうけんのしょ】の説明と実演をしたから、別に時間が戻る以前の話をする事は吝かではないのだが、如何せん谷嶋原が犯人だと気付く切っ掛けは、来夢ちゃんの死に起因している。時間を戻した事は言ったが、俺は来夢ちゃんに彼女が殺された事を説明はしていない。誰も自分が殺された話など、（それが例えば if であろうと）聞きたくは無いだろうと思ったからだ。

答えあぐねている俺を見かねたのか、彼女が続ける。

「あの、もう、私が殺された事はうみねこから聞かされて、知って

いますので、遠慮は、しなくても大丈夫です」

あの野郎。デリカシーという言葉を知らないのか——うん、知らなさそうだったな。

「そっか」

「そうなんです」

まあデリカシー云々は置いておいても、とてもじゃないが推理とはいえない代物だが。

しかし、考えてみれば彼女は何で俺がこの結論を出したのかという理由も聞かずに俺の策に乗ってくれたのだ。それは感謝すべき事だと思ふし、多分逆の立場だったら俺は乗ってはいなかったのだとすら思える。

そうすると、全部終わった後に説明する義務が俺にはあるのかもしれない。

「最初は、偶然だったんだ。君が殺された翌日、谷嶋原が朝のホームルームでね、『昨日、買い物帰りに殺された』って報告してて」

俺は自分の拙い推論を、訥々と話し出す。

「別にそれだけじゃ何の意味も無いけど、その日の帰りに、刑事に会ってね。——彼は、『来夢ちゃんの日撃証言はスタバが最後』みたいな事を漏らしたんだ」

つまり彼女が買い物帰りだという事は、彼女のスタバ以降の行動を見ない限り、知り得ない情報だった、という事になる。

更に現場には、衣類や荷物の類は一切無かったとも言っていた。

殺される前の証言が無く、殺された後には荷物が持ち去られていたのなら、『彼女の買い物袋』も現場には無かった筈だ。つまり彼女を買い物帰りだと知っているのは彼女を殺した犯人その人だけ、という事になる。

——こう言うとも如何にも『犯人の自白』みたいだが、別にコレだけでは谷嶋原が犯人だという決定的な証拠にはならない。別に帰るときに偶然見かけただけかもしれないし、警察側が学校に報告する時に、そんな事を説明しただけかもしれない。（尤もアナトの中では俺が荷物を持っていたから、スタバの証言だけで警察が買い物帰りだと判断したか如何かは疑問だが、まあ、兎に角）

更に俺が違和感を感じたのは、彼女が虐められっ子だった男子生徒を救った時。

《新陰一刀流》を習っている彼女が、ああも簡単に（実際に簡単だったのかは不明だが）殺された事だ。

夜道、一人で歩いていれば、自然と警戒するものである。

十メートル後ろを人が歩いているだけでも、かなり緊張は、する。にも関わらず、来夢ちゃんは殺された。

殺人事件が起きた後、——しかも彼女にしてみれば、自分に近しい人が殺された事件の後に警戒しないなんて有り得ない。

そして《新陰一刀流》を師事してもらっている彼女を、倒すのはかなり無理があるように思える。少なくとも俺じゃ絶対に倒せない自信がある。

『不意を討つ』事に長けた新陰一刀流の不意を、夜道で討つのは多分無理だ。

正々堂々と襲っても、多分無理。

そうになると、彼女はおそらく『自分の意思で犯人を近づけてしまった』のでは。俺はそう考えた。

つまり彼女が近づけても安全だと思った人物。

顔見知り——だったのではないかと。

——この仮説も根拠は乏しい。確かに顔見知りなら警戒はしないかもしれないが、近づけるとも限らないし。実際犯人は【道具袋】なんてもんを持っていたのだから、遠くから銃で狙撃したのかもしれない。とはいえ担任教師なのだから、いくら来夢ちゃんといえど無下には扱えなかった、という可能性はあるが。

まあ、この二つの仮説から俺は谷嶋原が犯人だと断定したわけだが（実際はもう一つ仮説が——というか原因があったのだが、それはあまりにも感情的で、論理的でなかったから、来夢ちゃんに説明するのは止めておいた）、無論これらは偶然で片付けられる範囲の出来事だ。

直後に言った通り、否定するのはとても、容易い。

他に答えが思いつかなかったから、唯一解だから俺は正解だと思いついた。ただそれだけの話かもしれない。犯人は別にいて、彼はなんの関係もなかった。そういう可能性が大部分だ。

だが、だからと言って谷嶋原が犯人だという可能性も、0ではない。

だから半ば博打で俺は来夢ちゃんに協力を要請した。

学校帰りに谷嶋原を誘き出すように。

勿論彼が上手く誘いに乗るとも限らない。寧ろそんな毎日殺人を行なうなんて、とても人間の神経だとは思えない。俺だって一日目で釣れるなんて考えなかった。

ただ、一度来夢ちゃんを殺したのだから、なんとなく彼女は谷嶋原の『理想』のプロタイプなんじゃないか、そう思っただけの、正に行き当たりばったり、根拠も理論も飛躍した、改めて考えてみると馬鹿馬鹿しい事この上ない策だったのだ。

俺は説明を終えると、来夢ちゃんには得心が行った、と言う様に頷いた。

「まあ、紙の様に薄い、策とも言えない様な策だったけど、結果的には谷嶋原が犯人で、捕まったわけだから、結果オーライって所かな」

そう言うのと、彼女は怒ったように俺を責める。

「何が結果オーライですか。貴方はこんな大怪我して、あと少しで死んでいたかもしれないですよ。そうなったら最悪の結果じゃないですか」

「――」

「もしかして、『谷嶋原が捕まれば、後は如何なっても良かった』なんて考えていませんかよ。止めてください、そういうの。貴方が怪我をした話を聞いて、皆さん、とても、とっても、とおーっても――心配してたんですから」

何も、言えない。

「とは言え、皆さん『貴方が谷嶋原先生に偶然襲われた』と知っているから、何も言いませんけど、そんな無茶な策の下、司君が怪我をしたなんて知ったら、何て言うでしょうね」

「怒られるね、間違いなく」

「そうですね、間違いなく」

うん、間違いない。

「それはそうと、ゴメンね」俺は来夢ちゃんに謝罪をする。

「えっと、何がですか」

「そんな策に乗せて、囹役なんてさせちゃって」

そう、どちらかといえはこの策は彼女のほうが危険なのだ。《新陰一刀流》があるとはいえ、下手を打てば殺されていたのは、彼女も一緒だ。

「ああ、いえ、別にいいですよ。私もアヤさんの仇をとる為に、時田君の策を利用した節がありますから。お礼を言いたいくらいです」

「でも、谷嶋原が犯人だとも不確定だったのに」

そう、どちらかといえば、犯人でなかった可能性の方が、遥かに大きかった。

「そこは、意外でしたけどね。司君、自信たっぷりに見えましたからね。もう、犯人は彼しか有り得ない、と言わんばかりでした」

「まあ、それはブラフだね。こう見えても、俺はブラフには自信があるんだ」

最近はい比野でさえ偶に欺けるようになってきた。

それはあんまり自慢にはなりませんね。と、彼女は笑った。

やっぱり、彼女の笑顔は、相変わらず、見惚れる程に、魅力的だった。

「【アイギスの楯】——それが、私に与えられた、道具です」
来夢ちゃんは唐突に、そう切り出した。

「やっぱり、貴方には、知っておいて欲しいですから」

別に、そんな事を言わなくても、君を信頼している。——そう
は言ったが、彼女は意に介さなかった。

「信頼関係を手に入れる為の、取引ではありません。ただ、私が教えたいから教えるだけです」

そういつて自分の【アイギスの楯】について説明を続ける。

「簡単に言うと、何でも『斬れる』道具です、ね。《デイスコネクション相対切断》と言う通り、私が望むものならなんでも『切断』出来る。それが【アイギスの楯】、らしいですね」

石川五エ門の残鉄剣みたいなものか、と言うと、彼女は蒟蒻も切れますけどね、と答えた。

「それに、斬れるのはもっと曖昧なものでも大丈夫みたいです。例えば、あの日、私は谷嶋原先生の『意識』を切断しました」

「『意識』を、切断」

それは、それは。なんというか、じゃあ直死の魔眼に近いのかな、と言ってみたけど、流石にそれは知らなかったようだ。小首を傾げる。

「でもそれだとあんまり【アイギスの楯】のイメージじゃないな、どちらかと言うと、剣じゃないかな。ナイフみたいな形状だったし」

「あ、えっと、違います。あれは、あのナイフが【アイギスの楯】なのでは無くて、ですね。本体はネックレスで、それを付けてる時に私が望むと、刃物があのナイフになるみたいです」

そういつて手近にある果物ナイフを手取る。

すると果物ナイフが発光し、一瞬であの、独特の形状をしたナイフに変化した。

おお、格好いい。

男の子の、憧れだな、なんて場違いな感想を抱く。

「それでもやっぱり、攻撃的な道具な気がするな。盾って感じじゃない」

「でもアイギスの盾って兵器ですから」

「そうなのか」

「神が戦わずして勝利を収める最強の防具にして武器、だったと思います。中央にメデューサの首が嵌っている訳ですし」

へえ、俺は感心する。それは確かに、強そうだ。見たら石化するわけだし。

「えっと、実際に見ていただくと分かりますけど、ペンダントトツ

プが盾の形状をしてまして」

そういつて【アイギスの楯】を取り出そうとする来夢ちゃん。しかし、制服をかつちり着ているわけで、なかなか取り出せない。

と、彼女は徐にリボンを外す。

まあ、ペンダントを取り出すにはそうせざる終えないわけで。別にやましい行為でもなんでもないので、ちょっと気恥ずかしくなって俺は目を逸らす。

彼女はそのまま第一ボタンも外そうとしている。

落ち着け、俺。コレはペンダントを取り出すための行為だ。他に何の意図も無い。落ち着くん、素数を数えて落ち着くんだっ——。

そうは言うものの脳裏に浮かぶのは、かなり前、色仕掛けをされた時の事だ。彼女の色っぽい動作や表情、身体の柔らかさや唇の柔らかさかと思ひ出される。

不味い。顔が火照って来た。というか寧ろ、良く彼女は俺に普段通りに平然と話せるよな——

と、そんな事を考えていると、不意に俺の病室の扉が開いた。

「やっほー司ー。新しい本を持ってきてやったぜー」

「馬鹿っ、病院内で大声を出すなっ」

「あのねー新しい担任は柏崎先生になったんだけどねー、新学期早々入院した時田くんの為にー、宿題を出してくれたよー」

「司、今日はメロンだっ、メロンを賭けて勝負をしよう」

「ちわーす。恵理香ちゃん宅急便でーす」

「」

——。

沈黙が、病室に舞い降りる。
時が止まったのかと思った。

彼らの目に飛び込んで来たのは、ベッドの上の俺と、その隣で第一ボタンを外そうとして、悪戦苦闘している来夢ちゃんであって――。

なんだろう、物凄く、なんだか物凄く誤解をされている気がする。
なんでお前らよりもよって一遍に来るんだよ。

だが、俺は慌てない。決して慌てない。
ここで慌てては墓穴を掘るようなものだ。

俺はゆっくりと、なんて事のないように切り出す。

「かつ、勘違いしないでくろ。来夢ちゃんは――――」

噛んだ。思いつきり噛んだ。

落ちくけ俺。落ちくけってなんだよ。頭の中なのに噛むなよ。

大丈夫だ、まだ大丈夫。リカバリーは充分可能だ。

落ち着け。K.O.Lになるんだ時田司。考えろ、この窮地を脱出する為の、最善の説明を考えるんだ。『口先の魔術師』であり『戯言遣い』と呼ばれたこの俺の、本領を発揮するんだっ――。

そこで、猫恋が何かに気付いたように、ボソッと、呟いた。

「いつの間に『来夢ちゃん』なんて呼ぶような仲に、なったのかな
――」

それは普段なら聞き取れないような小さな呟きだったが、今、この病室ではとても良く響いた。

エピローグ『去人たち』

七崎市は極端な街だ。

ビルの乱立する『都市部』と、家々の並ぶ『居住部』が対立しているかのようにはっきりと分かれている。

山に囲まれた土地柄か、北の方に行けば『田舎』というイメージがぴたりと合て嵌る日本家屋なども点在している反面、南に下ればそれこそ大都市と言って遜色ないほど交通網が発達し、高い建物の多い『都会』が存在する。

日本広しと言えど、これほどまでに文明の進み——若干大袈裟な言い方だが——に差がある街は、あまり例を見ない。

しかし、余りにも違いすぎる環境のズレは、人間の精神、言い換えれば魂に影響を与える。

それがいい影響なのか、悪い影響なのかは一概には言えないが、兎に角、この街はそこに住む人々に、なんらかの変調を来す。

それが今回、七崎市が『実験場』に選ばれた理由の一因だった。



七崎市の『都市部』その中でも特徴的な一角、一部の人間に『幽霊地帯』と噂されるビル群がある。大企業を誘致しようと、ビルを建設したは良い物の、直前になってそこに誘致する予定だった企業が全て倒産し、結果として空きビルが沢山捨て置かれてしまった——そんなエリアだった。

尤も、何故七崎市に誘致予定の企業が軒並み倒産したかという理

由を、正確に説明できるものは、少なくとも『表の世界』には居なかったが。

その後は、例え理由は分からなくともあまりにも綺麗に倒産してしまったため、気味悪がってもう何処もその幽霊地帯を利用しようとする会社は現れなかった。正確に言えば二、三、無い事も無かったが、ここにオフィスを構えてから、数ヶ月もしない内に潰れてしまい（正確に言えば、その会社も『潰された』のだが）、そうならもう、ここを利用しようとする酔狂な輩は、二度と出てこなかった。

その言わばビル墓場で、彼女――ノナは月見をしていた。今はもう使われなくなったビルの一つの屋上の淵に腰掛け、足を振り子のように運動させながら、夜空を眺めていた。

屋上には転落防止用のフェンスが設置されていたものの、彼女はそのフェンスの外側に居たため、フェンスは本来の役割をまるで果たせていなかった。

彼女は何も言わず、ただ星空を眺めていた。月は満月ではなかったが、それ故か、あるいはビルが使われていないため、明かりが一切ない所為か、その両方かは定かではないが、今夜は星が比較的良好に見えたのである。

「ああ、いたいた」

と、言う声と同時に、彼女の隣にうみねこが『出現した』。数瞬前までは、確実にノナは一人だったのだが、いつの間にか、彼女の隣にうみねこが、『現れた』のだ。音も、匂いも何もさせずに、唐突に、まるで今まで其処にいたかのように、彼は平然とノナの隣に座っていた。

ノナは横目でその姿を確認すると、何も言わずに尻をするようにしてうみねこから距離をとる。

「おいおい、非道いな」

彼はそんな彼女の様子に傷ついたような声を発した。

「そんな格好をしている人と、知り合いに間違えられたら困りますから」

ノナはにっこりと微笑んで、自分の行為の正当性を訴えた。

そう、うみねこは真っ赤なコートを着ていた。黒く、きつかりとした衣類の上にそれを羽織り、更には赤い帽子を被り、丸いサンダラスを掛けていた。両の手には白い手袋をつけ、その手袋にはなにやら魔法陣らしきものが記されている。

コスプレ、だった。

金髪を隠すため、黒く長いカツラまで用い、見る人が見ればかなり気合の入ったものだと言えたが、ノナは社会で暮らす必要最低限以上の知識を持ったなかったため、彼が何かのコスプレをしているのだという事はわかったが、その完成度がどれほどのモノなのかまでは理解できなかった。

無論、理解したとしても街中でコスプレをしているような人間とは知り合いに見られたくはなかっただろうが。

「うーん、君の格好も、似たり寄ったりだと思うけど」

「これは『着物』といって、古式ゆかしいこの国の伝統着です。一緒にしないで下さい」

うみねこの反論を、ノナは一蹴する。彼女は美意識が高く、此処数週間で様々な服を試したが、着物が――特に浴衣が気に入っていた。

「でもさ、TPOってものがあるだろう。浴衣は祭りの時だけにしか着る物じゃないのかと思うんだけど」

「貴方には、言われたくない科白ですね」

お互いを牽制しあう二人。視線は交わり、火花でも散りそうな気配だ。如何やら両者には、己の服装について並々ならぬ拘りが存在

しているようだった。その方向性は兎も角として、だが。

「ところで」ノナが問い掛ける「要件は、なんですか」

「ん、ああ」それに対しうみねこは、内緒話をする子供のような笑みを浮かべて答える「さっき医者から連絡が入ってさ、遂に『彼』の消息が掴めたらしくて、これから接触するらしいよ」

しかし、それを聞いてもノナはピンとこないようだった。眉を顰め、「『彼』って誰ですか」とうみねこに聞き返す。

彼女が驚くと思ったのだろう、そんな肩透かしの反応を受けて、うみねこは些か拍子抜けしたようだった。

「知らないはずないだろう。あの最有力候補の――」

「ああ、思い出しました。確か【道具】無しで《因果律》を曲げられる人間、でしたっけ」

説明を途中で遮られ、うみねこは露骨に顔を顰める。が、良く考えてみれば彼女は普段からマイペースなので、これくらいの無礼は無礼に入らないな、と気持ちを切り替えた。

「そう、百年に一度の逸材だ――ああ、羨ましいなあ。僕は『彼』の担当になりたかったよ。本当に医者ドクターが羨ましい」

恍惚とした表情で語るうみねこに向けて、ノナは怪訝そうな視線を向ける。

「そんなに良い物でしょうか。実験が始まれば被験者たちは全員【道具】を手にするわけですし、そうなれば『彼』の特性も大した意味をなさないので不是吗ですか」

その疑問に対し、うみねこは気障ったらしく人差し指を左右に揺らす。

「解かってないなあ。浪漫だよ、浪漫。格好いいじゃないか。【道具】無しで曲げられるなら、そんな人間が【道具】を使ったらどんな現象が起こるか、興味は尽きないよ」

そんなうみねこの様子に、ノナは頭を降る。

「理解できませんね。その程度のアドバンテージ、この混沌カオスを象徴したような実験では、意味がありません」

「だから浪漫だってば。僕が漫画家で、この実験を漫画化するなら、そんな隠された能力を持つ『彼』を主人公にするね。それに、『彼は壊れ方だって決して悪くない。《因果律》を曲げる力がなくても充分有力候補だよ」

そんなことより、とうみねこは続ける。

「僕は君の方が理解できないよ、時田——司だっけ。会って来たけど、如何しようもない、凡夫じゃないか。平凡過ぎて、話になりやしない。一体如何して君は、《因果律》を曲げてまで、彼に【ぼうけんのしょ】を渡したんだい」

その疑問に対し、ノナは鼻で笑う。

「誰に渡すか、それは一応リストアップされていますが、最終的な決定権は天使に一任されているでしょう」

「それは理由にはなっていないよ。君が『あの時に声をあげなければ』、【ぼうけんのしょ】は予定通りの者に渡った筈なんだ。それを態々大声をだしたから、予定外に時田司がそれを阻止してしまった」

「幾らあらかじめ分かっているても、鞆をひったくられると吃驚するんですよ」

「————えっ」

「そしたら彼が助けてくれた。名前を聞いたら時田司って言うじゃないですか。時を、司る、ですよ。これはもう運命としか言いようがないですよね。《因果律》なんてものを無視した、超絶的な出会いだった——。だから、私は【ぼうけんのしょ】を彼に託したんです」

「ちよつと」

「決して意図せず曲げてしまった《因果律》を修復するのが面倒臭かったとか、そんな理由じゃありませんよ。あらかじめ言っておきますけど」

ノナのその言い訳になっていない言い訳に、うみねこは頭を抱え

る。

「君、本当に面倒臭がりだね。ちょっと、時田司に同情するよ」

「面倒だからじゃありませんってば。それに結果オーライでしょう。【アイギスの楯】だけでは避けられなかった小鳥遊来夢の死を回避したのは、彼の力があつたこそじゃないですか」

「そりゃ、一人の生命に対する《因果律》を変えたのは、今の所彼ぐらいだけど、それで言わばライバルを助けちゃってちゃ意味が無いじゃないか。所有者の《因果律》を変えるのなら死から生では無く、生から死にすべきだ」

「一応、止めたのですけどね」

「それに、此れが一番の理由だけど、時田司は全然『壊れていない』。人として、全くの健常人だ。その証拠に、怖気づいてタイムリープ回数が、これまで《時間逆行》^{リバース}を扱ってきた所有者に対して、圧倒的に少ない」

そこで一息入れると、少し間を置き、続ける。

「そんな人間が、生き残れるとは、とても思えない」

彼の科白に対し、ノナは口許を斜めにして、反論する。

「それは分かりませんよ。異質な、人間として『壊れている』異常な者だらけの戦いなら、彼の『正常さ』は逆に『異質』になる。私だって適当に渡したわけではありません。そのくらいは考えてます」

そこまで言うと、矛盾してますけど、と前置きをしてから、彼女は次の科白を口にした。

「それに、時田司は決して『健常人』では無い――。少なくとも、私はそう思いますよ」

満点の星空の下、目の前の死体に目を向ける。
橋の下で男が死んでいた。当たり前だ。殺したのだから。

酒のように、煙草のように、情性で殺人を続けていた。

居なくなっても誰も気にしないようなホームレスや、出会い系サイトで出会ったフリーターを狙って、殺していた。
回数を重ねていくうちに、段々と手際が良くなっている。

今日も一人殺し、その死体の処理をこれからする所だった。

最初の一回は街中でバラバラにして遊んでしまったため、処理に手間取ったが、もうそんな不手際は犯さない。
解体するのは山の中に行ってからだ。

と、視線を感じた。

振り向くと、数メートル離れた場所に、男が、いた。

三十台だろうか、ぼさぼさで長い髪形に、丸い眼鏡を掛けている。

医者や学者が来ているような白衣をだらしなく羽織り、煙草を燻らしている。

「ああ、ゴメン、ゴメン。吃驚させちゃったかい」

男は飄々と、そんな事を喋る。

明らかに、殺人現場に偶然遭遇した人間の反応じゃ、無い。

が、顔を見られた。

それに得体が知れない。

どうする。

殺すか。

男に向けて一歩足を踏み出すと、男は慌てたように両手を上げる。

「待て、待て。警察に通報したりするつもりは無いよ」

その言葉を見無視し、男の顔に目掛けて砂を蹴り上げる。

反射的に、男は腕で顔を砂から守った。

その一瞬の隙に間合いを詰め、ナイフを突き出す。

が、ナイフは空を切る。

避ける暇は無く、確実に刺さった、筈なのに。

男は、消えていた。

「んー。過激だねえ。まあ、いいよ。それでこそ君らしい」

男の声が、上から聞こえる。

目線を上に持っていく。

男が、立っていた。

ただし、『橋の下に』。

まるで重力が逆に作用しているかのように、男の両足は橋の下の面にぴったりと貼り付いていたのだ。

逆さに立っている事が、まるで何て事の無いように、そのまま男は話を続ける。

「そうだな、自己紹介をするか。僕の事は――、うん、ドクター医者と呼

んでくれ。仲間内でも、それで通っている」

あくまで淡々と、世間話をするように――。

「君に、【道具】を与えようと思う。人智を超えた、神の【道具】だ」

そんな事を、言った。



これを皮切りに、か。

あるいは既に始まっていたのか。

七崎市の至る所で、天使による【道具】の譲渡が行われていく。

少しずつ、少しずつ。

日常から、非日常へと舞台は様相を変える。

全体を見れば気が付かないくらいに僅かな変化。

人間に少しずつ、ほんの微量の毒を飲ませるような、その程度の変化に過ぎない。

しかし、微量とはいえ、毒は毒。

時田司の日常は、確実に、狂い始めていく。
それこそ今までの非日常が、”微量”だと感じてしまうくらいに。

L i f e G a m e / E N D
T O B E C O N T I N U E D . . .

エピローグ『去人たち』（後書き）

◆あとかき

と、言うわけで人生ゲームは一応の終わりを迎えました。

読んでいただいた方はもうお分かりかと思いますが、この人生ゲームは一つの大きな物語の序章的な部分に過ぎません。

このまま第二部、第三部と続いていくので、宜しければもう少しお付き合ってくださいませ。

もし良かったら感想を頂けると、私は飛び上がって喜びますし、読んで気になった部分があれば「このところが読みづらい」とか、「こうしたほうがいいんじゃないの」といったアドバイスを頂けると、次回作以降の参考にさせていただきますたり、修正をさせてもらったりするので、そういったアドバイスももらえると嬉しいですよ。

ともあれ、ここまで読んでいただき、本当にありがとうございますでした。

第一部：アーティファクト・ルール解説

◆◆◆アーティファクト ◆◆◆道具解説◆◆◆

◆道具名…【ぼうけんのしょ】

◆性質…《時間逆行》
リバース
ときだ
つかさ

◆所有者…時田 司

◆形状…クリアファイル

◆解説…Level 1

◆【ぼうけんのしょ】にファイリングされている用紙に時刻を書き込む事で《セーブ》が行え、その紙を燃やす事で《ロード》し、時間を紙に記載された時刻まで巻き戻す能力。

◆《ロード》は所有者（時田司）の意志とは関係なく、紙が燃やされさえすれば、自動的に発動される。極端な例で言えば、《セーブ》を行った紙を第三者が所有者の知らないところで燃やしたとしても、《ロード》は実行される。

◆時空系の【道具】であるが故に、いろいろと制約が多い。しかし、それらのほとんどはバランス調節のために設けられたもので、意味のある制約は『未来への跳躍が不可能』なことぐらいである。（【ぼうけんのしょ】は世界における時間軸が一本だという仮定をもとに構成された道具であるため、未来への跳躍を容認してしまうことは、複数のセーブデータを使うと平行世界^{パラレルワールド}の存在を証明してしまう

結果となるため、矛盾が起きる)

◆道具名…【アイギスの楯】

◆性質…デイスコネクション《相對切斷》

◆所有者…たかなし小鳥遊 らいむ来夢

◆形状…ペンダントトップ

◆解説…Level 1

◇ペンダントをつけている時に念じることにより、あらゆる刃物を《万物を切斷する剣》に変化させる事ができる。

◇変化させられる時間は三十秒（レベル1の段階で）。連続で変化はさせられず、十秒ほどのタイムラグが存在する。

◇本人は「何でも切れる」と称しているが、その表現は若干の誇張。正確には『所有者が切斷できると認識したモノ』しか切る事ができない。つまり形の無い概念（時間、距離、空間、温度など）は切斷する事はできない。そこが《相對》であって《絶対》ではない所以である。

◇ただし、形の無いモノが形のあるものを媒体に存在している場合は、その限りではない。（作中では『意識』というものを切斷しているが、それは『意識』が『肉体』を媒体として存在していたからできたのである）

◇しかし、『形の無いモノ』は『形のあるモノ』よりも切断のイメージが持ち辛いため（『意識』を切るってどういうことだよって事）、《切断》が若干不安定となり、少し時間が経つと万物のもつ《復元力》により元の形に修復されてしまう。

◇所有者の『認識』により道具の性能が大きくされる、変わった【道具】。

◆道具名…【道具袋】

◆性質…《物品収集》コレクト

◆所有者…谷嶋原 丈一郎やじまはら じょういちろう

◆形状…巾着袋

◆解説…Level 1

◇巾着袋に物体の質量、体積、温度など、その他諸々の条件を一切合財無視して自由に保存、取り出しが可能。そういう能力。

◇作中ではうみねこが【道具袋】をエニグマに例えたが、その比喻は若干不適當である。レベルが上昇するにつれて、そういったことも可能になるかもしれないが、実際には下記のような制限が存在した。

◇物体を取り出す際に、「手を巾着袋の中に突っ込む」というアクションが必要になるため、実質『片手で扱える物』が入られる物体の条件。（煙草、ライター、携帯電話、財布、定期入れ、金属バットなどは入れられるが、タクシーやシュレッダーなどはしまえな

い)

◇『命のあるもの』は保存できない。

◇入れられる容量は、十個まで。十個以上の物体を入れようとすると、古いものから順番に勝手に排出される。(大きさ、質量に関係なく『十個』まで。しかし、この数は所有者の主観に左右される。例えば硬貨をバラバラに入れると、十枚で限界になるが、それらを財布に入れば全て含めて『財布一個』としてカウントされる)

◆◆実験に関するルール◆◆

◆所有権について

1. 【道具】は一部例外を除き、所有権と呼ばれる権利を有する人間以外には扱う事ができない。

2-1. 所有権は、基本的に天使が道具を直接授けた人間が有する。ただし、他の人間が所有者の【道具】を何らかの方法で奪取し、「自分のモノにした」と認識し、さらに所有者が「奪われた」と認識した時点で、その所有権はその人間に委譲される。つまり、強奪ならば即座に所有権を得る事ができるが、窃盗では盗まれた側が盗

まれた事を認識しない限り、所有権を得る事はできない。

2-2. 所有者が明確な意思を持ち、【道具】を第三者に譲渡した場合、所有権はその人間へ移る。

2-3. 所有者が死亡した場合、所有権はその【道具】に次に触れた人間へと移る。

3-2. 天使は所有権を持つ人間がその【道具】の説明を求めた場合、例えば自分が担当する【道具】では無かったとしても、可能な限り所有者が望む形でその要望を叶える義務がある。

3-2. ただし、所有権を持っている【道具】以外の説明を、その所有権を持つ第三者の了承無く教える事はできない。

3-3. また、どの人間が所有権を有しているかという情報を教える行為は、公平性を欠き、実験結果に著しく影響を及ぼす可能性が懸念されるため、一切を禁止する。

◆道具の破壊について

基本的に【道具】は破壊不可能である。存在の根底からこの世界のものとは一線を画しているため、核爆弾を打ち込もうが、火葬場で焼こうが傷一つ、こげ一つ付ける事はできない。が、例外となるケースが二つだけある。

◇所有者が、明確な意志をもって【道具】を破壊しようとした場合。
これは実験を成立させるためのルールだが、所有者が他の所有者の持つ【道具】を破壊しようとした場合のみ、【道具】は例外的にこの世界の物質法則にしばらくは置かれる。簡単な例を挙げると、家に【道具】を置き忘れたとして、煙草の消し忘れなどで小火が起きてその家が全焼したとしても、【道具】は燃える事は無いが、他の所有者がその人間のもつ【道具】を破壊するために放火をしたのならば、【道具】は燃え尽きる。

◇【道具】と【道具】が物理的に接触した場合。

この世界の方法ではいかなる方法でも【道具】を破壊する事は不可能だが、同じように上位法則によって存在する【道具】自体ならば、可能である。作中では小鳥遊来夢が【アイギスの楯】により【道具袋】を破壊している。あのとき来夢自身には【道具】を破壊する意志はなかったが、【アイギスの楯】により存在しているナイフの軌道上に【道具袋】があつたために、破壊する事ができた。

エピグラフ

非暴力は、それが効果のある場合にのみ、よいものである。

そこで、ガンジーに対して、自分の妹をどう守ればいいのかという、若者の問いがでてきたのである。

その答えは、こうなるはずであろう。

君がもし暴力を用いなくても、同じくらいの成功率で妹さんを守ることができる人間でないのなら、力をふるうがいい。

君の筋肉に含まれているエネルギーと同等のエネルギー（すなわち、もっとも肉体的な意味で、どれぐらい効果をあげられるかという性質）をそなえた光を放つことができないのならば。

非暴力をつらぬくことができるような人となれるように努力すること。

このこともまた、相手によりけりである。

——シモーヌ・ヴェイユ 『重力と恩寵』——

プロローグ『ファントム ブラッド』

「助けたいか」

闇の中から声が聞こえた。

「彼女を、助けたいのか」

その男が私にした質問は、簡潔だった。むしろ言葉が足りないと言ってもいいほどだろう。

しかし、私はその質問に対して、首を縦に振る。彼の問いたい事が何かなんて、わかりきっている事だから。

「そうか」

男はゆっくりと頷く。

もはや季節は春だというのに、真っ黒で長いコートを着込んだ彼は、カーテンを閉め切ったこの病室の中央に立っていた。

「彼女を助けるために、お前は何を犠牲にできる」

私の覚悟を試すようなその科白。

——なんでも。

それに対し私はきっぱりと答え、男を真っ向から見つめ返す。事実、私は何を犠牲にしても彼女を助けるつもりでいた。その意

志を伝えるため、射抜くような視線を送る。

身長2メートルはあろうかという大男。スキンヘッドにサングラスと他を威圧する容姿ではあったが。私は目を逸らさない。

少しの、沈黙。

ややあってから、男はもう一度、頷いた。

「いい瞳をしている」

その科白は漫画や、小説の中ぐらいでしか見ることができないほど、芝居臭かったが。

男は腕をあげ、ベットの^上にそれを落とした。

そして、冷たく、感情を伴わない声でこう、言った。

「^{エナジードレイン}《生命吸収》。これがお前に与えられた、道具だ——」

一章『さいはてホスピタル』

ぱちり。

木と木の打ち合わされる小気味いい音が響き、俺の駒である玉の目前に金が張られた。その一手によって俺は次の手番で、自分の玉をどう動かそうとも取られてしまう状況に陥った。更に言えばこの金を取れるような他の駒も、残念ながら盤上には存在しない。

今の状況を至極単純に言うならば。『詰み』だ。

「――参りました」

俺は溜息混じりにそう呟く。将棋盤を挟んで反対側にいる野崎のやまさんは、その言葉を聞いて愉快そうにひゃっひゃつと笑った。いや、この爺さんは本当にひゃっひゃつと笑うのだ。

「坊主、まだまだだな」

野崎さんはそう言うと、缶コーヒーを買いに席を立った。豊かな白髪を掻き耄りながら、自動販売機の方へと歩き出す。『飛車角落ち』までさせて頂いたにも関わらず、まるで手も足も出なかったのだから、本当に彼の言うとおり、まだまだなのだろう。

「――」

俺の隣に座ってる、恵理香が視線をこちらに向けてくる。たった今行われた無様な負け戦を、慰めてくれているようだ。

俺は彼女の頭を撫でてから、視線を外へと向けた。

限りなく青い空に、一本、飛行機雲が走っている。

青いキャンパスに白い絵の具で勢い良く線を引つ張ったようだ――

——と思ったが、即座に「青いキャンパスってなんだよ」と自分の思考を一笑に付した。

節電の為か、余分な照明を消され、ほんの少し薄暗いこの部屋と、どこまでも明るい窓の外とのコントラストが、俺の心をくすぐる。

俺はひとつ大きな欠伸を零した。

視線を隣に向けると、恵理香も少し眠そうだった。

「ほらよ」

その声の方へ顔を向けると、野崎さんが俺に向かって缶コーヒーを差し出していた。

「ありがとうございます」

俺は礼を言ってから、ひんやりと冷えたそれを受け取る。

「いいんだよ、爺の数少ない道楽に付き合ってくれてるんだから、これくらい安いもんさ」

プルタブを捻り、中の液体を喉に流し込む。口の中に微糖の甘さが広がり、冷たいコーヒーが喉を潤し、ほんの少しの苦味と糖分が脳の働きを活発にさせる。

俺と野崎さんは、コーヒーを一息に嚙下し、視線を交わした。

「さて坊主——もう一局、やるかい」

「勿論。次は簡単にはやられませんよ——」

入院生活十五日目。

病院内に設けられた、休息スペースで、俺は別の入院患者を相手に将棋に興じていた。

昨日、『天使』であるうみねこから、俺が——俺達が途轍もない計画に参加させられてしまっている事を聞かされたばかりではあるが、しかし、昨日の今日で劇的に生活が変化する事は、無かった。

俺の入院期間は、四週間。まるまる一ヶ月ほどだ。

正直に言うと、高校二年生に進級したてのこの時期に、一ヶ月も学校を休むのは、かなりきつい。クラス替えによって新しくなった自分のクラスに馴染む為の期間をまるまるすっぱかす事になるし、やはり勉強の進み具合が心配だ。出席日数は——学校側が特別補講を設けてくれるらしいから、まあそれほど深刻に悩む必要は無いのかもしれないが。

しかし、俺の怪我は、それほどまでの治療期間を必要とするらなかった。

太腿の方の弾丸は、肉を多少えぐる程度の被害ですんだのだが——問題は肩の方に撃たれた弾丸だった。

それは、かなり当たり所が悪かったらしく、俺の肩の骨を粉々に砕いた挙句、筋肉を傷つけ、あと少し逸れていれば神経を切断するような箇所に残まっていたらしい。

正直もう二度と右肩は動かなくなるような損傷であったようなのだが。——看護師さん曰く、『流れの天才無免許医』がふらりと立ち寄り、神のような手捌きで手術を行って^{オペ}くれ——そのおかげで、奇跡的に元通りの機能を取り戻せた——。

いや、いや、いや。

さすがに天才無免許医の下りは、ホスピタルジョークだろうけれど（あの看護師さんは、結構そういうところがある）、まあ、それにしても結構なダメージだったらしいのだ。故に、俺の右腕は今現

在完全に固定され、三週間はそのまま。そして一週間のリハビリを経て、ようやく退院となる手筈だ。

そして、今日の前で俺と将棋の勝負をしている野崎さんは、この入院生活で知り合った、暇つぶし仲間だった。

放課後の時間帯になると、日比野たちが毎日お見舞いに来てくれるからいいものの、午前はまるっきり恵理香とふたりきりで、暇になる。入院してから五日ほどは肩の鈍痛に悩まされ、退屈どころの騒ぎではなかったのだが、一週間もすればどうにも時間を潰したくなり――ふたりでふらふらと病院内を探検していたところ、このお爺さんに「将棋しようぜ」と誘われ――そして今日まで毎日、午前中は彼と将棋を指すのが日課になっている。

結果は連戦連敗だが。

だが、それもしようがないといえるだろう。俺が生まれる前から指し続けているような野崎さんに、勝てというほうが無理な話だ。俺が一手先しか読めないのに対し、彼は常に三手先を考えてる、気がする。

「――参りました」

またもや俺の玉が、野崎さんの兵隊たちに包囲されて、対局は終了を迎えた。波状攻撃により突破された俺の自陣は、雪崩のように崩れ、瞬く間に壊滅したのだった。

食事の時間になりそうな頃合だったので、病室に戻り恵理香とふたりで戯れていると、配膳車を押して看護師のおねーさんが現れた。「おら、四六時中寝てばかりの愚民ども。白衣の天使であるこの私が、恐れ多くも直々に餌を与えに来てやったぞ。崇め奉れ」

そんな看護師にあるまじき発言をしながら、『ザ・ハイテンション』といった様子の看護師さん。病室には俺を含め患者は三人いるが、もう既にこの光景に慣れっこになったのか、特に反応を見せる事は無い。しかし放置すると「きょうくん。無視されるとさーみーしーいー」等と更に悪化しながらくだを巻き始めるから始末に終えない。酒を飲んでないのに『くだを巻く』、というのは少し大袈裟と思われるかもしれないが、本当に、そう表現するしかないのだ。常に自分に酔っていると思えない。

「つーちゃーくん。みんなの反応が冷たーい」

無視を決め込んだ病室の方々の反応に、心を打ち砕かれたかのような様子を見せ、こちらを上目遣いで見つめつつ、迫ってくる看護師さん。一応言っておきますけど、俺も冷たい反応をしていたつもりだったんですけど。

「今日は何キャラですか」

しかしこれ以上放置すると、流石に面倒なので、仕方なく相手をしてみる。

「お嬢様キャラ」

「微妙にずれてましたよ」

「パンが無いなら、汚泥でもすすってなさいな」

「それ聞いた後だと、マリーアントワネットが聖女に思えますね」

一通り絡んで満足したのか、看護師さんは昼食の配膳を始める。「お残しはゆるしまへんでー」と言いつつ配っているその姿は、や

っぱりどう鼻屑目に見ても白衣の天使ではなかった。

まあ、実際の『天使』は俺の想像を遥かに超えていたわけだが。

恵理香も俺の隣で峰子さんに作ってもらった弁当を取り出し、食し始める。病院食ばかり食べてると、その弁当がとても美味しそうに見える。いや、野崎さんが言うにはこれでも病院食はかなり美味しくなったらしいのだが、贅沢だと言われるかもしれないが、そろそろ峰子さんの手料理が食べたくなるのだ。

「」

そんな俺の様子を見かねたのか、恵理香が弁当のから揚げをつまみながら、こちらを見据える。「あげようか」という意思表示だということはわかったが、流石に妹から食い物を巻き上げるほど意地汚くは無い。俺はチンケなプライドのもと、彼女の提案を突っぱねた。

二章『閉塞センチメンタル』

しゅらーじよう【修羅場】

阿修羅王が帝釈天たいしゃくてんと戦う場所。転じて、血なまぐさい戦乱または勝ち負けを争う激しい闘争の行われる場所。しゅらば。

まあ、現代じゃ男女間の関係の諍ごやういに使用される場合が多いこの言葉だが、――――俺には一切縁の無いものだと思っていた。

ちなみに俺の知る中で最も修羅場を引き起こしてそうな男ナンバーワンはダントツで氷室幸一なのだが、意外な事に彼はそういった痴情もつの縛もつれは全く起こさない。とつかえひつかえ女の子と付き合っているくせに、何故か恨まれる事がほとんどないのだ。なんという差別。アレが所謂『主人公体質』というやつだろうか、ギャルゲイの。

閑話休題。

さて、俺は今絶賛修羅場に陥り中だった（日本語が激しくおかしいが、気にしない）。いや、俺に彼女などいないのだから、正確に言えば修羅場ではないのかもしれないが、限りなくそれに近い雰囲気きふいを味わわされている。

「なあ――――」

午後一時。俺の病室の入り口で仁王立ちしている日比野響は、感情を押し殺したような声を、喉の奥からひねり出した。

「――はつきりさせたいんだが、お前達は、付き合っているのか」

その質問は、無機質で刃物のような鋭利さを持っていた。お見舞いに来てくれたのは嬉しいのだが、正直、とても怖いです、日比野さん。

「いいえ」

日比野の質問に答えたのは、俺ではなく、俺のベットの横の椅子に腰掛けているクラスメイト、小鳥遊来夢だった。

「――っ、ならばなんなんだっ、その体勢はっ」

来夢ちゃんの返答に対し、日比野は激昂する。

いや、そんな科白を叫ばれると、いかがわしい行為にでも及んでいるみたいに聞こえてしまうかもしれないが、そんなことは決して無い。そう、断じてそういう訳ではないのだ。

ただ単に、彼女はベットの横の椅子に腰掛けて、皮を剥いた林檎の切り身を爪楊枝で突き刺し、俺の顔面の目前へ差し出している、それだけなのだ。

まあ、よくよく考えれば――否、考えるまでもなく、そんな行為に及ぶのは、交際の男女だけなのだから、日比野の疑問も非常に良く解かるものではある。

だがしかし。待つて欲しい。混乱してるのは、日比野だけではない。突然そんな――簡単に言えば「あゝん」という――行為に及ばれた、俺だって充分混乱しているのだ。どう対処していいのかわからないのだ。嘘じゃない。

なぜこんな蜜月な状態に陥ってしまったているのか、その原因を語

るには、まあ、本日の昼食を食べ終わったあたり、今から五分ほど前に遡らなくてはならない。



「おう、少年」

病院の食事を食べ終わり、しばらくすると、俺と同じ病室で、向かい側のベットで寝ている丹下^{たんげ}敦^{あつし}さんが声をかけてきた。丹下さんは二十台半ばのお兄さんで、がっしりとした体格、短く刈り上げた髪から察せられるように、明るくて好感の持てる性格だ。昨日、こここの病室に来たばかりなのだが、彼のその性格の所為か、もう既に俺と丹下さんは十年來の知己のような関係になっていた——というのは多少言いすぎだが。

兎に角、コミュニケーション力が高く、誰とでもすぐに打ち解けられそうな印象を持っている。ただ明るい、というだけでなく、何処と無く危なそうな雰囲気も醸しており——上手い例えは思いつかないのだが、強いて言えば的屋^{てきや}の兄ちゃんといった感じだろうか——それもまた、彼の魅力の一つになっている。なんとなく、女性にモテそうだ。

まあ、恵理香は彼の事が苦手なようだが。

「はい、なんででしょう」

「おいおい、少年。タメ語で話してくれて構わないって言わなかったっけか」

「そうは言われてもまだ知り合って一日ですからね。抵抗ありますよ」

「――オレが良いって言ってんだけどな――」

頭をかきながら、不満そうな声を漏らす丹下さん。

「えっと、で、何か用事ですか」

「ん、ああ。そうそう。見舞いが来てるぜ」

そう言って丹下さんは、ドアの方を指差す。俺の側からだとかーテンの死角になっていて見えなかったが、どうやら誰かが見舞いに来てくれたらしい。

カーテンを退けると、ドアの前には小鳥遊来夢が立っていた。

腰ほどまでの長さの、艶のある長い黒髪。切れ長の瞳。雪のように白い肌。すっと通った鼻筋に、やわらかそうな唇。相変わらず、思わず見惚れてしまうような容姿だった。右手には、紙袋を持っている。

しかし、どうした事か、彼女の様子がいつもと違うように見えた。無表情は無表情なのだが、視線はどこか俯いていて、心なしか顔が赤いように思えたのだ。

「あ、あの――」病室に入りながら、来夢ちゃんが挨拶をする。

「――お見舞いに、来ました」

「ああ、ありがとう」

どうしたのだろう。昨日は特にそんな様子も無かったのに、どこかしら――緊張しているように見える。新しい入院患者が同室に居ることが原因なのかとも思ったが、そういうわけでもないだろう。「えっと、その――」彼女は俺のベットの脇に備え付けられている椅子に腰を下ろす。「すみませんでした。昨日は、その、お見舞いと言いながら、何も持ってこなくて」

「えっ」

「人のお見舞い――という行為自体が初めての事だったので、作法とか、知らなかったんです。ごめんなさい」

そう言って深々と頭を下げる来夢ちゃん。俺は慌てて両手を振る。

あれ。

でも、そうすると、別の疑問が浮かび上がる。

「ねえ、じゃあなんで来夢ちゃん制服なの」

「私は、制服以外の服を持ってませんから」

俺の至極まっとうな質問に対し、来夢ちゃんは事も無げにそう答える。

俺はその返答に頭を抱えたくなつたが——だが、以前一度だけ訪れた事のある彼女の部屋——必要最低限のモノしか置かれていない彼女の部屋を思い出し——そういうこともあるかと、落ち着いた。いや、正確に言えば、その件について考えるのを止めた。

[illegible]

数分後、綺麗に皮を剥かれた林檎は、さらに彼女の手によって八分割され、食べやすい大きさとなった。

時間は掛かったものの、仕事自体は丁寧で、林檎にはほとんど角ばったところが存在しない。

そして、彼女は紙袋から爪楊枝を取り出し、林檎の一切れに刺すと――それを、そのまま、俺の眼前へとつきつけた。

えっと、それは。

いわゆる、「あーん」という奴で。

——いまでもなんでもいきなりそんな事をつていうか前にもこん

なようなことがあった気がするっていか少しは恥じらいみたいなものを見せたりしてくれてもいいんじゃないかなってほど来夢ちゃんは真顔だし悪質な悪戯って可能性やもしかしたらどつきりかもしれないし——

等と、そんな事を考えている、大分混乱気味の俺の耳に、

「やあ司、昨日ぶりだな——」

という幼馴染、日比野響の声が聞こえてきて——



回想終了。今に至る。

当然ながら来夢ちゃんと違い、日比野はジーンズに白いブラウス、という比較的ラフな（しかしそれでも洒落た雰囲気は損なわないよな）私服姿で、人差し指を眉間に当てため息をついた。

「はあ——まったく、いや——、本当に、なんて言ったらいいのか——」

ぶつぶつと、独り言を漏らす日比野。暫くその状態が続いたが、やがて視線をこちらに向けると、

「もう今日は帰る」

そう言い捨て、踵を返すと病室を出て行ってしまった。

俺と来夢ちゃんは少しの間、彼女の後ろ姿を目で追っていたが、「機嫌を、損ねてしまったようですね」

来夢ちゃんは林檎を元の位置に戻すと、呟いた。

「まあ、そうだろうね」

「——『つきあっているのか』という質問は、私と司くんが恋愛関係にあるのかを尋ねる質問——という事ですよね」

「まあ、そうだろうね」

「何故、そんな質問をしたのでしょうか」

惚けている様子も無く、本当に、何故そう誤解されたのかが解からない、といった調子で来夢ちゃんが首を傾げる。俺は先ほどの日比野のように溜息をひとつ吐き、来夢ちゃんに説明をする事にした。

「あのね、普通、誰かに直接モノを食べさせるような行為は行わないものなんだよ」

俺のその言葉に対し、来夢ちゃん是不思議そうに疑問を重ねる。

「でも——入院してる方に対しては、そうするのが礼儀だと——」

「それ、氷室にでも聞いたのか」

「ええ」

「それは嘘だ」

そう断言する俺。

来夢ちゃんはその言葉を聞くと、凍ったように停止し、顔がみるみる赤くなった。

「えっ、じゃあ、私っ——」

「担当れたんだ」

彼女はしばらく、固まったままだったが、時間を置くと少しずつ顔の赤みが引いていく。

やがて顔が元の白さを取り戻すと、能面のような無表情を顔に貼り付けて、言った。

「私、日比野さんの誤解をといてきますね」

宣言すると彼女はパイプ椅子から立ち上がる。声は氷のように冷たい。

「あの、来夢、さん——」

「それから、氷室、でしたっけ。彼を、どうにかしないといけないみたいです」

怒っていた。相当。

が、立ち上がったまま動こうとしない。奇妙に思っ て視線を向けると、彼女もこちらを向いた。

自然に、目と目が合う。

「でも」

来夢ちゃんは、少し不安そうな声色で、尋ねてくる。

「恋人では、ないですけど、私たち、友達、ですよ」

「——ああ、勿論」

「——ふふっ」

俺の答えに、彼女は満足そうに微笑んだ。

それは、普段の彼女からは想像もつかないような、可愛らしい微笑だった。

三章『《精神掌握》 その?』

「ところで」病室を出ようとした来夢ちゃんが、すんでのところで振り返る。「恵理香ちゃんは、どうしたのですか」

そう言えば、恵理香の姿を見ない。昼食の時にトイレに行きたいと意思表示をしたから、許可したのだが（この病室はトイレが部屋についていない）もう、三十分は経っている。いくらなんでも遅すぎる気がする。

「トイレに行くって言ってたけど、————流石にちょっと長すぎるな」

俺は立ち上がり、恵理香を探すことにする。その旨を来夢ちゃんに言うと、彼女は「そうですか、なら手伝います」と協力を申し出てくれた。

「いや、別につき合わせるつもりは無いよ」

「恵理香ちゃんが女子トイレに行ったのなら、まず探すべきはそこだと思いますが——司くんは女子トイレに入れますか」

当然、無理だ。

「生憎、まだそこまでの勇氣は、無い」

「出来れば、『まだ』でなく、『これから』そんな勇氣は持つて欲しくありませんが」

「————じゃあ、悪いけどお願いしていいかな」

「気にしないで下さい、私が言い出した事ですから」

恵理香を探すため、二人して病室を出る。

その際に丹下さんがニヤつきながら口笛を鳴らしたが、意図が掴めなかったので、無視した。

「いませんね」

来夢ちゃんはトイレから出てくると、形のいい眉を顰めた。

「いない——」

俺は壁にもたれたまま、眼鏡の位置を中指で直す。

てっきり恵理香がお腹でも壊したものだと思っていたのだが、予想に反して彼女はトイレにいなかった。

——正直、かなり困惑している。今まで彼女がそういった、ふらっと何処かにいってしまいうような事が無かったから、尚更。どうしたのだろう。

じわり、と焦りの感情が鎌首をもたげる。悪い想像ばかりが頭を過ぎる。いやな感じの汗が垂れ、俺の背中をじっとりと濡らす。

「あの」

目を上げると、来夢ちゃんが心配そうに俺の顔色を窺っていた。

「ああ、うん、ごめん。じゃあ、えっと恵理香が行きそうなところを探すかな」

そう言っただけ俺は壁から離れ、歩き出す。

歩きながら、恵理香が行きそうな場所を頭に思い浮かべようとするが——どこだろうか。

恵理香は普段いつも俺にくっついていて、俺の行動範囲がそのまま恵理香の行動範囲になる、といってもいい。

そうになると、ざっと思いつく場所は、俺の病室を除けば『休憩スペース』と『中庭』の二つほどだ。

だが、別にその二つ以外には行けない、という訳ではない。

一度、退屈をもてあましていた時に、俺と恵理香は一通り病院中を探検してみたりもした。

いや、しかしそもそも第三者と一緒にあれば、どこにでもいける

だろう。

——『第三者』。

頭に浮かぶその考えを、慌てて打ち消す。

いくらなんでも早計だ。過保護もいいところだ。俺にはシスコンの気があるのかもしれない。

ちよつとした自己嫌悪に陥る俺。——そのとき、不意に目の前に人影が現れた。早足で歩いていた俺は、突然の自体に対応できず、その人とぶつかってしまう。

軽い、衝撃。

衝突そのものは大した事なかったのだが、考え事に没頭していた俺は、容易くバランスを崩してしまう。

「痛っ」

そして、そのまま尻餅をついた。まだ右腕が動かせないので、口
クに受身もとれない。

「あら、つーちゃん」

ぶつかってしまった相手は、どうやらあの——やたらとテン
ションの高い看護師さんだった。

「そえじま副島 なるみ成美よ。いい加減覚えてね」

看護師さん——もとい、副島さんは倒れている俺に手を差し
伸べながら、ウィンクをかました。

「誰に自己紹介してるんですか」軽いツツコミを入れつつ立ち上
がる。「それより、すみません、不注意で」

「そうね。歩くときに音を殺す癖は早めに直しておいたほうがいい
わ」

「そんな癖はないです」

と、副島さんは俺の背後に目を向ける。そして、来夢ちゃんを視界に捉えると、底意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「あら、もしかしてつーちゃんの彼女さんかしら」

「違いますよ」

「じゃあ、妹さんね」副島さんは小首を傾げて問う。「ほんの少し見ない間に、随分大きくなったわね」

「もうツツコミませんよ」俺はジト目で副島さんを睨めつける。

「いやねえ、冗談よ、じょ・う・だ・ん」

うふふ、と笑った副島さんは、来夢ちゃんに向きなおり、にこやかに問い掛ける。

「あなた、つーちゃんのお友達ね」

「あ、はい。クラスメイトの小鳥遊、です」

副島さんが、つっと目を細める。

「あなた——綺麗ね」

副島さんは雌豹を髣髴^{ほうふつ}とさせる足捌きで来夢ちゃんに歩み寄り、目にも留まらぬ動きで背後に回りこむ。来夢ちゃんはびくりと身体を緊張させたが、反応できなかつたようだ。

「えっ、あのっ」

片腕でがっちりとか来夢ちゃんをホールドした副島さんは、逆の方の手で来夢ちゃんの顔をなぞるように動かす。

「ねえ、下の名前、教えてくれないかしら」

耳元で囁く^{ささやく}ようにして、問い掛ける。

「ら、来夢っていいですけど、その」

困惑の表情を浮かべた来夢ちゃんが、名乗り上げた。しかし、そ

んな彼女の様子をまるで無視したまま、副島さんは言葉を続ける。

「来たる夢、と書いて来夢——」妖艶な微笑を浮かべた。「——素敵な、名前ね」

そして高価な芸術品を愛でるように、妖しい指使いで来夢ちゃんの顔の輪郭を確かめるようにさする。背後から顔を近づけ、その長い舌を伸ばしゆっくりと——

「ひゃんっ」

その舌が来夢ちゃんの首筋に触れる寸前で阻止された。他でも無い、俺の手によって。

「ひどーい。つーちゃん何するのよー」

俺に頭をはたかれた副島さんは、頬をぷっくりと膨らましながら、非難めいた視線を俺に向ける。

「それはこちらの科白ですよ。変態行為はやめてくださいって、もう三回目ですよ」

そう、今回みたいな事態は一度や二度ではない。三回目なのだ。

ちなみに一度目の犠牲者は日比野。二度目の犠牲者は恵理香だった。

「あのねえ、つーちゃん。美少女っていうのは、もうそれだけで最高の価値を持つ至高の芸術品なのよ」

「ところで副島さん、恵理香を見ませんでしたか」

独自に展開される副島理論を無視し、俺は質問を投げかける。

「んー、えりりんならさっき休憩スペースの方にあたような気がするわね」

あまり答えは期待していなかったが、予想外に具体的な回答がもたらされる。俺は「ありがとうございます」と礼を言うと、早速休憩スペースへと足を向けることにした。

「それにしてもつーちゃん」

背後から副島さんの声が掛かる。

「なんですか」

「意外とつーちゃんってプレイボーイだったのね。美少女を四人も侍らせるなんて、そうそうできるものじゃないわ」

「恵理香は妹ですし、日比野と来夢ちゃんは友人です。それに四人って——あとひとりどこにいるんですか」

「もちろん、わ・た・し」

副島さんは自分の頬に人差し指をつきさし、首を傾けながら上目遣いをしてそんな戯言を紡ぐ。

俺は生ぬるい微笑を浮かべた。

休憩スペースでは、野崎さんが詰め将棋をしていた。将棋盤を見据える眼光は鋭い。

「野崎さん、こんにちば」

俺が挨拶をすると、彼は盤面を睨んだまま、片手を挙げる。

「よう、坊主」

野崎さんは日中たいていこの休憩スペースに詰めて、将棋を打っている。俺が相手をしている時もあれば、さっきみたいに詰め将棋をしている時もある。俺が始めて野崎さんに誘われた時もひとりで将棋を指していたから、もしかしたら俺以外に相手はいないのかもしれない。

野崎さんは足を痛めているらしく、松葉杖を机に立てかけていたが、それをおもむろに退かした。そして手に持っていた将棋の本を閉じると、こちらに視線を向け、呵々と笑う。

「なんだ、なんだ坊主。えらく乳のでかい別嬪さんべっぴんを連れてるじゃあねえか」

野崎さんが来夢ちゃんを見て言う。俺は野崎さんに「下品ですよ」と忠告しようとして——。

何かが倒れる音が聞こえた。

驚いてそちらを振り返る。

俺の背後にあたる方向。そこには当然来夢ちゃんが居て――。

青ざめた表情で、野崎さんを見据えていた。

彼女の足元には椅子が倒れており、それが先ほどの音の原因だったのだと理解すると同時に、俺は彼女の尋常じゃない様子にたじろぐ。

蒼白な、顔色。

その瞳に浮かべた色は―――恐怖。

そしてその感情は、俺の眼前に座る老人――野崎庄司に向けられていた。

「―――っ」

何か声をかけようと思った俺が、言葉を発するよりも早く来夢ちゃんは踵を返す。

そして逃げるようにして休憩スペースから走り去ってしまった。まさに、脱兎の如く。

一体どうしたのだろう。俺はしばし呆然とし、それから野崎さんの方を一瞥する。

「知り合い、だったんですか」

だとしたら、あの怯えようにも少しは説明がつく。が、しかし。

「いや――初対面、なんだがな」

野崎さんはそう、言った。豊かな白髪を掻き、本当に自分が何故

あんな反応をされたのか、理解できないといった顔をしている。

「坊主、あの嬢ちゃんの名前はなんていうんだ」

「小鳥遊、ですけど」

「たかなし、ねえ」

「小鳥が遊ぶ、と書いて、そう読ませます」

俺の補足に対し、「ああ、その“たかなし”ね」と野崎さんは得心がいったという様子で頷く。

「……だけど、やっぱり聞き覚えがねえな。そんな珍しい名前の知り合いなら、忘れるわけはねえし」

「そうすると」俺は少し考えをめぐらせる「さっきの言葉、だったりますかも、ね」

俺の指摘に対し、野崎さんは眉をひそ顰める。

「そんなもんなのか」

「いえ、可能性の一つですけど、女の子が初対面の人にセクハラ発言されるのって、やっぱり怖かったりするんじゃないですかね」

野崎さんは納得がいけない、といった表情をしていたが、ややあって。「ま、坊主がそういうんなら、そうかもしれないな」と呟いた。

「それにしても、坊主」

「なんですか」

「追わなくて、いいのかい」

「そりゃ、追ったほうが、いいんでしょうけど」

俺はそこでひとつ呼吸を置き、野崎さんに問い掛ける。本来の目的を忘れてはならない。

「恵理香——俺の妹を、見ませんでしたか。看護師さんの話によれば、ここに居たはずなんですけど」

その質問に対し、野崎さんはすこし思出すような素振りを見せてから、答えた。

「ああ、妹さんか。確かにほんのちょっと前までここにいたが。ついさっき、————なんか見知らぬ患者と一緒に、屋上に上がって

「
な
た、
っ

四章『《精神掌握》　その？』

さほど抵抗もなく屋上のドアが開く。すると、『五月晴れ』の言葉にふさわしい太陽光が、俺を明るく照らし出した。

太陽の明るさに慣れず、俺は掌を目の上にかざし、光から眼球を守るようにして屋上を見渡す。

申し訳程度に設置された、青いベンチ。風にはためく大量の洗濯物。この病院の中で地面から最も遠いこの場所は、どこことなく孤独で、寂しげな印象を抱かせる。――まあ、人のいない場所というのはすべからく、そういったものを与えがちではあるが。

その屋上であるこの場所に、俺の探し人である恵理香がいた。

屋上に設置された、三つあるベンチの一番端。つまり入り口から最も遠いベンチに腰掛けていた。

それは、野崎さんから教えてもらった情報が正しいという事を意味していたが――しかし、もう一方の情報も同時に正しかったのだと俺は理解した。

つまり、

この屋上に、

俺と恵理香以外の、『第三者』が、いたのだ。

そいつはベンチに腰掛けた恵理香の正面に、パイプ椅子使って陣

取っていた。恵理香に向き合うような形で、間にキャンバスを挟み、なにやら画材道具のようなものをいじくりまわしている。

距離が少し離れているが、どうやら女の子——女子高生くらいの、女の子だということが見て取れた。また、病院服を着ていることから、この患者なのだというのもわかった。

それ以外の事はわからなかったが、兎に角、俺は恵理香を連れ帰らなければならない。そう思って足を踏み出すと、その音に気付いたのか、病院服の女の子がこちらの方を向いた。

しかし、俺は妙だと感じる。

俺が入ってきたにもかかわらず、さらに、すぐ傍にいる女の子が俺の侵入に気付いたにもかかわらず、恵理香がまるでこちらを見ないのだ。この距離、——多少遠いが、気付かないはずが無いのに。

俺は不思議に思いつながら、彼女達との距離を詰める。

女の子は俺の接近にも対して焦った様子を見せずに、鞆——先ほどまで画材を探していた、皮製の鞆から何かを取り出す。

何か。

それは、端的に言えば、ハンドベル、だった。

そう、ハンドベル。鐘に柄が着いており、そこを持って振るようにして音を出す、楽器だ。当然、一つのベルで一つの音しか出せないから、曲を演奏する際は、音の違うハンドベルを沢山用意し、それぞれのベルを別の人間たちが演奏しなければならない。

おそらく全ての部分が銀で出来ており、また持ち手やベルの部分に細かい細工が施されてはいたが——兎に角、それは、ハンドベルだった。

距離を詰める。

彼女の顔が、はっきりと見える距離まで近づいた。
その表情は、どこか面倒臭^{めづ}そう。

そして彼女は、気怠^{けだる}げにハンドベルを鳴らした。

澄んだ、音。

たった、一音。

しかし、美しい、音。

ほんの、ひとつの音。

だけどそれは聖歌隊のような。

今まで聞いた、どんな音より美しく、繊細で、高尚で、清涼で、
静かで、切ない。

そんな、音だった。

まるでこの世のものとは思えない音に、俺の足が思わず停止する。
彼女の唇は、俺が止まったのを確認すると、ゆっくりと、言葉を
紡ぐ。

【「ここで」「見た」「事を」「忘れて」「立ち去りなさい」】

彼女の声は、ついさっき鳴らされたハンドベルのように澄んでいて――

――しかし、それだけだった。

俺は、恵理香の下へと駆け寄る。しかし、恵理香は俺がすぐ目の前にいても何の反応も見せない。肩を揺らしても、人形のように呆然と空を見ているだけだ。

「――って、ちよつとっ」

声を掛けられ、俺は振り向く。ハンドベルを片手に持った女の子が、訝しげにこちらを見ていた。

「あなた、聞こえなかったの」

「何が」

「忘れて、出て行って、言ったのよ」

「そりゃ聞こえたけど」俺は意識して不機嫌な声を出す。「この子は俺の妹なんだ。なんで初対面の、君の命令なんか聞かなきゃいけないんだ」

彼女の言葉に軽口で返す。

すると彼女は首を傾げ、手にしたハンドベルをじっと見据え、「おかしいわね」と呟いた。

ああ、これは、ひょっとして。

――まあ、予想はついていたけど。

「――沢村先生」

彼女が、ぼつりと漏らす。その声の大きさがそれほどのものでもなかったから、一瞬俺は「サワムラセンセイ」という単語を理解できなかった。

「はい、なんででしょう」

しかし、彼女の声に呼応するように、突如女の人が出現した。

ハンドベルを持つ女の子のやや後ろに、まるで今までずっとそこにいたかのような自然さで、これ異常なく不自然に出現したのだ。

スーツを着て、髪の毛を頭の上で束ねている。銀縁の眼鏡をかけるその姿は、『キャリアウーマン』という言葉がとてもよく似合う出で立ちだ。社長秘書、と言ってもいいかもしれない。

少々混乱した頭でそんなことを考えたが、しかし、その超常現象を目の当たりにしたことで、俺はかえって確信を持つ。

間違いない。この女の子は――。

「沢村先生。【ジョイフル・ジョイフル】が作動しない。故障したの。私は故障したと思うのよ」

空中から出現せしめた『沢村先生』に向かい、不機嫌そうな口調で告げる女の子。その言葉を聞き、沢村先生は溜息をひとつ吐き、眼鏡を押し上げてから、言う。

「アリア、貴女は私の説明を聞いていたのですか。【ジョイフル・ジョイフル】には発動条件がある、そう言ったはずですが」

「沢村先生の話は長いから、聞き流していたわ」

「――」

「もういちど教えてくださるかしら。私は教えて欲しいと思うのよ」

「――」

「でも、なるべく短く、簡潔にお願いね」

「――いいでしょう。良く聞いてください、アリア。【ジョイ

フル・ジョイフル】は、他の【道具】の所有者には、効果がないのです」

「あら、そうなの」

「そうです。だから——」

「その先は結構よ、沢村先生。それ以上聞いても多分覚えきれないわ。私は覚え切れないと思うのよ」

話を中断された沢村先生は、何か言いたそうに口を動かしていたが、ややあつて、もう一度大きな溜息を吐くにとどめた。

病院服姿の女の子——アリア、と呼ばれていた女の子は、それから、視線を俺の方に向ける。空虚な双眸が、俺を捉える。

「なるほど、つまり、貴方は、私と同じ【道具】の所有者、なのね」

「まあ、そうなるね」

俺は視線を逸らし、頬を掻きながら、同意した。

「私は、自分以外の所有者と会うのは、初めてよ」

「そうなんだ」

「——私の名前は、辻井^{つじい} アリア」

そこで一旦間を取り——

「《精神掌握^{マインドコントロール}》。それが、私に与えられた、道具だと思うのよ」

——そう、言った。

五章『《精神掌握》 その？』

「あなたの名前を、教えてくだらないかしら。私は教えて欲しいと思うのよ」

そう言つて、マインドコントロール『《精神掌握》』の性質を持つ辻井アリアは、にこりと笑った。肩のあたりで切りそろえられた亜麻色の髪が、風に揺れる。

「時田、司」

俺の答えに、彼女は満足そうに頷いた。

「時田君、ね」

視線を椅子に座る恵理香へと向ける。そしてそのまま空へ。数秒、考えるような素振りを見せた後、彼女は俺に向き合った。

「うん、そうね——やっぱ、貴方のほうが、いいかもしれない」
ぶつぶつと独り言を呟く辻井アリア。——静かな足取りでこちらに歩み寄ると、俺の顔を覗き込んできた。下から見上げるような視線に、少したじろぐ。

「——」

穴が開くほど見つめられ、俺は思わず息を止める。じつくりと観察され、緊張が走った。

間合いは、限りなく零に近い。どちらかが敵意を持って攻撃行動に出れば、確実に相手の命に手が届く——そういう距離だ。俺は警戒しつつも、何故かその間合いから逃げられないでいた。

そうしてたつぷりと観察したあと、彼女は俺から一歩離れた。

唇に人差し指をあて、なにやら思案している表情を見せる。しかし、その双眸はどこか気だるげで、無気力な印象を俺に与えた。

「ねえ、時田君——」そして、口許を斜めにする。「——取引、しませんか」

「——『取引』」。

俺は彼女のその言葉を、脳内で反芻する。

無論、その提案は願ったり叶ったり——とまではいわないものの、少なくとも今現在彼女にどうのこうのしようとする気がないことに、内心でそつと息をつく。

「まあ、内容次第、かな」

「ええ、でしょうね。そうでしょう、そうでしょうとも」

取引が成立すると決まったわけでもないのに、辻井アリアは嬉しそうにくつつつと笑う。

「ふむん、それでは——沢村先生っ」

彼女は声高らかに『天使』を呼ぶ。俺達から数メートル離れた場所に居る沢村先生が、こちらに歩み寄ってきた。そして面倒臭そうな声色を隠そうともせず、言う。

「なんででしょう、アリア」

「沢村先生、こちらの時田君に、私の【ジョイフル・ジョイフル】について、説明してあげて。説明すべきだと、私は思うのよ」

その提案が意外だったのだろう、沢村先生は少しだけ、目を開いた。

「よろしいのですか」

「ええ、私がそうして欲しいと、思ってるのよ」

俺にとってもその提案は、多少は驚きに値するものではあったが——しかし、考えてみれば停戦協定を張るというのならば、当然、互いの【道具】について把握しておくのは必須条件になるだろう。そこに誤魔化しの余地を与えないというのならば、天使を介入させての説明というのも、説得力がないわけではない。

「しかし」沢村先生は、眼鏡の位置を直しながら、問う。「説明なら、あなたがすればいいのでは」

その質問を、辻井アリアは鼻で笑う。

「何を言っているの、沢村先生。私が、いちいちそんなことを覚えていなくても、思っているのかしら」

「——」

A vertical sequence of 16 shapes arranged in two columns of eight. The left column contains eight solid black diamonds, and the right column contains eight white squares with black outlines. They are perfectly aligned horizontally, creating an alternating pattern from top to bottom.

312



「まあ、さしあたって説明すべきことは、この程度でしょうか」

沢村先生が説明を終える。俺は【ジョイフル・ジョイフル】の使用方法をメモした紙から顔を上げた。

「辻井さんが『覚えていない』、と言っていたから、どれほど複雑なのだろうと思っていたんですが、そうでもなかったですね」

正直な感想だった。身構えてメモまで取ったのに、用紙のほとんどのスペースが空いてしまっている。

「まあ、アリアは難しくて記憶できない、——というより興味が無いのでしょ」

沢村先生のその言葉にひっかかりを覚える。俺は視線で今の言葉の意味を尋ねようとしたが、先生は、軽く肩をすくめただけだった。（ちなみに辻井アリア本人は、沢村先生が説明を始めると恵理香の方に歩いていってしまった）

「何か、訊きたいことは、ありますか」

それは【ジョイフル・ジョイフル】に関することだろう。

「そうですね——」少し、考える。「同時に複数の人間を操ることは、できますか」

「無理です。操れる人間は一人まで。すでに失調状態の人間が居る場合、その状態を解除してからでないと『音』はなんの効果も果たしません」

「解除は、時間が経過するまで不可能ですか」

「精神失調状態の人間に、もう一度【ジョイフル・ジョイフル】の音を聴かせることで、強制的に解除させることもできます」

新しい情報をメモに追加していく。

「音の聞こえる範囲に、複数人間が居た場合、誰が失調状態になるんですか」

「【ジョイフル・ジョイフル】に限ったことではありませんが、【道具】は所有者の精神に依存する部分が大きいです。ですから、そういった場合には所有者が操作したいと思った人間を操る事ができる——そう考えてもらって結構です」

「命令は、どの程度のものでできますか」

「文節制限を守っていただければ、ほとんどの事が可能ですが——そうですね、人間の精神を喪失させて、操り人形のようにしてから操作を行うので、必要以上に頭脳を使う命令は無理でしょう。また、感情を操ることはできませんし、操られている間の記憶は、消失します」

「操作されることで、何か人体に副作用があったりはしますか」

「——妹さんのことが心配なのです。大丈夫です、一切ありません」

いくつかの質疑応答を終えると、沢村先生は口元に笑みを浮かべていた。

「どうしました」

「いえ、やはり私でもありますね、『天使』らしく饒舌な部類ですから、

説明するのが好きだったりするんですよ」

「ああ、なるほど」

「アリアは、悪い娘ではないのですが、こういう質問みたいなことをしてくれませんかね」

確かに、少し話しただけではあるが、辻井アリアはなんとなく、【道具】に執着していないように思える。こちらとしてはそのほうが争いの種も無く、平和で喜ばしい限りなのだが。

「終わったかしら」

【ジョイフル・ジョイフル】に関する説明が終了したのを見て取ったのか、辻井アリアがこちらに歩み寄ってきた。俺は彼女に相対する。

「ああ、大体のところを理解した。今度は俺が、君に自分の【道具】について解説すればいいんだな」

しかし、俺がそう言うのと辻井は目を丸くした。そして、ややあってから笑う。

「いえ、別に教えてくださらなくても、結構よ」

くつくつと、おかしそうに声をあげながら、言葉を紡ぐ。どういうことだろう。

「――私が貴方に自分の道具を説明したのは、『取引』の前提条件であって、取引そのものじゃあないわ」

「――意図がわからないな。一体俺は何をすればいいんだ」

俺の質問に対し、辻井は笑顔を消す。そして、俺から視線を外すと、どこか遠くの空を見始めた。

「ねえ、時田君。私の趣味って、なんだかわかるかしら」

その質問に少し考える。しかし、答えは直ぐに出た。

「絵を描くこと」

「正解」

簡単すぎる。クイズになってないだろ、とは言わないでおく。

「病院に居る間、沢山の種類の絵を描いたわ。静物画、風景画、抽

象画、水彩画、油彩画、日本画、西洋画、ほんとうに、沢山」

「絵を描くのが、好きなのか」

「———少なくとも、ヴァイオリンを弾くよりは、ね」

ヴァイオリンも弾けるのか。多趣味だな、おい。

「でもね、いまだにひとつだけ、描けていない絵があるの——」

そこで一旦間をとり、外していた視線を再び俺に向ける。

「——人物画、よ」辻井は言う。「流石に人物画はモデルとなる人間がいないと描けないから」

それはそうだろう———と、いう事は、まさか。

「【道具】の説明と引き換えに恵理香をモデルとして差し出せ、というのか」

「残念、外れよ」

辻井は息を吐く。

「最初はそのつもりだったんだけど——ほら、私人見知りじゃない。だから、折角だし、【ジョイフル・ジョイフル】を使ってこっそりと、彼女にモデルになってもらう——はずだったのよ」

「無断でか」

「独断でよ」

悪びれた様子もなく、飄々とした態度の辻井。肖像権が迷子だ。

「まあ、兎に角、彼女——恵理香ちゃんだっけ、彼女よりも理想的なモデルが見つかったから、協力はそちらの方をお願いするわ」

「誰だ」

また【道具】により強制的に、というのは倫理的に頂けない。説得するための協力ならある程度は行おうと、

「君よ」

———。

「私の理想的なモデルは、時田君、君なのよ」

微塵もゆれない、強い視線が俺を射抜く。

「それが、『取引』の内容ですか」

思わず敬語になる。

「そう。絵のモデルのバイトを、一週間——引き受けてくれるかしら」

「——卑怯だな。既に対価を払ってから、是非を訊くなんて」

そうだ。すでに彼女は【道具】の説明をしてしまっている。そちらの条件はすでにクリア済みなのだから、ここで断ることは、——かなりやり辛い。

しかし、彼女はチェシャ猫のような笑みを浮かべると、言葉を続ける。

「違うわ。それは誤解よ。さっきも言ったでしょう【ジョイフル・ジョイフル】の説明は、あくまで『取引』の前提条件であって、内容じゃあないわ。——簡単に言えば、貴方が協力してくれた後あるうまみは別よ」

否定する。

ほんの数十分話していて、彼女はことごとく俺の予想を外してき

た。

「じゃあ、一体なんなんだ」

「【道具】よ」

彼女は何てこと無いように言い切る。

「なん、だと」

「もし、ちゃんと私の絵に協力してくれたなら、【ジョイフル・ジョイフル】をあげる。そう言ってるのよ」

あまりのことに、猜疑心うんぬん以前に言うべき言葉が見当たらない。

——いくら【道具】に執着が無い、とはいえ、そんなことがあるのだろうか。

だが、そもそもこんな『取引』、成立しそうにない。

困惑。

疑惑。

俺は思わず沢村先生の方を見やる。

きっとこれは天使の彼女にとっても予想外に違いないからだ。

しかし、俺の予想を裏切って、沢村先生は平然としていた。「こういうこともある」とでもいったそうな表情だった。

それは一種の諦観のようで――

どういう事だ。

――やはり、『罨』、なのか。

ぐるぐると、思考が巡る。どう反応していいのか、わからない。そんな俺の様子がおかしかったのか、辻井アリアはくすりと笑った。

「時田君ったら、疑い深いのね」

そして、一步近づく。

「いいわ、あなたが納得できるような、『理由』を、教えてあげる」

さらに、もう一步。

「あのね、私は――」

子供同士のする内緒話のように、俺の耳に口を寄せる。
亜麻色の髪から漂う香りが、俺の鼻腔をくすぐった。

「――私の余命は、あと一週間なの」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8842q/>

人生ゲーム～おきのどくですが ぼうけんのしょは きえてしまいました～

2011年8月19日12時36分発行